

表情表出による情動調整の特性
に関する実証的検討

藤本素子

2014年

目次

第 1 章 情動調整に関する研究動向	1
1-1. はじめに	1
1-2. 情動調整 (emotion regulation) の定義	2
1-3. 情動調整に関する実験的研究の概観	5
1-3-1. 情動調整の情動的影響	5
1-3-2. 情動調整の認知的影響	8
1-3-3. 情動調整の対人的影響	9
1-3-4. 情動調整の実験的研究に関するまとめ	9
1-4. 情動調整に関する質問紙調査による研究の概観	11
1-4-1. 情動調整に関する個人差	11
1-4-2. 情動調整が行われる動機や相手	12
1-4-3. 質問紙調査による研究のまとめ	13
1-5. 表情表出による情動調整に関わる要素	14
1-5-1. 表情表出に関する研究	14
1-5-2. 表情表出における文化差と表示規則	15
1-6. 第 1 章のまとめ	18
1-6-1. 本論文の目的	18
1-6-2. 本論文の構成	19
第 2 章 表情表出による情動調整が行われるプロセス	22
2-1. [研究 1] 表情表出による情動調整の日常経験に関する調査	22
2-1-1. 問題と目的	22
2-1-2. 方法	23
2-1-3. 結果	24
2-1-4. 考察	29
2-2. [研究 1] のまとめ	34
第 3 章 表情表出による情動調整が調整者自身に及ぼす影響	36

3-1. 問題	36
3-2. [研究 2] 表情表出の抑制・誇張が調整者の情動経験と記憶に及ぼす影響	39
3-2-1. 目的	39
3-2-2. 方法	39
3-2-3. 結果	42
3-2-4. 考察	48
3-2-5. [研究 2]のまとめ	51
3-3. [研究 3] ネガティブ情動の不一致表出が調整者の情動経験と記憶に及ぼす影響	52
3-3-1. 目的	52
3-3-2. 方法	52
3-3-3. 結果	53
3-3-4. 考察	57
3-3-5. [研究 3]のまとめ	58
3-4. [研究 2]と[研究 3]のまとめ	59

第 4 章 擬似的対人場面において表情表出による情動調整が受け手に及ぼす影響

61

4-1. [研究 4] 不一致表出が受け手の情動と対人印象判断に及ぼす影響	61
4-1-1. 問題と目的	61
4-1-2. 方法	62
4-1-3. 結果	65
4-1-4. 考察	71
4-2. [研究 4] のまとめ	75

第 5 章 2 者の会話における表情表出による情動調整

78

5-1. [研究 5] 2 者の会話における表情表出の抑制・誇張が受け手や会話に及ぼす影響	78
---	----

5-1-1. 問題と目的	78
5-1-2. 方法	81
5-2. 2者の会話における表情表出による情動調整が受け手に及ぼす影響	85
5-2-1. ビデオ映像分析方法	85
5-2-2. 結果	86
5-2-3. 考察	92
5-3. 2者の会話における表情表出による情動調整が会話の印象に及ぼす影響	97
5-3-1. 問題と目的	97
5-3-2. 方法	97
5-3-3. 結果	99
5-3-4. 考察	100
5-4. [研究 5] のまとめ	101
第 6 章 総合考察	104
6-1. 研究成果のまとめ	104
6-2. 表情表出による情動調整の特性	110
6-2-1. 表出抑制と表出誇張の比較	110
6-2-2. ポジティブ情動とネガティブ情動の違い	110
6-2-2. 対人場面において表情表出による情動調整が及ぼす影響	111
6-3. 表情表出による情動調整の生起プロセスと役割への示唆	112
6-4. 展望	114
6-4-1. 情動調整の様々な方略について	114
6-4-2. 調整者の個人特性	114
6-4-3. 方略や情動、動機の種類別による詳細な検討	115
6-5. 情動調整に関する神経学的基盤	117
6-6. 終わりに	119

引用文献	121
付録	131
初出一覧	167
謝辞	168

第 1 章 情動調整に関する研究動向

1-1. はじめに

私たちは、日常生活において、様々な情動 (emotion) ¹を経験し表出する。情動の表出は、周囲との良好な関係を維持する上で適切に作用することもあれば、悪影響を及ぼすこともある。私たちは、情動の表出によって他者との関係に悪影響が及ぶことを回避しようとするため、生起した情動をそのまま表出することは少ない。例えば、友人の悲しい経験の話を聞くときは自分が感じる悲しみ以上に悲しそうな顔をしたり、笑ってはいけない状況で面白いことが起こったときは笑いを必死でこらえようとしたりする。私たちはこのような情動調整 (emotion regulation) ²を日常的に絶えず行っている (Richards, 2004)。

適切な情動調整は、快適な日常生活を送る上で、また他者と円滑なコミュニケーションを行う上で必要不可欠である (Demaree, Schmeichel, Robinson, & Everhart, 2004)。先行研究においても、様々な情動調整方略について、調整者自身および受け手に及ぼす影響や、2 者関係に及ぼす影響が比較検討されてきた。本論文では、表情表出を増減させる、あるいは偽ることによる情動調整に焦点を当てた。表情表出による情動調整が行われるプロセスの一部を示し、各調整方略が及ぼす様々な影響について比較検討することで、表情表出による情動調整の機能について考察し明らかにすることを目的とした。

本章では、情動調整に関連する先行研究についてまとめた後、情動調整研究における本論文の位置づけを示し、本論文の目的および構成について述べる。

¹ 本論文では、一貫して、“emotion” の訳語として「情動」を使用する。情動は、主観的経験や行動、生理的反応における相互に関連した変化を含む全体的現象である (Gross & Thompson, 2007)。主観的経験には、いわゆる「気持ち (feeling)」とされる主観的情動経験も含まれる。

² 本論文では、“regulation” を「調整」と訳した。制御、調節など、様々な訳語が使用されているが、“emotion regulation” という用語が最初に使われた発達心理学の分野において、「調整」という訳語が比較的好く用いられることに倣った。

1-2. 情動調整 (emotion regulation) の定義

情動調整(emotion regulation)とは、どのような情動を、いつ、どのように経験し表出するのかを調整しようとするプロセスである(Gross, 1998b, 2002; Kunzmann, Kupperbusch, & Levenson, 2005)。怒りや悲しみ、不安といったネガティブ情動が抑制されようとすることが多いが(Gross, Richards, & John, 2006)、ネガティブ、ポジティブ、いずれの情動についても、減少、増大、維持といった様々な情動調整が行われうる。また、情動調整の多くが意識的にコントロールされたものであるが、無意識的・自動的に行われることもある。

Gross らによれば、情動調整は、情動が生起する過程の様々な段階において様々な方略で行われる (Gross, 2001, 2002; Gross & Thompson, 2007)。Figure 1-1 は、その過程を図示したものである(Gross, 2001)。情動生起過程において情動調整が行われ得る 5 つの段階があり、それぞれ、(a) 状況選択 (situation selection)、(b) 状況修正 (situation modification)、(c) 注意配置 (attentional deployment)、(d) 認知的変化 (cognitive change)、(e) 反応調節 (response modulation) と名付けられている。前半の 4 つの段階で行われる情動調整は先行焦点型 (antecedent-focused) とされ、情動反応傾向が引き起こされる前の段階における方略である。最後の段階で行われる情動調整は反応焦点型 (response-focused) とされ、情動反応傾向が引き起こされた後に行われる方略である。Gross (2002) に従って、各段階について順に述べる。

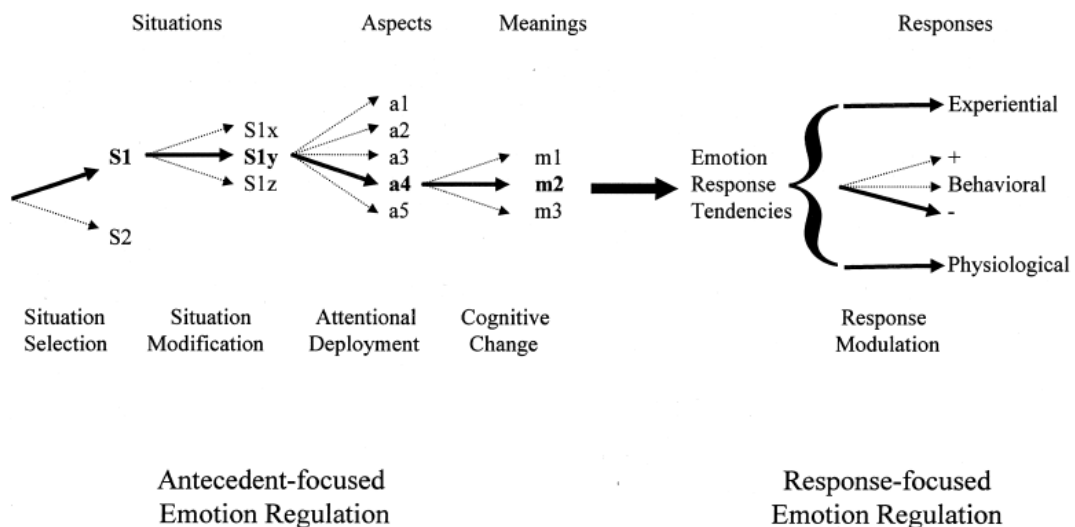


Figure 1-1. 情動調整のプロセスモデル (Gross (2001) より引用)

1つ目の段階は、状況選択（**situation selection**）である。この段階では、何らかの人や場所や物に対して近づこうとする、あるいは避けようとすることで情動調整を行う。例えば、大事な試験の前日に、友人と楽しくご飯を食べるか、あるいは他の同級生と一緒にぎりぎりまで勉強するかを決める、という状況が考えられる。

2つ目の段階は、状況修正（**situation modification**）である。この段階では、選択された外的な状況に対して直接的に修正しようとするすることで、情動的インパクトを変化させる。例えば、大事な試験の前日に、友人からの電話で、試験勉強ができていないか尋ねられた時に別の話題について話す、といったことである。

3つ目の段階は、注意配置（**attentional deployment**）である。選択された状況には様々な側面があり、それらのどの側面に注意を向けるかによって情動調整を行う。例えば、天井のタイルを数えることによって、動揺するような会話から注意をそらすというものである。この段階における主要な方略として、気晴らし（**distraction**）と注意集中（**concentration**）の2つがある。気晴らしとは、状況の異なる側面に注意を向けたり状況そのものから注意を逸らしたりすることである。注意集中とは、状況の情動的特徴に注意を向けることである。

4つ目の段階は、認知的変化（**cognitive change**）である。注意を向けられた状況の一側面が持ち得る多くの意味の中から、いずれかを選択することになる。例えば、ある試験に対して、単なる試験と捉えるのではなく、自分自身の価値を測るものと捉えることができる。この段階における方略の1つに、再評価（**reappraisal**）がある。再評価とは、情動的インパクトが変化するよう状況の意味を変えることである。

5つ目の段階は、反応調節（**response modulation**）である。すでに引き起こされた何らかの情動反応傾向（生理的反応、情動表出等）に影響を及ぼす方略がとられる。例えば、試験に落ちたきまりの悪さを隠そうとするというものがある。

本論文で扱った表情表出による情動調整は、反応調節段階で行われる方略で、情動が引き起こされた後に情動反応の1つである表情表出を増減させる、あるいは偽ることによって行われる。表情表出による情動調整は日常よく使われる

方略であり(Richards, Butler, & Gross, 2003), 社会的相互作用に影響を与えるとされている(Lopes, Salovey, Côté, & Beers, 2005)。これらの方略が果たす機能を明らかにすることは良好なコミュニケーションの実現にとって重要であると考えられる。

表情表出による情動調整には、主に3つの方略がある。表出抑制(expressive suppression)、表出誇張(expressive exaggeration)、不一致表出(expressive dissonance)である。表出抑制とは、悲しいときに泣くのをこらえるなど、何らかの情動を経験したときに表情による情動表出を抑えることである(John & Gross, 2004)。表出誇張とは、楽しい話を聞いて実際に感じた以上に楽しそうな表情をするなど、情動を経験したときに表情による情動表出を大げさにすることである(Demaree et al. 2004)。不一致表出とは、悲しいときにも笑顔を見せるなど、何らかの情動を経験したときに、経験した情動とは一致しない情動価の情動を表出することである(Robinson & Demaree, 2007)。

次節より、表情表出による情動調整に関してこれまで行われてきた研究を中心に、情動調整に関わる先行研究について述べる。

1-3. 情動調整に関する実験的研究の概観

情動調整に関連する心の機能については、古くから取り上げられてきた。フロイトによる自我の防衛機制の概念に始まり (Freud, 1936 外林訳, 1985), 情動焦点型コーピング (e.g., Folkman & Lazarus, 1980), 愛着理論 (Bowlby, 1969), 情動理論 (Frijda, 1988) など, 情動状態を変化させる, あるいは引き起こされた情動に対して適切な行動をとろうとする働きについて多様なアプローチが取られてきた。最初に情動調整 (emotion regulation) が明確な構成概念として広く使われるようになったのは, 1990年代前後の発達心理学の分野においてである (e.g., Campos, Campos, & Barrett, 1989; Thompson, 1991)。その後, 成人を対象にした研究においても情動調整という概念が広まり (Izard, 1990; Gross & Levenson, 1993), Gross らの一連の研究を中心に, 情動調整の機能について様々な検討がなされるようになった。

Gross らの一連の研究では, 再評価と表出抑制という異なる段階の 2 つの方略に焦点を当て, どちらの方略がより適切な情動調整方略であることを示すことを主な目的として, 実証的研究が行われてきた (Gross, 2001, 2002; John & Gross, 2004)。その中で, 再評価と表出抑制について, 情動的, 認知的, 対人的, 3 つの側面に及ぼす影響が明らかにされてきた (John & Gross, 2004)。近年では, Demaree らによって表出誇張や不一致表出に関する実証的検討も行われ (Demaree et al., 2004; Demaree, Robinson, Pu, & Allen, 2006; Robinson & Demaree, 2007, 2009), その情動的, 認知的影響が検討されてきた。

先行研究においていずれの情動および情動調整方略が扱われてきたかを, Table 1-1 にまとめた。

次項より, 各影響について順に詳しく述べる。

1-3-1. 情動調整の情動的影響

情動的影響とは, 情動調整を行う調整者自身の主観的情動経験や生理的反応が情動調整方略によってどのように変化するかについて検討したものである。実験手法としては, 個別実験で, 映像視聴中にいずれかの情動調整を行うよう予め教示してから情動喚起映像を呈示し, 視聴中に何らかの生理的反応を測定し, 視聴後に主観的情動経験の自己報告を行うというものであった。

Table 1-1. 先行研究で扱われた情動と調整方略

ポジティブ情動		ネガティブ情動
再評価		Butler, Egloff, Wilhelm, Smith, Erickson, & Gross, 2003; Gross, 1998b; Richards & Gross, 2000
表出抑制	Gross & Levenson, 1997	Butler et al., 2003; Gross, 1998a; Gross & Levenson, 1993, 1997; Richards & Gross, 1999, 2000; Robinson & Demaree, 2009
表出誇張	Demaree, Schmeichel, Robinson, & Everhart, 2004	Demaree et al., 2004; Robinson & Demaree, 2009
不一致表出		Robinson & Demaree, 2007

再評価に関しては、ネガティブ情動について検討された（Gross, 1998a）。ネガティブ情動喚起映像を視聴中に意図的に再評価（映像に対して、情動的な態度で見るのではなく客観的に見るよう教示）を行ったところ、調整者のネガティブ情動（嫌悪）の主観的経験が統制条件（映像視聴中に情動調整を行わない条件）よりも低下することが示された。また、交感神経活動（指尖脈波、皮膚コンダクタンス反応等）や心拍などの生理的反応は、統制条件と変わらなかった。

表出抑制に関しては、ポジティブ、ネガティブ両情動について検討された（Gross, 1998a; Gross & Levenson, 1993, 1997; Robinson & Demaree, 2009）。ポジティブあるいはネガティブ情動喚起映像を視聴中に意図的に表出抑制（何らかの情動を経験しても、他の人に気づかれないよう、できるだけ表出しないよう教示）を行ったところ、ネガティブな情動経験（悲しみ、嫌悪）は統制条件と変わらないという結果が頑健に示された（Gross, 1998a; Gross & Levenson, 1993, 1997; Robinson & Demaree, 2009）。一方、ポジティブな情動に関しては、表出抑制をすることによりポジティブな情動経験（楽しさ）が低下した（Gross & Levenson, 1997）。また、生理的反応は、どちらの情動に関しても、統制条件よりも増大することが示された（Gross, 1998a; Gross & Levenson, 1993, 1997）一方で、ネガティブ情動（悲しみ）において、一部の指標（皮膚コンダクタンス反応等）では統制条件と変わらないという結果もみられた（Robinson & Demaree, 2009）。

表出誇張に関しては、ポジティブ、ネガティブ両情動について検討された (Demaree et al., 2004; Robinson & Demaree, 2009)。ポジティブあるいはネガティブ情動喚起映像を視聴中に意図的に表出誇張（何らかの情動を経験したときに、他の人が見ても分かるよう、できるだけ大きく表出するよう教示）を行ったところ、主観的な情動経験に関しては、ポジティブ情動（楽しさ、満足）、ネガティブ情動（嫌悪、怒り、悲しみ）、どちらについても統制条件と変わらなかった。また、交感神経活動（皮膚コンダクタンス反応）や心拍といった生理的反応が統制条件よりも増大することが示された。

不一致表出に関しては、ネガティブ情動（悲しみ）について検討された (Robinson & Demaree, 2007)。ネガティブ情動喚起映像を視聴中に意図的に不一致表出（何らかの情動を経験しても、それとは反対の情動価の表情を表出するよう教示）を行ったところ、主観的情動経験は統制条件と変わらないことが示された。生理的反応に関しては、交感神経活動（皮膚コンダクタンス反応、皮膚電気反応等）が増大することが示された。

Gross らは、再評価と表出抑制では、表出抑制におけるネガティブ情動経験の維持、生理的反応の増大という点で、再評価の方が情動的悪影響は少ないと結論付けている (John & Gross, 2004)。表出抑制におけるポジティブ情動とネガティブ情動の違いに関しては、ネガティブ情動の表出抑制は、日常的な経験頻度が高く表情表出と情動経験を区別しやすいため、情動経験に影響を及ぼすことなく表情表出のみを調整できると考えられている (Gross & Levenson, 1997)。

表出誇張に関しては、ポジティブ情動において主観的情動経験が増大するという当初の Demaree らの仮説とは一致しておらず、ポジティブ情動経験において天井効果がみられた可能性が指摘された (Demaree et al., 2004)。一方で、主観的情動経験が情動調整の影響を受けない可能性も指摘している (Robinson & Demaree, 2009)。生理的反応に関しては、表出抑制と同じく増大することが示され、反応調節段階の調整方略として同様の働きをすることが確認された。

不一致表出に関しても、表出誇張同様、主観的情動経験が情動調整の影響を受けない可能性を改めて示唆する結果となった。生理的反応に関しては、表出抑制、表出誇張と同じく増大することが示され、反応調節段階の調整方略とし

て同様の働きをすることが確認された (Robinson & Demaree, 2007)。

1-3-2. 情動調整の認知的影響

認知的影響とは、情動調整を行うことによって調整者自身の認知的資源が費やされるか検討したものである。主に、何らかの情動調整を意図的に行いながら視聴した情動喚起映像あるいはスライドの内容について記憶テストを実施することで測定された。これまでの先行研究では、ネガティブ情動について検討された。

再評価に関しては、再評価を行いながらネガティブ情動を喚起するスライドを視聴した後記憶テストを行ったところ、記憶成績は低下しないことが示された (Richards & Gross, 2000)。

表出抑制に関しては、表出抑制を行いながらネガティブ情動（怒り，悲しみ等）を喚起する映像またはスライドを視聴した後記憶テストを行ったところ、統制条件よりも記憶成績が低下することが示された (Richards & Gross, 1999, 2000; Robinson & Demaree, 2009)。

表出誇張に関しては、表出誇張を行いながらネガティブ情動（悲しみ）を喚起する映像を視聴した後記憶テストを行ったところ、統制条件および表出抑制条件よりも記憶成績が低下することが示された (Robinson & Demaree, 2009)。

不一致表出に関しては、不一致表出を行いながらネガティブ情動（悲しみ）を喚起する映像を視聴した後記憶テストを行ったところ、統制条件よりも記憶成績が低下することが示された (Robinson & Demaree, 2007)。

表出抑制と再評価の比較において、情動調整が行われる段階の違いによって認知的影響が異なることが示された (Richards & Gross, 2000)。反応調節段階における各方略はいずれも記憶成績が低下することが示され、反応調節段階の情動調整は刺激に対する注意資源を費やすと考えられる。また、表出抑制と表出誇張の比較において、表出誇張の方がより記憶成績が低下したことから、反応調整段階の方略間でも異なる影響を及ぼすことが示された (Robinson & Demaree, 2009)。

1-3-3. 情動調整の対人的影響

対人的影響とは、対面状況における情動調整が、情動調整の受け手に及ぼす影響について検討したものである。先行研究は少ないが、Butler et al. (2003) によって、初対面の 2 者の会話におけるネガティブ情動（嫌悪，怒り，悲しみ）の表出抑制と再評価が、受け手の生理的反応および、調整者や会話に対する印象に及ぼす影響について検討された。実験手法としては、初対面の 2 人が、共に視聴したネガティブ情動喚起映像について自由にディスカッションをした後、印象評定を行うというものであった。

再評価については、受け手の生理的反応（血圧）および会話に対する評価において、統制条件との違いはみられなかった。

表出抑制については、受け手の生理的反応（血圧）において再評価よりも増大することが示された。会話に対する評価および調整者に対する親密感において、統制条件よりも低下することが示された。

初対面の 2 者の会話における表出抑制は、調整者の意図や気持ちがもう一方に伝わりにくくなることから、2 者の関係の構築，維持・成長の妨げとなると考えられた（Butler et al. 2003）。

1-3-4. 情動調整の実験的研究に関するまとめ

情動的，認知的，対人的，3 つの影響についてまとめたものを Table 1-2 に示した。

情動調整に関する先行研究の多くがネガティブ情動の調整について検討してきた。ネガティブ情動の調整，特に表出抑制は，日常場面において高い頻度で用いられる方略であることが理由の 1 つと考えられる。しかしながら，ポジティブ情動の調整が求められる場面も少なくない。例えば，公共の場では笑いをこらえたり，友達からのプレゼントに大げさに喜んだりする，などが挙げられる。ポジティブ情動の調整がどのような影響を及ぼすのか，ネガティブ情動と異なるのか，更なる検討が必要であると考えられる。

また，反応調節段階における情動調整については，ネガティブな影響が多く示されており，その役割・意義について十分に明らかにされたとは言い難い。この点に関しては，対人的影響に関して検討した研究が少ないことが一因と考

Table 1-2. 各方略に関する先行研究からの知見

(Butler et al.2003; Demaree et al., 2004; Gross, 1998a; Gross & Levenson, 1993, 1997; Richards & Gross, 1999, 2000; Robinson & Demaree, 2007, 2009)

	再評価		表出抑制		表出誇張		不一致表出	
	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ
情動的影響								
主観的 情動経験		+	-	0	0	0		0
生理的反応		0	-	-	-	-		-
認知的影響								
		0		-		-		-
対人的影響								
		0		-				

注 1. “ポジ”はポジティブ情動, “ネガ”はネガティブ情動を示す。

注 2. “+”はポジティブな影響, “-”はネガティブな影響, “0”は影響なしを意味する。空白箇所は未検討。

えられる。表情表出による情動調整は社会的相互作用に影響を与えていることから (Lopes et al., 2005), 何らかの対人的・社会的利益をもたらす可能性が考えられる。表情表出による情動調整が対人的・社会的にどのような影響をもたらすのか更に検討する必要があるだろう。

1-4. 情動調整に関する質問紙調査による研究の概観

質問紙調査による先行研究から、表情表出による情動調整が実際のコミュニケーション場面でどのように機能しているかの一端を知ることができる。欧米の研究では、主に情動調整に関する個人差に焦点が当てられ、各調整方略をどの程度使用するか傾向と様々な個人特性がどのように関連するのかについて検討されてきた (John & Gross, 2004)。一方、日本の研究では、情動調整を行う動機や調整相手の属性などが報告されてきた (e.g., 木野, 2001; 崔・新井, 1998)。また、情動調整を行うことによる調整相手との関係性の変化が取り上げられてきた (e.g., 結城, 2006)。欧米と日本それぞれの質問紙研究から、情動調整に関する個人差および情動調整が行われる動機や相手について、得られた知見を次項より順にまとめる。

1-4-1. 情動調整に関する個人差

Gross & John (2003)は、再評価と表出抑制の2つの方略について、日常生活における使用の個人差を測定する情動調整尺度 (Emotion Regulation Questionnaire; ERQ)³を作成し、情動、社会的機能、精神健康に関する各評定との関係についてまとめた。その結果、再評価に関しては、ポジティブ情動の経験および表出、情動の社会的共有、友人からの親密感と好感度、人生に対する満足感、自尊感情、well-beingと正の相関があり、ネガティブ情動の経験および表出、抑うつとは負の相関があることが示された。一方、表出抑制に関しては、ネガティブ情動の経験、アタッチメントの回避、抑うつとの正の相関があり、ポジティブ情動の経験および表出、情動の社会的共有、友人からの親密感、社会的サポート、人生に対する満足感、自尊感情、well-beingと負の相関があることが示された。このことから、再評価を行うことは適応的な結果をもたらすが、表出抑制を行うことは非適応的な結果をもたらすとされた。一方で、アジア文化に属する人々を対象とした調査では、表出抑制が必ずしも非適応的な結果をもたらすわけではないことが示されている (Butler, Lee, Gross,

³ 情動調整尺度 (Emotion Regulation Questionnaire; ERQ) は 10 項目からなり、再評価に関する項目 (6 項目) と表出抑制に関する項目 (4 項目) の 2 因子構造である。吉津・関口・雨宮 (2013) により、日本語版が作成されている。

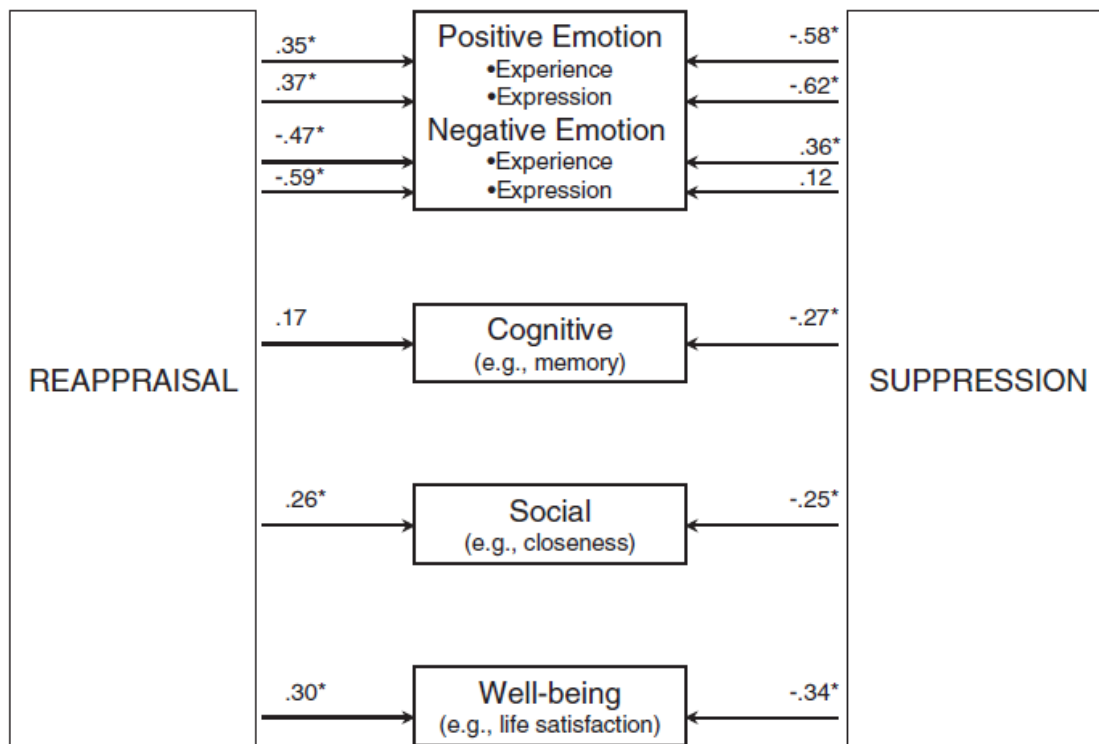


Figure 1-2. 情動調整方略の使用における個人差と各指標との関係 (John & Gross (2004) より引用)

2007; Mauss, Butler, Roberts, & Chu, 2010)。各情動調整方略の個人差と各指標との関連についてまとめたものを、Figure1-2 に示す。

また、Srivastava, Tamir, McGonigal, John, & Gross (2009) は、個人の表出抑制傾向が社会への適応にどのように影響しているか検討するため、大学入学という大きな情動的出来事の前後に渡って質問紙調査を行った。その結果、入学前後ともに、高い表出抑制傾向は、社会的サポートや他者との親密感、社会的満足感といった社会的機能に関する指標の低下と関係することが示された。

1-4-2. 情動調整が行われる動機や相手

崔・新井 (1998) では、ネガティブ情動の調整経験について自由記述させた結果、調整動機として、相手への考慮や相手との関係の維持および規範の維持という向社会的動機と、自分が得するためや自尊心を維持するためという自己保護的動機の2種類が抽出された。木野 (2001) では、怒りの調整経験について自由記述させた結果、家族や友人に対して怒りが表出される一方で、友人に

対しては抑制される場合もあることが示された。また、怒りを表出した場面と
しなかった場面のいずれにおいても相手との関係は変化しないことが多かった。
結城（2006）は、ネガティブ情動の表出抑制について、親しい人物を一人連想
させた上で、設定シナリオに対してその行為の好ましさと関係性の予測を評定
させた。その結果、ネガティブ情動を表出した方が好ましく、関係性が良くな
ることが示された。さらに結城（2007）は、ポジティブ情動、ネガティブ情動
の両方の表出抑制経験について自由記述させたところ、友人に対しての経験が
多く、ポジティブ情動、ネガティブ情動いずれについても向社会的動機が自
己志向的動機より多く報告された。以上の先行研究の結果をまとめると、主
にネガティブ情動の表出抑制については、特に友人に対しての経験が多く報
告され、向社会的もしくは自己志向的な動機から行われることが示された。
ポジティブ情動の表出抑制については、友人に対して向社会的動機から行わ
れることが多いことが示された。また、親しい人物に対してはむしろ、ネガ
ティブ情動を表出する方が良好な関係をもたらす場合があることが示唆さ
れている。

1-4-3. 質問紙調査による研究のまとめ

以上の研究についてまとめると、欧米の研究では、情動調整が行われる個
人差について検討することで、情動調整を行うことによる精神健康への影響
について明らかにすることを主たる目的とする一方、日本の研究は、情動調
整が行われる動機や相手についてまとめることで、表情表出による情動調整
が行われるプロセスや適応的意義を明らかにすることを目的としていると
考えられる。しかしながら、先行研究による質問紙調査は限定的であり、多
くが、主にネガティブ情動の表出抑制について検討することに重点を置いた
ものであり、表出誇張やポジティブ情動の調整について十分に検討された
とは言い難い。

1-5. 表情表出による情動調整に関わる要素

本論文では、様々な情動調整方略の中でも、表情表出による情動調整に焦点を当てた。この節では、様々な表情研究の中でも、表情表出の意図的なコントロールに関わると考えられる研究について述べる。また、欧米の先行研究と比較する上で必要となる表情の文化差や表示規則についての知見をまとめた。

1-5-1. 表情表出に関する研究

表情表出は、内的な情動状態を他者に伝える非言語的情報として、コミュニケーションにおいて重要な役割を果たす。それだけでなく、表情表出は、表出者自身の情動状態や身体にも影響を及ぼす。顔面フィードバック仮説 (facial feedback theory; Tomkins, 1962) もその考えに基づいている。顔面フィードバック仮説とは、表情表出からのフィードバックによって特定の情動が喚起されるというものである。この仮説に関する実証的研究は古くから行われており、その効果が確認されている (e.g., Laird, 1974; Strack Martin, & Stepper, 1988; Zajonc, Murphy, & Inglehart, 1989)。Starack et al. (1988) では、笑顔に関連する表情筋が意識せず動くよう参加者にペンを口にくわえさせ漫画を読ませたところ、表情筋が動かないようペンをくわえたときに比べて、漫画がより面白いと報告されることが示された。このように、表情を作ることによってその表情に応じた情動経験が引き起こされることが確認されている。一方、Laird, Alibozak, Davainis, Deignan, Fontanella, Hong, Levy, Pacheco (1994) によれば、地位や性別といった社会的特性や他者の存在によって顔面フィードバックの効果がみられない場合もある。また、Fridlund (1994) は、表情はコミュニケーションの手段として戦略的に表出されるものであり、必ずしも情動状態が付随するわけでないとしている。以上のことから、表情表出による情動調整を行うことによって調整者自身の情動状態に影響を及ぼす可能性も十分考えられるが、表情表出の増減によって情動状態も一概に変化するとは考えにくい。前節 Table 1-2 を見ても分かるように、先行研究においても表情表出による情動調整が調整者の主観的情動経験に影響を及ぼしたものは少ない。表情表出による情動調整における表情と情動経験の関係については、Gross & Levenson (1997) においても経験頻度の違いが示唆されているように、何らか

の別の要因が関わっていると考えられる。

また、個人状況と対人的状況では表情表出は異なる機能を持つと考えられる。他者の表情表出が想定される状況では、表情模倣 (facial mimicry) が生じることが指摘されている。表情模倣とは、他者の表情表出を観察した時に、自動的に・無意識的に同様の表情筋が活動することである (Dimberg, 1982)。表情模倣は、欧米における研究 (e.g., Dimberg & Thunberg, 1998) だけでなく、日本人を対象にした研究においても検討されており (e.g., 市川・牧野, 2004; 田村・亀田, 2006), 諸説あるものの基本 6 情動の全ての表情について表情模倣が生じることが確認されている (Lundqvist & Dimberg, 1995)。また、対人的状況では、情動伝染 (emotional contagion; Hatfield, Cacioppo, & Rapson, 1994) という現象もみられる。情動伝染とは、他者の何らかの情動表出を知覚することで自分自身も同様の情動を経験することである (木村・余語・大坊, 2007)。Hatfield et al. (1994) は、2つの段階を経て情動伝染が生起すると想定した。1つ目は模倣の段階であり、会話において、自動的に、連続的に他者の表情や音声、身体動作といった行動の模倣および同期がみられるという。表情模倣もこの段階に含まれると考えられる。2つ目の段階はフィードバックの段階であり、表情、音声、身体動作などの模倣からのフィードバックによって、その時々的情動経験に影響が及ぶとしている。顔面フィードバック仮説もこの段階に含まれる現象である。情動伝染について、表情表出に限定してみると、コミュニケーションにおいて、他者の表情表出に対して表情模倣が起これば同様の表情表出が生起し、顔面フィードバックによって表情表出に伴う情動経験が生起するというプロセスが考えられる。表情表出による情動調整についても、対人的状況において他者が表情表出を増減させた場合、もう一方において同様の表情表出、情動経験をもたらすことが想定されるだろう。しかしながら、表情模倣から情動伝染が生じないという実証研究もあり (Hess & Blair, 2001), 両者の関係について今後更なる検討が望まれる。

1-5-2. 表情表出における文化差と表示規則

表情は普遍的であると言われている (Ekman & Friesen, 1975)。これは、Darwin (1872) の考えに基づくものである。Darwin (1872) は、ヒトの表情は、

他の哺乳類と共通性があり，進化の過程において獲得された，生まれながらに備わったものであると提唱した。Ekman, Friesen, O'Sullivan, Chan, Diacoyanni-Tarlatzis, Heider, Krause, LeCompte, Pitcairn, Ricci-Bitti, Scherer, Tomita, & Tzavaras (1987) は，様々な民族に対し，FACS (Facial Action Coding System, Ekman & Friesen, 1978)⁴に基づいて表出させた各表情写真を強制選択法により分類させたところ，いずれの民族においても高い正答率が得られた。一方で，自由回答法によって各表情の解読実験を行ったところ，正答率にばらつきがみられ，日本人に対して行った実験では恐怖の正答率が非常に低かった (Fridlund, 1994)。表情の普遍性に関しては，概ね支持されながらも，批判的な見解も示されている (e.g., Russell, 1994)。

Ekman らは，表情表出における文化差について，表示規則 (display rule) という概念を用いて説明している (Ekman & Friesen, 1975)。表示規則とは，社会的，文化的規範や因習などにより規定された表情表出の規則である。例えば，ネガティブ情動を喚起する映像に関するインタビューにおいて，アメリカ人は映画に対するネガティブな表情を表出した一方，日本人はネガティブな表情を表出せず，逆にポジティブな表情を表出しようとしたことが分かった (Ekman & Friesen, 1975)。これは，日本人において，社会的場面ではネガティブな表情表出を抑制しようとする文化的表示規則があるためだと考えられた。また，日本人は，欧米の人々に比べ，表出行動や主観的情動経験の強度が低いことも示されている (Scherer, Wallbott, Matsumoto, & Kudoh, 1988)。他にも，男性は人前で泣かない，プレゼントをもらったら気に入らないときでも笑うなど，性別や状況，文化など様々な要因によって表情表出は調整される。また，表示規則は，幼児や子どもを対象とした調査においても確認されており，表示規則が発達の過程で獲得されることが示されている (Cole, 1986; Saarni, 1984)。

本研究では，表情表出による情動調整が及ぼす個人的，対人的影響について日本人を対象に検討した。前述したように，日本と欧米では表情表出に対する

⁴ FACS (Facial Action Coding System) とは，顔面筋の解剖学的知見に基づき，44の活動単位 (Action Unit, AU) から顔面動作を包括的かつ客観的に記述する方法である。それぞれの表情は AU の組み合わせによって表現される。

考え方や背景が大きく異なる。また、質問紙研究においても、アジア文化における参加者では表出抑制が必ずしも非適応的ではないことが示唆されている (Butler et al, 2007; Mauss et al., 2010)。同様の手法で実験を行っても欧米で得られた結果とは異なる可能性も十分考えられるだろう。

1-6. 第 1 章のまとめ

本章では、表情表出による情動調整を中心に、情動調整の情動的、認知的、対人的影響について先行研究をまとめた。また、表情表出による情動調整に関わる表情研究についての知見をまとめた。本節では、先行研究における不足点を指摘し、本論文の目的と構成について述べる。

1-6-1. 本論文の目的

表情表出による情動調整に関して、先行研究では、欧米において、ネガティブ情動の調整を中心に、主に再評価と比較することでその影響が検討されてきた。しかしながら、なお検討すべき点もいくつか残されている。本論文では、次の 3 点について検討することを主な目的とした。

1 点目は、表情表出による情動調整である表出抑制と表出誇張の 2 つの方略の比較である。先行研究では、いずれの方略も同じ反応調節段階における情動調整として同様の影響を及ぼすと考えられてきた。しかしながら、表出抑制では表情表出を減少させる一方、表出誇張では表情表出を増大させるため、調整のしやすさが異なると考えられる上、対面する受け手に送られる表情の強度も異なる。したがって、両方略を直接比較した場合、各方略が及ぼす情動的、認知的、対人的影響は異なるのではないかと考えた。両方略が調整者自身の情動経験や記憶、受け手や会話に及ぼす影響について比較することにより、各方略の特性についてより詳細に理解できると考えられる。

2 点目は、ポジティブ情動とネガティブ情動の違いである。前述にあるように、先行研究の多くがネガティブ情動の調整について検討してきた。一部の先行研究においてポジティブ、ネガティブ両情動について検討されているが (Gross & Levenson, 1997; Demaree et al., 2004)、表出抑制、表出誇張いずれかの方略のみの比較であり十分であるとは言い難い。近年、ポジティブ情動が思考や行動のレパートリーを広げ、より柔軟で創造的な認知をもたらすことが示されるなど (Fredrickson, 2001)、ポジティブ情動の機能に注目した研究も多くみられるようになり、ネガティブ情動との違いが明らかにされている。したがって、ポジティブ情動の調整がどのような機能を持つのか十分に検討することも重要な課題の 1 つである。ポジティブ情動の調整が及ぼす影響がネガ

ティブ情動とどのように異なるのか、表出抑制、表出誇張の2つの方略について比較検討する必要があると考えられる。

3点目は、対人場面において表情表出による情動調整が及ぼす影響に関する検討である。表情表出において他者の存在が重要であることは先行研究からも示されている。例えば、Fridlund (1991) は、ポジティブ情動喚起映像を一人で見ると友人と見た方が表情表出が促進されることを示した。一方で、観察者の存在によって表情表出が抑制されるという結果が報告された研究もある (Kraut, 1982)。いずれにしろ、他者が存在する状況において表情表出が変化すると考えられ、表情表出による情動調整についても、対人場面において個人状況とは異なる機能を示す可能性が考えられる。表情表出による情動調整は、コミュニケーションにおいて重要な非言語情報である表情表出を増減させる方略であるため、対人場面における影響について検討することにより、対人的・社会的に有益となる機能を見出すことができるのではないかと考えた。

本論文では、以上の3点について検討することを目的に、これまで行った5つの研究についてまとめた。5つの研究から得られた結果を基に、表情表出による情動調整の特性について新たに得られた知見をまとめ、表情表出による情動調整の実態と社会的意義に関する示唆を得ることを目的とした。

1-6-2. 本論文の構成

本論文は6章構成である。

第1章である本章では、先行研究のレビューを行い、情動調整に関連する研究の動向を示し、本論文における研究の背景と意義を明確にした。

第2章から第5章までは、表情表出による情動調整の特性について様々な角度から検討した5つの研究についてまとめた。研究1から研究5における実験方法と検討テーマを、Table 1-1に示した。また、5つの研究が扱ったテーマについて、表情表出による情動調整が行われるプロセスにおいてまとめた (Figure 1-3)。

第2章では、表情表出による情動調整が行われるプロセスについて、怒り・悲しみ・喜びの3情動の表出抑制および表出誇張に焦点を当て、実際の調整経験に関する質問紙調査から情動生起原因、調整動機、調整経験頻度などを各情

動・方略別に示した（研究 1）。第 3 章では，表情表出による情動調整が調整者自身の主観的情動経験と記憶に及ぼす影響について，表出抑制と表出誇張についてポジティブ・ネガティブ両情動からの比較（研究 2），ネガティブ情動の不一致表出の追試（研究 3）を，個別実験により示した。第 4 章では，表情表出による情動調整が受け手の印象判断に及ぼす影響について，ポジティブ・ネガティブ両情動の不一致表出に焦点を当て，擬似的な対人状況を設定した実験により検討した（研究 4）。第 5 章では，表情表出による情動調整が受け手や会話に及ぼす影響について，実際に 2 者が会話を行った際の表情表出や発話といった表出行動の分析を通して，表出抑制と表出誇張について多角的に比較検討を行った（研究 5）。

第 6 章では，5 つの研究の成果をまとめ，新たに示された表情表出による情動調整の特性と意義について考察し，今後の課題と展望について述べた。

Table 1-1. 本論文において行われた各研究の方法と検討テーマ

	方法	検討テーマ
研究1	質問紙調査	表情表出による情動調整が行われるプロセス：怒り・悲しみ・喜びの3つの情動について，表出抑制と表出誇張の比較
研究2	個別実験	表情表出による情動調整が調整者自身の主観的情動経験と記憶に及ぼす影響：ポジティブ・ネガティブ両情動の表出抑制と表出誇張の比較
研究3	個別実験	表情表出による情動調整が調整者自身の主観的情動経験と記憶に及ぼす影響：ネガティブ情動の不一致表出
研究4	個別実験	表情表出による情動調整が受け手の印象判断に及ぼす影響：ポジティブ・ネガティブ両情動の不一致表出
研究5	2者による会話実験	表情表出による情動調整が受け手や会話に及ぼす影響：表出抑制と表出誇張の比較

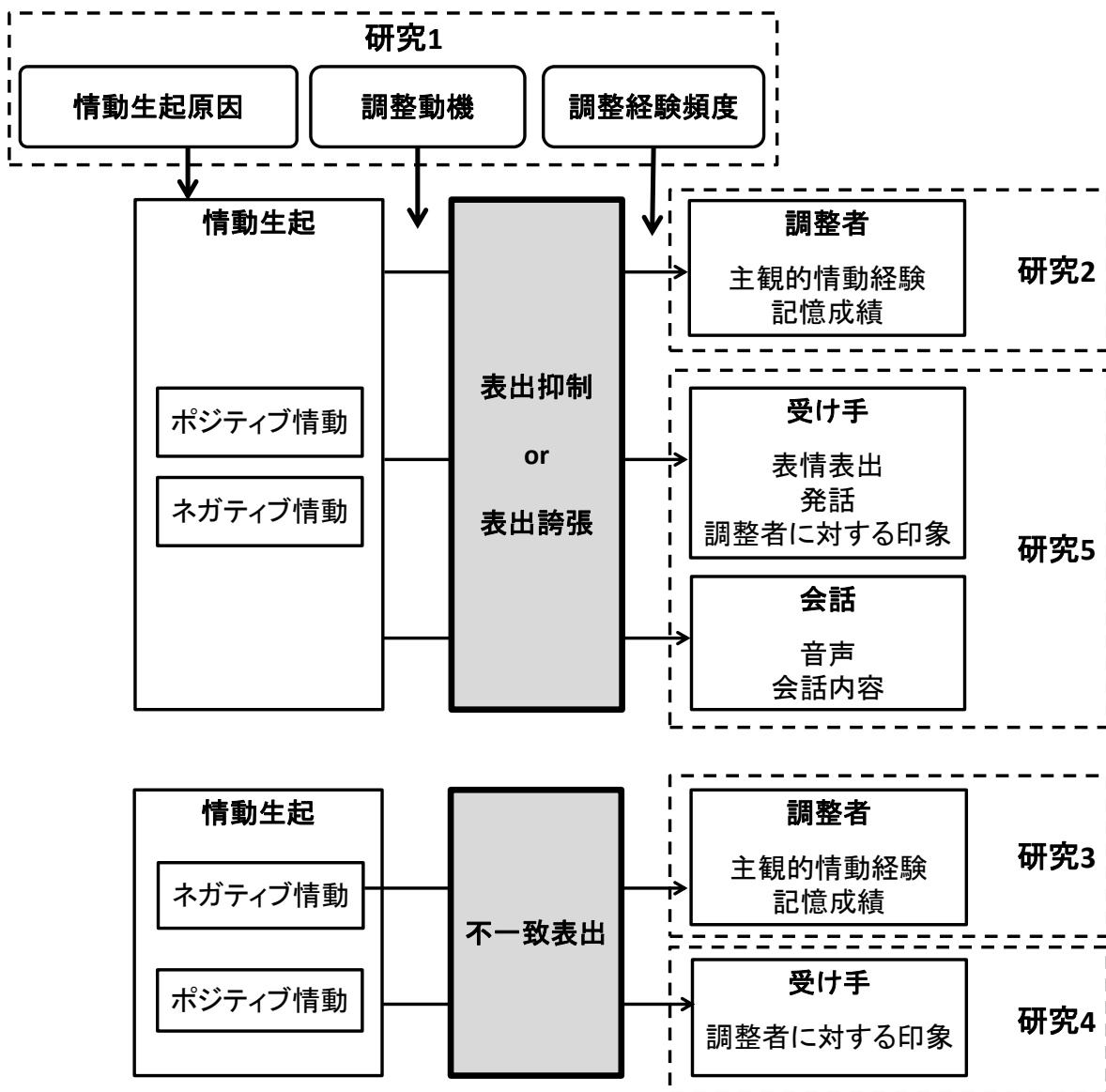


Figure 1-3. 表情表出による情動調整のプロセスにおける 5つの研究が扱ったテーマ

第 2 章 表情表出による情動調整が行われるプロセス

2-1. [研究 1] 表情表出による情動調整の日常経験に関する調査

2-1-1. 問題と目的

研究 1 では、表出抑制と表出誇張に焦点を当て、日常場面において実際どのように情動調整が行われるかを質問紙調査によってまとめた。

質問紙調査の先行研究では、主にネガティブ情動の表出抑制および自然表出について多く検討されてきた (e.g., 崔・新井, 1998 ; 結城, 2006)。しかしながら、表出誇張に関しては、どのような状況で用いられ、適切に機能するのかは明らかになっていない。また、ポジティブ情動に関する調査も少なく、怒りや喜びといった情動ごとの調査もなされていない。同じネガティブ情動でも、怒りと悲しみでは情動調整の特性の違いも報告されていることから (Zeman & Shipman, 1997)、各情動の特性に着目した詳細な検討が必要である。また、表情表出による情動調整が社会的な関係の維持とどのように結びつくかも、十分に検討されているとは言い難い。

そこで本研究では、実際場面における表情表出による情動調整の実態を把握し、怒り、悲しみ、喜びの各情動および情動調整の方略別の特性について調べることを目的に質問紙調査を実施した。怒り、悲しみ、喜びの表出抑制および表出誇張が実際にどのように行われているのか、各調査対象者の具体的な事例を抽出した。なお、実際の情動調整経験を収集するにあたり、情動生起原因 (なぜその情動が生じたのか)、調整相手 (誰に対して情動調整を行ったのか)、調整動機 (なぜ情動調整を行ったのか) の 3 点を取り出すことに重点を置いた。また、調整経験頻度、調整相手との親密度、調整相手との関係変化に着目した。これらの要因が各情動・方略別にどのように異なるのか、また、どのような経緯によってそれぞれの情動調整が行われるのかを調査した。

先行研究から、次のような予想がたてられる。Gross & Levenson (1997) の結果より、ネガティブ情動に関しては表出が抑制されることが多い一方で、ポジティブ情動は表出が誇張されることが多い可能性が考えられる。したがって、怒り、悲しみの表出抑制および喜びの表出誇張の経験頻度は高くなる

と予想される。また、崔・新井（1998）や結城（2007）から、いずれの情動においても、調整相手としては友人など親しい相手が多く挙げられること、動機としては、向社会的動機と自己志向的動機の2種類が抽出され、表出抑制では向社会的動機の方が自己志向的動機よりも多くなることが考えられる。

2-1-2. 方法

調査時期 2回に分けて調査を行った。1回目は2009年10月、2回目は2010年4月に行われた。

調査対象者 大学生162名（男性55名、女性99名、不明8名、平均20.5歳、 $SD=3.6$ 歳）をランダムに3群にわけ、怒り、悲しみ、喜びの3情動のいずれかの質問紙に回答するよう求めた。それぞれの回答者数は、怒りについて56名、悲しみについて52名、喜びについて54名であった。いずれも、表出抑制と表出誇張、両方の経験について質問したが、どちらか一方でも最後まで答えてあるものは有効、どちらの方略についても最後まで回答していないものを無効回答とした。その結果、有効回答者数は、怒りについては、表出抑制52名、表出誇張48名、悲しみについては、表出抑制37名、表出誇張38名、喜びについては、表出抑制43名、表出誇張43名であった。

質問紙の内容 表情表出による情動調整について説明および例示後、表出抑制、表出誇張それぞれについて以下の質問に回答を求めた。なお、方略の順はカウンターバランスをとった。

1. 情動調整経験：回答者自身の情動調整をした経験について自由記述を求めた（教示例：怒りの表出抑制…「あなたはこれまで、怒りの感情を経験したとき、その怒りの感情を表情にあらわさないようにしたことがありますか？」）。そのときの状況、情動生起原因、調整相手、調整動機をできるだけ含めて書くよう教示した。複数回答も可とした。

2. 経験頻度、調整相手との親密度、関係変化：1で記述した経験について、次の3項目の自己評定を求めた。なお、経験を複数記述していた場合を考慮し、

最初に記述した経験について評定するよう教示した。(a) 経験頻度：「どのくらいの頻度でそのような経験をしますか?」。1 (人生に一度) ~7 (一日に一度) の 7 件法であった。(b) 調整相手との親密度：「相手とは、どの程度親密な関係ですか?」。1 (全く親密でない) ~6 (非常に親密である) の 6 件法であった。(c) 調整相手との関係変化：「相手との関係はどのように変化しましたか?」。1 (非常に悪くなった) ~7 (非常に良くなった) の 7 件法であった。

自由記述分析方法 情動調整経験に関する自由記述が得られた回答に対し、KJ 法により次の 3 つの基準で分類した。全回答のうち 63 名分について、著者および著者と仮説を共有しない女性 1 名の 2 名で分類を行ったところ、一致率が 91.0%であった。不一致の記述は、相談の上決定した。その基準に従い、残りの 99 名分は著者のみで分類した。

1. 調整相手：家族，友人・仲間，恋人，目上の人，目下の人，その他，記述なし，の 7 分類であった。

2. 調整動機：向社会的動機 (調整相手や関係，周囲の状況を考慮・優先した記述)，自己志向的動機 (回答者である調整者自身の気持ちや都合を考慮・優先した記述)，両方，記述なし，の 4 分類であった。

3. 情動生起原因：調整相手，相手以外，両方，記述なし，の 4 分類であった。

2-1-3. 結果

情動調整経験の有無

有効回答のうち，情動調整経験を報告した人数は，怒りについては，表出抑制 47 名，表出誇張 40 名，悲しみについては，表出抑制 32 名，表出誇張 28 名，喜びについては，表出抑制 38 名，表出誇張 39 名であった。情動調整経験を記述した調査対象者数の平均割合は 85.49%であった ($SD = 6.39$)。悲しみの表出誇張を除く全ての条件において，8 割以上の調査対象者が情動調整を行った経験について記述を行っていた。Table 2-1 に記述例を挙げた。

Table 2-1. 各情動・方略別の調整経験記述例

情動	調整方略	記述例
怒り	表出抑制	友達と話していたときに、友達のなにげない一言にカチンときたが、気まずい空気になりたくないのに表情にあらわさなかった。
	表出誇張	親に、何回も同じことしつこく言われたりしたときに、親に対して、腹立っていることをよく分かってほしかったために大きく表しました。
悲しみ	表出抑制	仲の良い友人が転校する時に、悲しかったが、はずかしかったためえがおで見送った。
	表出誇張	友達が、恋愛で、相手の行動が分からず悲しんでいたが、私自身はよく分からなかった。しかし、たぶん友達はこの気持ちを分かってほしかったと思うので、悲しそうなフリをした。
喜び	表出抑制	受験のとき、合格発表を友達と見に行き、自分だけ受かっていた。自分が喜んでる表情を見せると、友達が傷つくと思い、気を遣って表情にあらわさなかった。
	表出誇張	友達にプレゼントをもらったとき、せっかく好意でくれているのに喜ばないと悪い気がしたから、喜びを大きくあらわした。

調整相手，調整動機，情動生起原因

情動調整経験の自由記述に関する各基準の分類結果に対し，各条件で分布に違いがないか調べるため *Fisher* の正確確率検定を行った。多重比較はいずれもライアン法であった。

1. 調整相手 (Table 2-2) 検定の結果，有意差がみられた ($p < .05$)。多重比較の結果，方略間では有意な偏りはみられなかった (*n.s.*)。怒りの表出抑制では，友人の比率が家族，恋人，目下の人，記述なしよりも有意に高かった (いずれも $p < .01$)。怒りの表出誇張では，家族，友人の比率が，恋人よりも有意に高かった (いずれも $p < .001$)。悲しみの表出抑制では，友人の比率が，恋人，目上の人，目下の人，記述なしよりも有意に高かった (いずれも $p < .01$)。悲しみの表出誇張では，友人の比率が，目上の人，目下の人，記述なしよりも有意に高かった (いずれも $p < .01$)。喜びの表出抑制では，友人，その他の比率が，恋人，目上の人，目下の人よりも有意に高かった (いずれも $p < .001$)。喜びの表出誇張では，友人の比率が他のいずれよりも有意に高かった (いずれも $p < .001$)。

Table 2-2. 調整相手の分類分布

情動	調整方略	調整相手						記述なし	合計
		家族	友人・仲間	恋人	目上の人	目下の人	その他		
怒り	表出抑制	5 (10.64)	16 (34.04)	3 (6.38)	9 (19.15)	2 (4.26)	7 (14.89)	5 (10.64)	47 (100.00)
	表出誇張	13 (32.50)	11 (27.50)	1 (2.50)	3 (7.50)	4 (10.00)	4 (10.00)	4 (10.00)	40 (100.00)
悲しみ	表出抑制	7 (21.88)	13 (40.63)	2 (6.25)	2 (6.25)	1 (3.13)	4 (12.50)	3 (9.38)	32 (100.00)
	表出誇張	5 (17.86)	11 (39.29)	4 (14.29)	0 (0.00)	0 (0.00)	6 (21.43)	2 (7.14)	28 (100.00)
喜び	表出抑制	5 (13.16)	13 (34.21)	1 (2.63)	1 (2.63)	0 (0.00)	12 (31.58)	6 (15.79)	38 (100.00)
	表出誇張	6 (15.38)	20 (51.28)	3 (7.69)	5 (12.82)	0 (0.00)	4 (10.26)	1 (2.56)	39 (100.00)

注. 単位は人。カッコ内は比率を表す(%)。

Table 2-3. 調整動機の種類分布

情動	調整方略	調整動機				合計
		向社会的	自己志向的	両方	記述なし	
怒り	表出抑制	29 (61.70)	12 (25.53)	3 (6.38)	3 (6.38)	47 (100.00)
	表出誇張	7 (17.50)	25 (62.50)	1 (2.50)	7 (17.50)	40 (100.00)
悲しみ	表出抑制	12 (37.50)	16 (50.00)	1 (3.13)	3 (9.38)	32 (100.00)
	表出誇張	11 (39.29)	17 (60.71)	0 (0.00)	0 (0.00)	28 (100.00)
喜び	表出抑制	20 (52.63)	14 (36.84)	0 (0.00)	4 (10.53)	38 (100.00)
	表出誇張	23 (58.97)	9 (23.08)	0 (0.00)	7 (17.95)	39 (100.00)

注. 単位は人。カッコ内は比率を表す(%)。

2. 調整動機 (Table 2-3) 検定の結果，有意差がみられた ($p < .001$)。多重比較の結果，向社会的動機は，怒りの表出抑制における比率が怒りの表出誇張，悲しみの表出誇張よりも有意に高く，喜びの表出抑制および表出誇張における比率が怒りの表出誇張よりも有意に高かった (いずれも $p < .01$)。自己志向的動機は，怒りの表出抑制における比率が，怒りの表出抑制，喜びの表出誇張よりも有意に高かった (いずれも $p < .001$)。怒りの表出抑制では，向社会的動機，自己志向的動機，両方・記述なしの順で，有意に比率が高かった (いずれも $p < .05$)。怒りの表出誇張では，自己志向的動機の比率が他のいずれよりも有意に高かった (いずれも $p < .001$)。悲しみの表出抑制，表出誇張および喜びの表出抑制においては，向社会的動機と自己志向的動機の比率が両方・記述なしよりも有意に高かったが (いずれも $p < .01$)，向社会的動機と自己志向的動機で有意な偏りはみられなかった (*n.s.*)。喜びの表出誇張では，向社会的動機，自己志向的動機，記述なし，両方の順で，有意に比率が高かった (いずれも $p < .01$)。

3. 情動生起原因 (Table 2-4) 検定の結果，有意差がみられた ($p < .001$)。多重比較の結果，調整相手が原因の場合は，怒りの表出抑制における比率が悲しみの表出抑制および表出誇張，喜びの表出抑制よりも有意に高く，怒りの表出誇張における比率が悲しみの表出誇張，喜びの表出抑制よりも有意に高かった (いずれも $p < .001$)。また，喜びの表出誇張における比率が悲しみの表出誇張，喜びの表出抑制よりも有意に高く，悲しみの表出抑制における比率が悲しみの表出誇張よりも有意に高かった (いずれも $p < .01$)。調整相手以外が原因

Table2-4. 情動生起原因の分類分布

情動	調整方略	情動生起原因				合計
		調整相手	相手以外	両方	記述なし	
怒り	表出抑制	42 (89.36)	1 (2.13)	0 (0.00)	4 (8.51)	47 (100.00)
	表出誇張	29 (72.50)	5 (12.50)	0 (0.00)	6 (15.00)	40 (100.00)
悲しみ	表出抑制	15 (46.88)	13 (40.63)	1 (3.13)	3 (9.38)	32 (100.00)
	表出誇張	5 (17.86)	20 (71.43)	0 (0.00)	3 (10.71)	28 (100.00)
喜び	表出抑制	8 (21.05)	26 (68.42)	0 (0.00)	4 (10.53)	38 (100.00)
	表出誇張	28 (71.79)	8 (20.51)	1 (2.56)	2 (5.13)	39 (100.00)

注．単位は人。カッコ内は比率を表す(%)。

の場合は、怒りの表出抑制における比率が悲しみと喜びどちらの表出抑制および表出誇張よりも有意に低く、怒りの表出誇張における比率も悲しみの表出抑制および表出誇張、喜びの表出抑制よりも有意に低かった（いずれも $p < .01$ ）。また、喜びの表出誇張における比率は、悲しみの表出誇張、喜びの表出抑制よりも有意に低かった（いずれも $p < .01$ ）。怒りの表出抑制、表出誇張および喜びの表出誇張において、調整相手の比率が他のいずれよりも有意に高かった（いずれも $p < .01$ ）。悲しみの表出抑制では、調整相手と調整相手以外の比率が両方・記述なしよりも有意に高かったが（いずれも $p < .01$ ）、調整相手と調整相手以外で有意な偏りはみられなかった（*n.s.*）。悲しみの表出誇張および喜びの表出抑制では、調整相手以外の比率が他のいずれよりも有意に高かった（いずれも $p < .01$ ）。

経験頻度，調整相手との親密度，関係変化

それぞれの自己評定項目について、3（情動：怒り，悲しみ，喜び）×2（調整方略：表出抑制，表出誇張）の2要因分散分析を行った。多重比較はいずれもライアン法であった。

1. 経験頻度（Figure 2-1） 分散分析の結果，交互作用が有意であった（ $F(2, 91) = 5.22, p < .01$ ）。下位検定の結果，怒りにおいて表出抑制の方が表出誇張

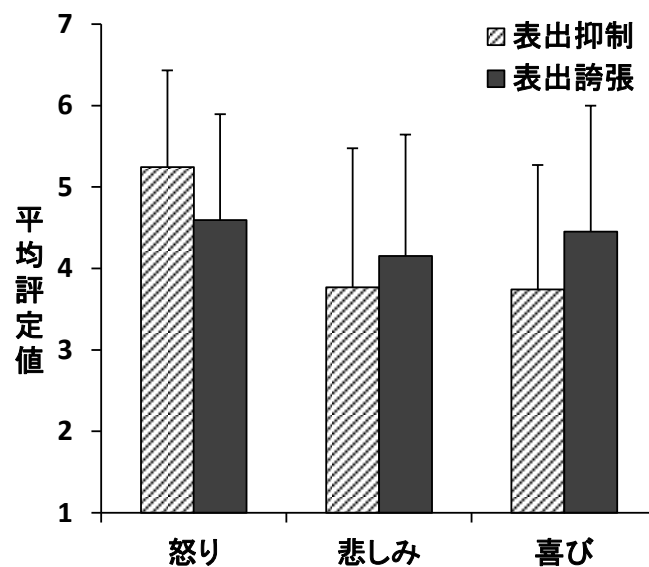


Figure 2-1. 経験頻度の平均評定値および SD

張よりも有意に高く ($F(1, 91) = 4.37, p < .05$), 喜びにおいて表出誇張の方が表出抑制よりも有意に高かった ($F(1, 91) = 5.23, p < .05$)。また, 怒りの表出抑制は, 悲しみおよび喜びの表出抑制よりも有意に高かった ($F(2, 182) = 10.81, p < .001$)。

2. 調整相手との親密度 分析の結果, 各条件において有意な差はみられなかった (*n.s.*)。

3. 調整相手との関係変化 (Figure 2-2) 分散分析の結果, 交互作用が有意であった ($F(2, 91) = 3.49, p < .05$)。下位検定の結果, 喜びにおいて表出誇張の方が表出抑制よりも有意に高かった ($F(1, 91) = 11.05, p < .01$)。また, 喜びの表出誇張は, 怒りおよび悲しみの表出誇張よりも有意に高かった ($F(2, 182) = 9.81, p < .001$)。

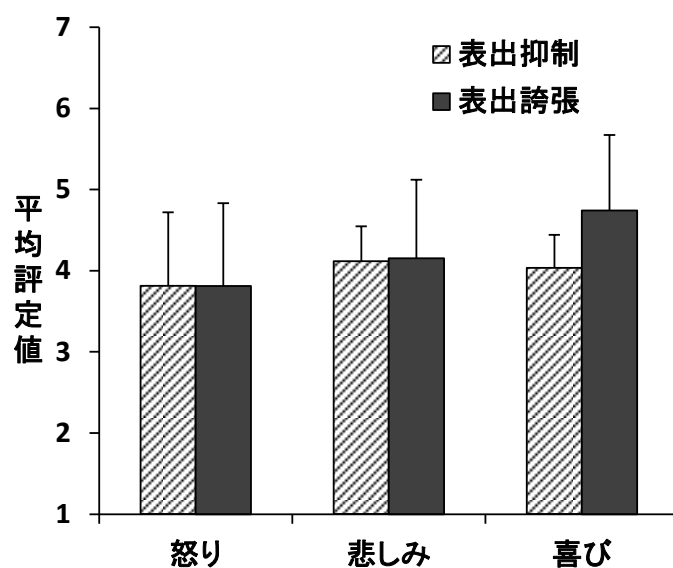


Figure 2-2. 関係変化の平均評定値および SD

2-1-4. 考察

本研究では, 日常場面における表情表出による情動調整の実態を把握し, 情動の種類別・方略別の特性について調べることを目的とした。質問紙調査によって, 怒り, 悲しみ, 喜びの各情動の表出抑制および表出誇張が実際場面においてどのように行われているのか具体的なエピソードの記述を求めて分析し, 情動生起原因や調整動機が, 情動の種類や方略でどのように異なるのかを検討

した。特に、ポジティブ情動や表出誇張における情動調整の特徴についてはこれまでほとんど検討が行われておらず、これらを要因に加えて検討することによって、表情表出による情動調整の全体的な様相を捉えることができると考えられる。調査参加者の8割以上が記述した情動調整経験のエピソードおよび評定データを分析したところ、以下のような結果が得られた。

各指標の結果についてまとめたものを、Table2-5に示す。

調整相手

調整相手に関しては、いずれの方略においても友人をはじめとする親しい関係を中心に情動調整が行われており、結城（2007）の結果と共通していた。また、怒りの表出誇張においては、友人だけでなく家族に対して行われることも多く、家族や友人に対して怒りは表出されるという木野（2001）の知見とも矛盾しない。友人に対する経験が多く報告されていることに関しては、本調査対象者が大学生ということもあり、日頃接する機会の多い友人に対しての経験が想起しやすかったことに起因するものと考えられる。

調整動機

怒りに関しては、表出抑制は向社会的動機から、表出誇張は自己志向的動機から行われることが多いことが示された。怒りの表出抑制が向社会的動機から行われることが多いことは先行研究とも一致している（結城，2007）。相手や状況を考慮・優先した場合は表出抑制される一方、自己の怒りの気持ちを相手に伝えることを考慮・優先した場合は表出誇張されると言える。

悲しみについては、表出抑制、表出誇張ともに動機に偏りはなかった。悲しみの表出抑制については、向社会的動機が多くなるというネガティブ情動に関する予想とは一致せず、怒りの表出抑制とは異なる結果となった。悲しみの表出は、怒りと異なり攻撃的意図が含まれていないため、相手や状況のために抑制を求められることは少ないと考えられる。

喜びに関しては、表出抑制では調整動機に偏りが無い一方、表出誇張は向社会的動機から行われることが多いことが示された。表出抑制において向社会的動機が多くなるという予想とは一致しない結果となった。これは、本研究で挙

Table2-5. 各指標の結果の一覧

	怒り		悲しみ		喜び	
	表出抑制	表出誇張	表出抑制	表出誇張	表出抑制	表出誇張
調整相手	友人>家族, 恋人, 目下の人, 記述なし	家族, 友人>恋人	友人>恋人, 目上・ 目下の人, 記述なし	友人>目上・目下の 人, 記述なし	友人, その他>恋 人, 目上・目下の人	友人>家族, 恋人, 目上・目下の人, そ の他, 記述なし
調整動機	向社会的>自己志 向的	向社会的<自己志 向的	どちらも, 向社会的≒自己志向的		向社会的≒自己志 向的	向社会的>自己志 向的
情動生起原因	どちらも, 調整相手>相手以外		調整相手≒相手以 外	調整相手<相手以 外	調整相手<相手以 外	調整相手>相手以 外
経験頻度	表出抑制>表出誇張		表出抑制≒表出誇張		表出抑制<表出誇張	
関係変化	表出抑制≒表出誇張		表出抑制≒表出誇張		表出抑制<表出誇張	

げられた喜びの表出抑制が行われる状況が多様であったためと考えられる。一方、表出誇張に関しては、相手の気持ちを考慮して行われることが多いと考えられる。

情動生起原因

怒りに関しては、表出抑制、表出誇張ともに調整相手が怒りの原因であることが多いことが示された。怒りの表情は相手に対する攻撃性を示すため (Ekman, 2003)、怒りの原因となる対象に対して抑制あるいは誇張されることが多くなるのは自然なことだと考えられる。

悲しみについては、情動生起原因に関して、表出抑制では偏りがみられなかった一方、表出誇張では調整相手以外が悲しみの原因であることが多いことが示された。悲しみは他者からの共感を引き出す情動であり (Ekman, 2003, Malatesta & Wilson, 1988)、悲しみの原因が調整相手以外による経験に関して、調整相手に共感してほしい、あるいは共感しようといった動機から表出誇張されると考えられる。表出抑制、表出誇張ともに動機に偏りがなかったのも、悲しみが様々な原因で引き起こされているためその調整動機も多様となるのかもしれない。

喜びに関しては、表出抑制では調整相手以外が喜びの原因であることが多い一方、表出誇張は調整相手が喜びの原因であることが多いことが示された。相手が喜びの原因でない場合、喜びを共有しにくいため表出が抑制されるが、相手が喜びの原因となるときは、相手の気持ちを考慮して表出誇張されると考えられる。

経験頻度

怒りに関しては、表出抑制が、表出誇張に比べ頻度が高いことが示された。このことは先行研究からの仮説とも一致する。また、怒りの表出抑制の頻度は、悲しみや喜びの表出抑制よりも高いことが示された。前述したように、怒りの表情は攻撃的意図が含まれるため、他の情動よりも表出抑制が求められると考えられる。

悲しみに関しては、表出抑制と表出誇張で頻度の違いはみられなかった。悲

しみの表出抑制については、経験頻度が高くなるというネガティブ情動に関する予想とは一致せず、怒りの表出抑制とは異なる結果となった。前述したように、悲しみは、怒りと異なり、攻撃的ではなく共感を引き出す情動であることから、必ずしも表出抑制されるとは限らないと考えられる。

喜びに関しては、表出誇張が、表出抑制に比べ頻度が高くなることが示された。喜びは表出を求められることが多く表出誇張の頻度が高くなるという先行研究からの仮説を支持する結果となった。

調整相手との親密度

いずれの情動、方略においても有意な差はみられず、どの調整相手も同程度の親密さであることが分かった。これは、本研究で挙げられた調整相手が、いずれの方略においても友人や家族といった親しい相手であったためだと考えられる。

関係変化

怒りと悲しみについては、表出抑制と表出誇張で関係変化における違いはみられなかった。本研究で挙げられた調整相手は友人など親しい相手が多かったため、関係が安定しており、一時的な情動調整経験による関係性への影響が少なかった可能性がある。関係に変化がなかったということは関係悪化を阻止したとも言えるため、情動調整が相手との関係維持に有効であるとも考えられる。

喜びに関しては、表出誇張は、表出抑制に比べ、その後の関係が良好であることが明らかとなった。さらに、怒りや悲しみの表出誇張と比べても、関係が良好であることが示された。ポジティブ情動の表出は親和の形成と関連があり対人印象がよくなると言われており(Harker & Keltner, 2001)、喜びの表出を誇張することで対人関係の良化につながったと考えられる。

2-2. [研究 1] のまとめ

本調査から、表情表出による情動調整の実際の経験事例を取りあげて分析した結果、情動の種類や調整方略の違いによってそれぞれの特性が異なることが分かった。怒り、悲しみ、喜びの3つの情動について、表出抑制、表出誇張の両方略について検討することで、ポジティブ情動とネガティブ情動の違いを明らかにするとともに、怒りと悲しみにおいても動機や情動生起原因などにおいて異なる特性を示すことができた。喜びの表出誇張は、他の方略よりも調整相手との関係を良好にすることが示され、方略によっては表情表出による情動調整が調整相手との関係良化に役立つことが示唆された。また、いずれの情動・方略においても、関係の維持・発展といった向社会的動機だけではなく、自己の気持ちの伝達といった自己志向的動機からも情動調整が行われることが示されたことは、これまでの先行研究からの知見を補強するものである。コミュニケーションにおいて、自己の気持ちの抑制や伝達も重要な意味を持つと言える。

問題点も残されている。1つは、評定方法の問題である。経験頻度に関しては、調査参加者が想起した事例に関する頻度を測定したに過ぎず、本調査では取り出せなかった調整経験も含めた一般的頻度までは明らかにできていない。また、いずれの自己評定も1つの尺度からしか測定しておらず、各要因について十分に取り出せなかった可能性がある。質問の内容を改善したり評定尺度を増やしたりすることで、より厳密で幅広い調査が可能となるだろう。また、親しい関係以外の相手との情動調整についてあまり多くの記述が得られなかったことが問題点として挙げられる。これから関係を築く必要のある初対面の相手や上下関係のある相手の場合は、情動調整を行うことにより関係が良くなるなど異なる影響がみられるかもしれない。相手の立場の違いによる情動調整の機能の変化を明らかにすることも今後の検討課題の1つである。また、本研究における調整経験は、あくまで調整者視点から過去の経験を想起して記述したものである。実際のやり取りを観察したものではなく、情動調整を受け手がどのように感じるのかという点についても扱っていないため、情動調整を行ったことによるその後の関係変化を十分に捉えていなかった可能性が考えられる。今後は、実際の会話において情動調整を行った場合のやり取りを調べることで、より詳細で双方向的な影響が明らかになると期待できる。

研究 1 では、表出抑制と表出誇張の 2 つの方略について、実際の経験事例から情動調整が行われるプロセスの一端を知ることができた。次章からは、表情表出による情動調整を行うことでどのような影響が及ぼされるかについて、個人的状況（第 3 章）、擬似的対人状況（第 4 章）、対人状況（第 5 章）において検討した実証的研究についてまとめる。

第3章 表情表出による情動調整が調整者自身に及ぼす影響

3-1. 問題

本章では、表情表出による情動調整が調整者自身の主観的情動経験と記憶に及ぼす影響について、表出抑制と表出誇張両方略の比較検討(研究2)、および、ネガティブ情動の不一致表出(ネガティブ情動経験中にポジティブ情動表出を行う方略)についての検討(研究3)を行った。

表情表出による情動調整が調整者に及ぼす影響については、主にネガティブ情動の表出抑制を中心に、欧米において検討されてきた(e.g., Demaree et al., 2004; Gross & Levenson, 1997; Richards & Gross, 2000)。欧米での研究では、再評価との比較(Gross, 1998a)やいずれかの方略のみの単独の検討(Demaree et al., 2004; Gross & Levenson, 1997; Robinson & Demaree, 2007)がなされてきたが、表情表出による情動調整の中での比較検討は行われていない。先行研究においては、表出誇張が及ぼす影響について表出抑制と同様の影響が想定されている(Demaree et al. 2004)。しかし、情動調整がもたらす影響は、日常の経験頻度や社会的場面での調整動機の違いによって異なることが示唆されており(Butler et al., 2007; Bonanno, Papa, Lalande, Westphal, & Coifman, 2004)、表情表出による情動調整の中で比較した場合、それぞれの方略で異なる影響がみられる可能性も考えられる。実際、Demaree et al. (2004)の表出誇張に関する研究においても、表出抑制における先行研究(Gross & Levenson, 1997)と同様の結果にはなっていない。本論文の研究1において、怒りおよび喜びの表出抑制と表出誇張では経験頻度が異なることも示されている。怒りは、表出誇張より表出抑制されることの方が多く、喜びは、表出抑制より表出誇張されることの方が多い。したがって、表出抑制と表出誇張それぞれが及ぼす影響は、情動価の違いによって異なると予想される。しかし、表出抑制と表出誇張の効果を直接比較検討した研究はこれまでなされていない。

そこで研究2では、表出抑制と表出誇張という、相対する表情表出による情動調整方略が、調整者自身の情動経験と記憶にどのような影響を及ぼすのか、ネガティブ情動、ポジティブ情動の両面から検討した。ネガティブ情動あるいはポジティブ情動を喚起する映像を視聴中に、表情表出を意図的に抑制あるいは

は誇張させ、映像視聴後に視聴中の情動経験について自己報告させた後、映像の内容についての記憶テストを実施した。映像視聴中の調整者の表情は、表出抑制や誇張がうまく行なわれたか否かを確認するために、ビデオ撮影された。

ネガティブ情動の表出抑制は、日常的な経験頻度が高く表情表出と情動経験を区別しやすいため、情動経験に影響を及ぼすことなく表情表出のみを調整できると考えられている (Gross & Levenson, 1997)。本研究においても、日常の経験頻度の違いから、表出抑制と表出誇張は、ポジティブ情動とネガティブ情動のそれぞれにおいて異なる影響をもたらすのではないかと考えた。すなわち、ポジティブ情動では、表出抑制による情動経験への影響が大きく、表出誇張による情動経験への影響は小さいだろう。ネガティブ情動では、表出抑制による情動経験への影響が小さく、表出誇張による情動経験への影響は大きいだろう。

また、記憶については、先行研究では、ネガティブ情動のみであるが、表情表出の抑制や誇張を行うことによって記憶成績が低下するという結果が得られていることから (Richards & Gross, 1999, 2000; Robinson & Demaree, 2009)。表情表出による情動調整は刺激に対する注意資源を費やすと考えられている。一方で、表出抑制と表出誇張の比較において、表出誇張の方がより記憶成績が低下したことから、同じ反応調整段階の方略でも異なる影響を及ぼすことが示されてもいる (Robinson & Demaree, 2009)。記憶に関しても、表出抑制と表出誇張では、ポジティブ情動とネガティブ情動のそれぞれにおいて異なる影響があると考えられる。すなわち、ポジティブ情動では、表出誇張されることが多いため、表出抑制においてより記憶成績が低下するだろう。ネガティブ情動では、表出抑制されることが多いため、表出誇張においてより記憶成績が低下するだろう。

また、反応調節段階における情動調整方略として、不一致表出も挙げられる。不一致表出も、本来表出されるべき表情を抑制するという点で表出抑制と同様のプロセスを経ており、日常的にも使用されやすく重要な方略であると考えられる。不一致表出を扱った先行研究は少ないが、Robinson & Demaree (2007) は、悲しみを喚起された際に笑顔を見せるというネガティブ情動の不一致表出による情動的、認知的影響について検討した。その結果、生理的反応の増大と

記憶成績の低下という表出抑制に関する先行研究と同様の結果が示されており、ネガティブ情動の不一致表出は、表出抑制と同様の機能を有すると考えられた。しかしながら、日本人参加者においても、欧米の先行研究と同様の結果が得られるのか検討する必要がある。ネガティブ情動の不一致表出のプロセスは、ネガティブ情動の表情表出を抑制し、かつポジティブ情動の表情表出を誇張するという 2 段階の情動調整であり、表出抑制や表出誇張とは異なる結果が得られる可能性も考えられる。

研究 3 では、研究 2 と同様の手続きを用い、ネガティブ情動の不一致表出が、日本人参加者における主観的情動経験や記憶にどのような影響を及ぼすかを検討した。ネガティブな情動喚起映像を視聴中に、感じた情動とは反対の情動価の表情を表出させ、映像視聴後に視聴中の情動経験について自己報告させるとともに、映像の内容についての記憶テストを実施した。先行研究から、ネガティブ情動の不一致表出を行うことにより、情動経験は低下しないが、記憶成績が低下すると考えられる。

3-2. [研究 2] 表情表出の抑制・誇張が調整者の情動経験と記憶に及ぼす影響

3-2-1. 目的

研究 2 の目的は、表情表出の抑制と誇張について、ネガティブ、ポジティブ両情動から比較検討を行うことで、調整者の情動経験と記憶に及ぼす影響について明らかにすることであった。考えられる仮説は次の通りである。

日常の経験頻度の違いから、表出抑制と表出誇張は、ネガティブ情動とポジティブ情動のそれぞれにおいて情動経験および記憶に異なる影響をもたらすだろう。ネガティブ情動では、表出抑制を行っても情動経験に変化はなく、記憶成績の低下も少ない一方、表出誇張を行うことにより、情動経験が増大し、記憶成績が低下すると予想される。ポジティブ情動では、表出抑制を行うことにより、情動経験、記憶成績がともに低下する一方、表出誇張では情動経験に変化はなく、記憶成績の低下も少ないと予想される。

3-2-2. 方法

実験参加者 参加者は大学生で、女性 47 名、男性 49 名、計 96 名であった（平均 19.3 歳、 $SD = 1.6$ 歳）。16 名ずつ、喚起情動の種類（ネガティブ情動／ポジティブ情動）と情動調整方略（表出抑制／統制／表出誇張）に応じて 6 条件に振り分けた。

材料 1. 情動喚起映像：ネガティブ情動，ポジティブ情動を喚起する映像をそれぞれ 2 本ずつ用意した。ネガティブ情動喚起映像は，Sato, Noguchi, & Yoshikawa (2007) から選出した。どちらも映画からの抜粋であり，1 本は主に悲しみを喚起する映像，もう 1 本は，怒りをはじめとし，嫌悪，悲しみなどのネガティブ情動を喚起する映像であった⁵。ポジティブ情動喚起映像は，日本のお笑い映像を使用した⁶。2 本とも主に楽しさを喚起する映像であった。4 本

⁵ 悲しみ喚起映像は「The Champ」、怒り喚起映像は「遠い夜明け」からの抜粋であった。

⁶ 映像選出のための予備調査を行い，独自に用意した 4 本の日本のお笑い映像について，10 名の参加者に各映像を呈示した後情動経験を自己報告させた。4 本のうち，特にポジティブ情動を強く喚起したと示された 2 本を使用した（「ダ

の映像の平均時間は 149.5 秒（121～171 秒）であった。どちらの情動とも、1 本はいずれの調整方略条件でも情動調整を行わないベース映像、もう 1 本は表出抑制および表出誇張条件で情動調整をするターゲット映像とした。ベース映像時の表情表出および情動経験から、情動調整を行わないときの表情表出や情動経験が各調整条件の参加者間で同程度であることを確認した。その上で、ターゲット映像における結果の比較を行った。ネガティブ情動に関しては、悲しみ映像をベース映像、怒り映像をターゲット映像とした。なお、ベース映像、ターゲット映像どちらにおいても、ポジティブ情動映像とネガティブ情動映像の間で快—不快の強度自体に有意な差はみられなかった。なお、各映像の最初に白紙映像を 1 分間挿入した。白紙映像は、映像視聴中の表出行動がその映像によって引き起こされたものか参加者特有のものなのかを区別するために使用された。

2. 質問紙：表情表出、情動経験についての自己報告と、ターゲット映像の内容に関する記憶テストを質問紙によって実施した。(a) 表情表出：映像視聴中どの程度情動を表出したか、参加者が自己評価した。“映像視聴中に感じた感情を、どの程度表情や行動に表しましたか？”という 1 項目を、7 段階で評価した（0：全く表さなかった～6：非常に大きく表した）。(b) 情動経験：7 情動語（怒り、驚き、悲しみ、恐怖、嫌悪、楽しさ、満足）のそれぞれについて、どの程度感じたか評価した。いずれも 7 段階で評価した（0：全く感じない～6：非常に強く感じる）。(c) 記憶テスト：登場人物のせりふや服装、背景など、ターゲット映像の内容に関する問題を独自に作成した（例：“銃で撃たれた子どもの服の色は何色か？”）。ネガティブ映像、ポジティブ映像ともに 24 問からなり、5 択の選択肢から選ぶというものだった。併せて、各回答に対する確信度評定を 6 段階で行った（0：全く確信が無い～5：非常に確信がある）。難易度は、予備調査を実施し、両映像とも全体の正答率が 50～60%になるよう調整した⁷。

ウンタウンのごっつええ感じ」コント傑作集、フジテレビ）。

⁷ ポジティブ映像、ネガティブ映像それぞれについて 30 問からなる記憶テストを作成し、8 名ずつの参加者に対して予備調査を行い、特に正答率の低い問題（正答者が 0 人あるいは 1 人だった問題、ただし、1 人しか正答していない問題が複数あった場合は確信度のより低かった問題を削除）を省いてそれぞれ 24

装置 表情表出の客観的指標として、映像視聴中の表出行動をプロンプタを用いて撮影した。プロンプタとは、ハーフミラーを使用した映像呈示装置である。喚起映像がハーフミラーを通して呈示され、そのハーフミラーの背後から映像視聴中の表出行動をビデオカメラで撮影した。モニタから参加者までの視距離は約 1m であった。プロンプタを使用することによって、参加者は撮影されていることを意識せず、より自然な表出を撮影することが可能となった。

手続き 実験は個別に行われた。参加者はプロンプタの前に座り、実験者は、実験の課題を指示する時以外は参加者から姿が見えないよう参加者の横にあるついたての裏に座った。最初に、今回の実験は感情に関する実験であり、ある映像を視聴してもらうことを告げた。そして、緊張を和らげ表情を表出しやすくなるよう、簡単な顔の体操を行った。“あ・い・う・え・お”と大きく顔を動かしながら発声する際、普通に言う、怒りを込める、楽しさを込める、の3通りで発声してもらった。

1 本目はベース映像を呈示した。その際、しっかりと注意して見ること、もし気分が悪くなるなど実験を続けられないと思った場合はいつでもやめられること、映像が始まる前の真っ白な画面の間も画面の方を見ること、リラックスして見ること、と教示した。映像終了直後、情動経験と表情表出を自己報告によって評価した。

2 本目はターゲット映像を呈示した。その際の教示は、統制条件に関しては1 本目と同じであった。表出抑制条件では、映像を見ている間に何らかの感情を抱いた場合できるだけ反応や表情を抑制すること、他の人が見たときに自分がどんな感情を抱いているか分からないようにすること、顔の筋肉をできるだけ動かさないよう努力すること、と教示した。表出誇張条件では、映像を見ている間に何らかの感情を抱いた場合できるだけ反応や表情を誇張して表現すること、他の人が見たときに自分がどんな感情を抱いているか分かるようにすること、顔の筋肉を大きく動かして大げさに表現するよう努力すること、と教示した。ベース映像と同様、映像終了後に、情動経験と表情表出を自己報告によって評価した。

問とした。

5 分間の単純な計算問題による妨害課題の後、偶発課題としてターゲット映像の内容に関する記憶テストを行った。記憶テストは時間制限を設けず、参加者の自由なペースで実施した。

最後に、実験の目的を説明するとともに、表出行動の撮影について言及し、表出行動映像の使用に関する同意書にサインをしてもらい、実験は全て終了した。なお、正面のモニタ裏から撮影されていたことに気付いた参加者はいなかった。実験全体の所要時間は約 40 分だった。

3-2-3. 結果

表出抑制，表出誇張，統制の 3 条件でターゲット映像視聴時の情動経験，記憶テストの成績に差がないか，ネガティブ情動，ポジティブ情動それぞれで検討した。なお，多重比較に関しては，特に記述があるもの以外は全てテューキー法で行った。

操作チェック

ターゲット映像における結果の検討を可能にするため，まず，各映像刺激による情動喚起の効果，調整方略条件間の実験参加者の同質性を確認した。さらに，表情表出（自己評価・コーダー評価）から情動調整教示の効果を確認した。

表出行動映像に関しては，実験意図を知らない 2 名のコーダー（男女各 1 名）がコーディングした。Gross & Levenson (1993) を参考に，14 項目（7 情動語および口の動き，顔の動き，全体的な身体の動き，顔に触る程度，覚醒，快，不快）について評定した。各項目について，どの程度表情や行動に表れているかを 5 段階で評価した（0：全く表れていない～4：非常に強く表れている）。各参加者の，ベース映像前の白紙映像，ベース映像，ターゲット映像前の白紙映像，ターゲット映像の 4 種類の映像視聴時の各表出行動映像を通常で最後まで見た直後に評定するという作業を繰り返した。各映像は 1 度しか見ることができなかった。項目ごとに，ピアソンの相関分析を行い，2 名の評定値の相関が低い 5 項目（怒り，驚き，悲しみ，恐怖，覚醒）を除外したところ，残り 9 項目（嫌悪，楽しさ，満足，口の動き，顔の動き，全体的な身体の動き，顔に触る，快，不快）に関しては高い相関が得られた（平均相関係数： $r = .81$ ，

最も低い相関は不快： $r = .71$ ，最も高い相関は顔に触る： $r = .89$ ）。9項目それぞれについて，ベース映像あるいはターゲット映像時の評価から白紙映像時の評価を引き算した数値の2名の平均値を，各映像視聴時の客観的な表出行動指標とした。

1. 映像刺激による情動喚起の効果 各映像刺激が適切に情動喚起できたかどうか，ネガティブ情動映像，ポジティブ情動映像ともに，統制条件の結果から検討した。7情動語による情動経験評定に関して，ネガティブ情動のベース映像では悲しみ評定が，ターゲット映像では怒り評定が他の情動語よりも高く評定されているか，ポジティブ情動映像では楽しさ評定が他の情動語よりも高く評定されているか確認するため，7情動語の多重比較を行った（ダネット法；片側検定）。(a) ネガティブ情動映像：ベース映像では，悲しみ評定が他のいずれの情動よりも有意に高く，ターゲット映像では，怒り評定が恐怖，楽しさ，満足よりも有意に高かった⁸。(b) ポジティブ情動映像：ベース映像では，楽しさ評定が驚きを除く全ての情動よりも有意に高く，ターゲット映像では，楽しさ評定が他のいずれの情動よりも有意に高かった⁹。以上の結果より，ベース映像，ターゲット映像ともに，ネガティブ情動映像はネガティブ情動を，ポジティブ情動映像はポジティブ情動を適切に喚起したことが示された。

2. 実験参加者の同質性 各調整条件の参加者間で，情動調整を行わなかった場合の表情表出と情動経験の程度が同質であるかを確認するため，ネガティブ情動，ポジティブ情動それぞれの喚起条件について，ベース映像における結果を検討した。表情表出（自己評価・コーダー評価）に関しては，調整方略条件間で1要因分散分析を行った。情動経験では，3（調整方略条件）×7（情動語）の2要因分散分析を行った。(a) 表情表出：自己評価では，ネガティブ情

⁸ ベース映像における t 値は，怒り， $t(6) = -5.16$ ；驚き， $t(6) = -2.71$ ；恐怖， $t(6) = -4.29$ ；嫌悪， $t(6) = -4.53$ ；楽しさ， $t(6) = -6.86$ ；満足， $t(6) = -5.88$ であった。ターゲット映像における t 値は，驚き， $t(6) = -1.56$ ；悲しみ， $t(6) = -1.81$ ；恐怖， $t(6) = -2.88$ ；嫌悪， $t(6) = 0.60$ ；楽しさ， $t(6) = -7.21$ ；満足， $t(6) = -6.85$ であった。有意水準は5%であった。

⁹ ベース映像における t 値は，怒り， $t(6) = -8.71$ ；驚き， $t(6) = -0.34$ ；悲しみ， $t(6) = -9.37$ ；恐怖， $t(6) = -9.37$ ；嫌悪， $t(6) = -7.39$ ；満足， $t(6) = -3.29$ であった。ターゲット映像における t 値は，怒り， $t(6) = -10.58$ ；驚き， $t(6) = -4.33$ ；悲しみ， $t(6) = -10.94$ ；恐怖， $t(6) = -11.11$ ；嫌悪， $t(6) = -9.72$ ；満足， $t(6) = -2.61$ であった。有意水準は5%であった。

動喚起条件，ポジティブ情動喚起条件ともに，調整方略条件間で有意な差はみられなかった。コーダーによる評価では，ネガティブ情動喚起条件において，不快項目でのみ，統制条件の方が表出抑制条件よりも有意に表出していると評価された ($F(2, 47) = 6.62, p < .05$)。ポジティブ情動喚起条件では，満足項目でのみ，統制条件の方が表出抑制条件よりも有意に表出していると評価された ($F(2, 45) = 4.03, p < .05$)。(b) 情動経験：ネガティブ情動喚起条件，ポジティブ情動喚起条件ともに，主効果，交互作用で有意差はみられず，調整方略条件間での違いはなかった。以上の結果より，表情表出のコーダー評価において，ネガティブ情動喚起条件では不快項目，ポジティブ情動喚起条件では満足項目で条件間に差がみられたため，各項目はターゲット映像での検討対象から除外した。残りの項目に関しては，各調整方略条件の参加者の表情表出と情動経験の程度は同質であり，ターゲット映像での比較が可能となった。

3. 表情表出 情動調整が適切に行われたか確認するため，ターゲット映像における表情表出に関して，自己評価とコーダー評価の両方について，調整方略条件間で1要因分散分析を行った。それぞれの平均評定値および検定結果を，Table 3-1に示す。

(a) 自己評価：ネガティブ情動喚起条件，ポジティブ情動喚起条件ともに，調整方略条件間で有意な差がみられ，自己評価による表情表出が表出抑制，統制，表出誇張の順で有意に大きかったことが示された。(b) コーダーによる評価：項目別に分析を行った結果，ネガティブ情動喚起条件では，嫌悪，楽しさ，口の動き，顔の動き，身体の動き，快の6項目で調整方略条件の主効果が有意であった。多重比較の結果，嫌悪・顔の動き項目では，表出抑制，統制，表出誇張の順で有意に高かった。楽しさ・口の動き・身体の動き・快項目では，表出誇張条件が，統制・表出抑制両条件より有意に高かった。ポジティブ情動喚起条件では，楽しさ，口の動き，顔の動き，快の4項目で調整方略条件の主効果が有意であった。多重比較の結果，楽しさ・快項目は，表出抑制，統制，表出誇張の順で有意に高くなった。口の動き・顔の動き項目は，表出抑制条件が，統制・表出誇張両条件より有意に低かった。以上の結果より，ネガティブ情動，ポジティブ情動どちらの喚起条件においても，表出抑制，統制，表出誇張の順で表出行動が大きくなること，さらにはネガティブ情動喚起条件ではネガティ

Table3-1. ターゲット映像視聴時の表出行動

表出行動指標	ネガティブ情動						F値	
	表出抑制		統制		表出誇張			
自己評価	1.13	(1.03) ^a	3.31	(1.66) ^b	4.44	(0.81) ^c	30.43	**
コーダー評価								
嫌悪	0.00	(0.00) ^a	1.72	(1.00) ^b	2.66	(1.47) ^c	27.60	**
楽しさ	0.03	(0.59) ^a	-0.19	(0.48) ^a	1.06	(1.21) ^b	10.48	**
口の動き	-0.59	(0.66) ^a	0.16	(1.12) ^a	1.88	(1.06) ^b	27.32	**
顔の動き	-0.13	(0.74) ^a	0.66	(0.96) ^b	2.19	(0.87) ^c	29.70	**
身体の動き	-0.53	(0.62) ^a	-0.13	(1.24) ^a	1.03	(0.97) ^b	10.95	**
顔に触る	-0.81	(1.24)	-0.19	(0.83)	-0.41	(1.05)	1.45	
快	0.03	(0.13) ^a	-0.28	(0.45) ^a	0.75	(1.30) ^b	7.01	**

表出行動指標	ポジティブ情動						F値	
	表出抑制		統制		表出誇張			
自己評価	1.00	(0.82) ^a	3.38	(1.26) ^b	4.69	(0.95) ^c	53.31	**
コーダー評価								
嫌悪	0.13	(0.34)	-0.13	(0.72)	-0.19	(0.70)	1.16	
楽しさ	0.69	(1.00) ^a	1.84	(1.59) ^b	2.94	(0.79) ^c	14.65	**
口の動き	0.16	(1.18) ^a	1.34	(0.91) ^b	2.06	(0.81) ^b	15.46	**
顔の動き	-0.41	(0.78) ^a	1.31	(1.12) ^b	2.00	(0.86) ^b	28.33	**
身体の動き	-0.44	(0.70)	0.34	(1.21)	0.28	(1.26)	2.55	
顔に触る	-0.34	(0.72)	0.19	(1.17)	-0.13	(1.06)	1.14	
快	0.16	(0.77) ^a	1.88	(1.55) ^b	2.94	(0.77) ^c	26.24	**

注 1. カッコ内は標準偏差を示す。

注 2. ターゲット映像時の評価から白紙映像時の評価を引いた数値の平均値である。

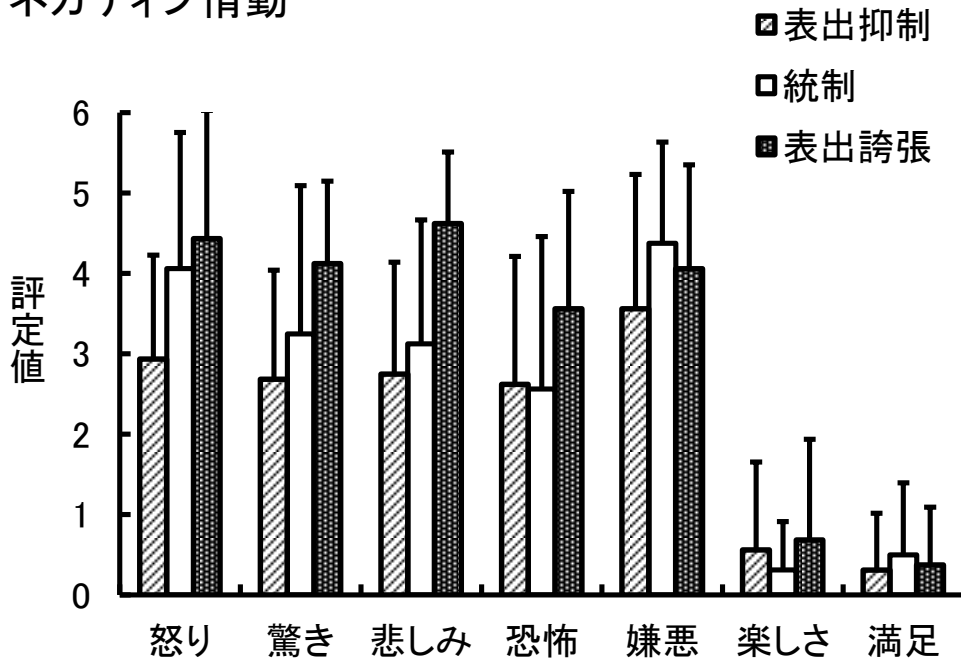
注 3. 上付きのアルファベットの異なるところに有意差がみられた (** $p < .01$, * $p < .05$)。

ブな表情表出, ポジティブ情動喚起条件ではポジティブな表情表出が増加することが示された。教示に従って適切に情動調整が行われたことが確認された。なお, ネガティブ情動の表出誇張によるポジティブな表情表出の増加に関しては, 評定値は1前後と低くネガティブな表情表出の方が高いため, 問題はないと考える。

情動経験

ネガティブ情動, ポジティブ情動それぞれの喚起条件ごとに, 自己評定した情動経験の調整方略条件別の平均評定値および *SD* を Figure 3-1 に示す。

ネガティブ情動



ポジティブ情動

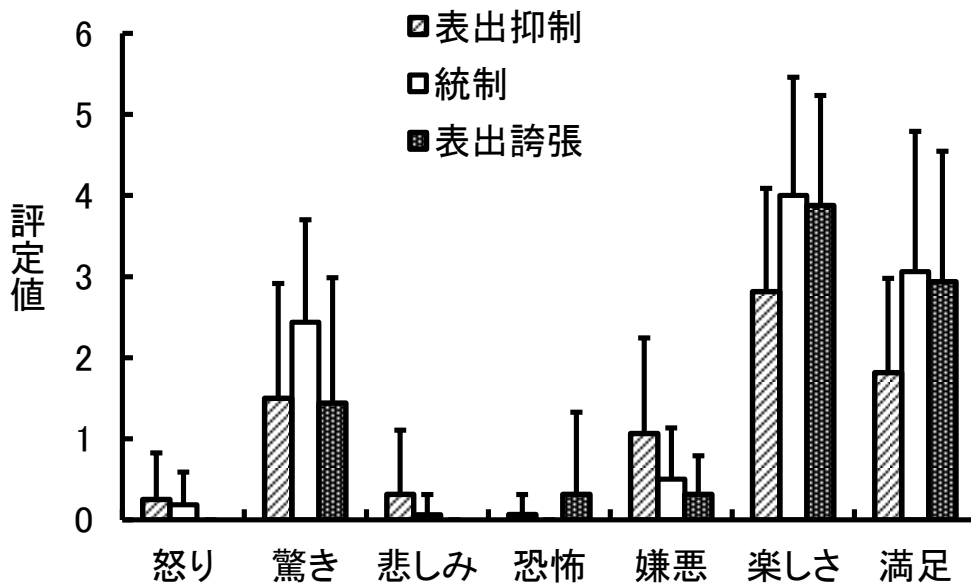


Figure 3-1. ターゲット映像視聴中の主観的情動経験の平均評定値および SD

ネガティブ情動，ポジティブ情動それぞれの喚起条件ごとに，3（調整方略条件）×7（情動語）の2要因分散分析を行った。ネガティブ情動喚起条件では，調整方略条件の主効果が有意で（ $F(2, 45) = 5.16, p < .05$ ），表出抑制条件よりも表出誇張条件で情動経験が有意に高かった。情動調整×情動語の交互作用も有意で（ $F(12, 270) = 2.33, p < .05$ ），下位検定を行ったところ，表出誇張条件よりも表出抑制条件で怒り・驚き経験が有意に低かった（ $F(2, 45) = 4.15, 4.01$ ，ともに $p < .05$ ）。表出抑制，統制条件よりも表出誇張条件で悲しみ経験が有意に高かった（ $F(2, 45) = 9.27, p < .01$ ）。ポジティブ情動喚起条件では交互作用が有意で（ $F(12, 270) = 3.40, p < .05$ ），下位検定の結果，表出誇張条件より表出抑制条件で嫌悪経験が有意に高かった（ $F(2, 45) = 3.61, p < .05$ ）。統制条件より表出抑制条件で楽しさ・満足経験が有意に低かった（ $F(2, 45) = 3.64, 3.27$ ，ともに $p < .05$ ）。以上より，ネガティブ情動喚起条件では，表出誇張により全体的な情動経験，特に悲しみ経験が統制条件よりも増大したが，表出抑制による変化はみられなかった。一方，ポジティブ情動喚起条件では，表出誇張による情動経験の変化はみられなかったが，表出抑制では統制条件よりもポジティブな情動経験が低下することが示された。

記憶

ネガティブ情動，ポジティブ情動それぞれの喚起条件ごとに，調整方略条件別の記憶テストの正答率および確信度評定の平均値と *SD* を，Figure 3-2 に示す。

正答率，確信度それぞれについて，情動別に調整方略条件を要因とした1要因分散分析を行ったところ，ネガティブ情動喚起条件では正答率が有意傾向で，表出誇張条件が表出抑制条件よりも正答率が低い傾向がみられた（ $F(2, 45) = 3.11, p = .06$ ）。ポジティブ情動喚起条件では正答率において有意な差がみられ，表出抑制条件が統制条件よりも正答率が低かった（ $F(2, 45) = 3.81, p < .05$ ）。確信度ではいずれの条件間においても有意な差はみられなかった。以上の結果より，ネガティブ情動喚起条件では，表出誇張することにより表出抑制よりも記憶成績が低下する傾向にあり，ポジティブ情動喚起条件では，表出抑制することにより統制条件よりも記憶成績が低下することが示された。記憶成績に対

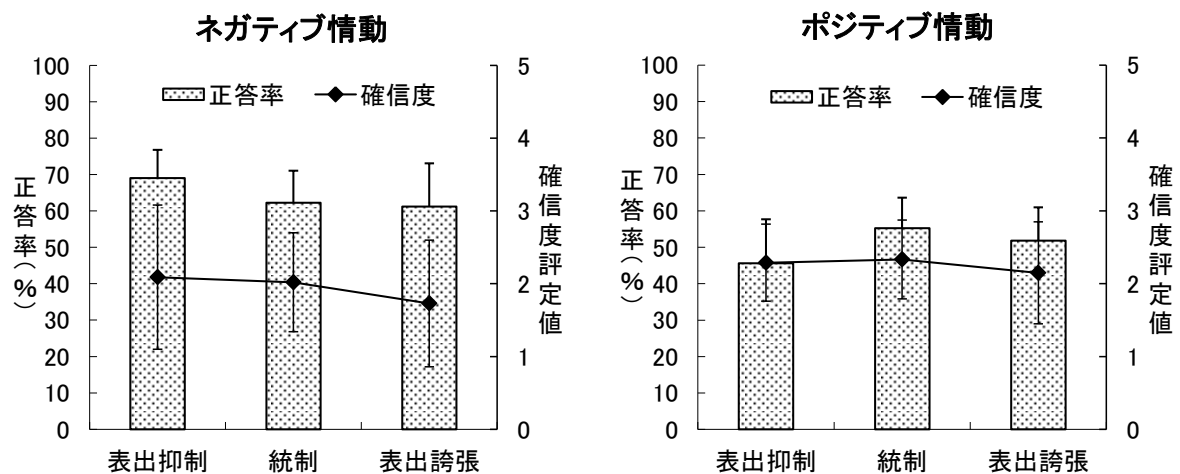


Figure 3-2. 記憶テストの正答率および確信度評定の平均値と *SD*

する確信度は、喚起された情動や情動調整方略の各条件に関係なく、中程度であった。

3-2-4. 考察

本研究では、表出抑制と表出誇張という2つの反応調節段階の方略に関して、ネガティブ情動、ポジティブ情動の両面から、調整者自身の情動経験と記憶に及ぼす影響について比較検討した。

情動経験

ネガティブ情動に関しては、表情表出を意図的に抑制した場合、表出抑制しないときと同程度のネガティブ情動を経験することが示された。この結果は、これまでの多くの先行研究 (Gross & Levenson, 1993, 1997; Gross, 1998a) と一致し、ネガティブ情動の表出抑制では情動経験に影響を及ぼすことなく表情表出のみを調整できることが改めて確認された。一方、ネガティブな表情表出を意図的に誇張した場合は、表出誇張しないときよりもネガティブな情動経験が増大することが示された。この結果は、ネガティブな表情表出を誇張しても情動経験は変化しないという Demaree et al. (2004) の結果とは異なる。

ポジティブ情動に関しては、表情表出を意図的に抑制した場合、表出抑制しないときよりもポジティブな情動経験を低下させることが示された。この結果

は先行研究（Gross & Levenson, 1997）と一致し、ポジティブ情動の表出抑制は情動経験にも影響を及ぼすことが改めて確認された。一方、ポジティブな表情表出を意図的に誇張した場合は、表出誇張しないときと同程度のポジティブ情動を経験することが示された。この結果は、ポジティブな表情表出を誇張しても情動経験は変化しないという Demaree et al. (2004) の結果とも一致する。

以上より、表出抑制に関しては、ネガティブ情動、ポジティブ情動どちらにおいても先行研究と一致する結果が得られた。表出誇張に関しては、ネガティブ情動では情動経験が増大し、ポジティブ情動では情動経験は変化しないという結果となった。この結果は、表情表出からのフィードバックが情動経験や行動に影響を与えるという顔面フィードバック仮説（Tomkins, 1962）と異なるだけでなく、表出誇張が一様に情動経験に影響を及ぼさないということでもない。すなわち、表情表出と情動経験との関係性において表出抑制と表出誇張で異なる関係がみられることが明らかとなった。その違いに関しては、日常的な経験頻度を反映している可能性が考えられる。ネガティブ情動は、日常的に表出抑制されることが多く表出誇張されることが少ない一方で、ポジティブ情動は日常的に表出誇張されることが多く表出抑制されることが少ない。そのため、ネガティブな表情表出を抑制しても情動経験まで低下させることはないが、誇張する場合は情動経験もともに増大する一方、ポジティブな表情表出を誇張しても情動経験まで増大させることはないが、抑制した場合は情動経験もともに低下すると考えられる。以上を踏まえると、ポジティブ情動の表出抑制による嫌悪経験の増大も、表出抑制すること自体の困難さが引き起こした結果かもしれない。

なお、Gross らと類似した手続きを用いて表出誇張について検討した Demaree et al. (2004) の研究では、本研究とは異なり、ネガティブ情動の表出誇張によるネガティブな情動経験の増大はみられなかった。この矛盾に関しては、まず方法上の違いとして、使用した情動喚起映像が本研究とは異なることが挙げられる。Demaree et al. (2004) は嫌悪を喚起する映像を使用したのが、本研究では、怒り、嫌悪、悲しみなどを喚起する映像であった。また、文化差を反映している可能性も考えられる。日本人は、欧米人よりも情動表出が少ないと言われている（Matsumoto, Consolacion, Yamada, Suzuki, Franklin,

Paul, Ray, & Uchida, 2002)。さらに、日本人は、ネガティブな情動状態のときにもポジティブな表情表出（笑顔）がよくみられると言われており（Ekman, 2003）、ネガティブ情動の表出誇張に関しては、欧米の人々に比べ、より経験頻度が低くなると考えられるため、本研究ではネガティブな情動経験を増大させたのかもしれない。この仮説を明らかにするためには、今後、日米において同じ条件で比較検討を行わなければならない。

以上より、表出誇張に関してはこれまであまり検討されてこなかったが、表出抑制と同一の情動喚起刺激を使用して直接比較を行うことで、どちらも表情表出による情動調整とはいえ表情表出と情動経験の関係性は異なることが明らかとなった。それは、ネガティブ情動とポジティブ情動それぞれにおける調整される頻度を反映している可能性が示唆された。

記憶

表出抑制に関しては、ネガティブ情動の表出抑制では記憶の低下はみられなかったが、ポジティブ情動の表出抑制はポジティブ情動経験に関する記憶を低下させた。一方、表出誇張では、ネガティブ情動の表出誇張では表出抑制よりも記憶成績が低下する傾向が示されたが、ポジティブ情動の表出誇張では記憶は低下しなかった。ポジティブ情動の表出抑制については、ネガティブ情動についての先行研究（Richards & Gross, 1999, 2000）と一致する結果となった。一方、ネガティブ情動の表出抑制およびポジティブ情動の表出誇張に関しては、表出抑制および表出誇張を行うことで記憶が低下するというネガティブ情動に関する先行研究（Demaree & Robinson, 2009; Richards & Gross, 1999, 2000）とは一致しなかった。また、ネガティブ情動の表出誇張に関しては、表出抑制条件よりも記憶成績が低下するという結果となり、表出抑制と表出誇張では記憶に及ぼす影響が異なることが示唆された。

以上より、記憶についても、情動経験と同様、日常的な頻度が反映している可能性が考えられる。先行研究では、表情表出による情動調整を行うことは、持続的で言語的な自己モニタリングによって認知的負荷がかかるため記憶が低下するとされていた（Richards & Gross, 1999, 2000）。しかし、本研究の結果は、扱った方略すべてにおいて一様に記憶成績が低下した訳ではないため、そ

れだけでは説明できない。ネガティブ情動の表出抑制およびポジティブ情動の表出誇張については日常的に経験頻度が高いため認知的負荷は小さいが、ネガティブ情動の表出誇張およびポジティブ情動の表出抑制については経験頻度が高くなく認知的負荷が大きくなると考えられる。そのため、ネガティブ情動の表出誇張およびポジティブ情動の表出抑制では記憶成績が低下したが、ネガティブ情動の表出抑制およびポジティブ情動の表出誇張では記憶成績への影響がみられなかったと考えられる。

欧米における先行研究との違いに関しては、文化差が反映された可能性が考えられる。欧米文化とアジア文化では、表出抑制を行う頻度や動機が異なると言われている（Butler et al., 2007）。相互依存的で協調的な日本では、日常的に他者との関係を重視して表出抑制することから、ネガティブ情動の表出抑制による認知的負荷が小さく、ポジティブ情動の表出抑制は認知的負荷が大きくなるのではないだろうか。表出誇張に関しても同様に、ポジティブ情動の表出誇張による認知的負荷が小さく、ネガティブ情動の表出誇張は認知的負荷が大きくなると考えられる。

3-2-5. [研究 2]のまとめ

研究 2 では、表情表出の抑制および誇張が調整者の情動経験と記憶に及ぼす影響についてネガティブ情動、ポジティブ情動の両情動から検討した。表出誇張に関してはこれまであまり検討されてこなかったが、表出抑制と同一の情動喚起刺激を使用して直接比較を行うことで、どちらも表情表出による情動調整とはいえ表情表出と情動経験の関係性および記憶への影響が異なることが明らかとなった。情動経験、記憶どちらについても、ネガティブ情動とポジティブ情動それぞれにおける調整される頻度を反映している可能性が示唆された。

3-3. [研究 3] ネガティブ情動の不一致表出が調整者の情動経験と記憶に及ぼす影響

3-3-1. 目的

研究 3 の目的は、ネガティブ情動の不一致表出が調整者の情動経験と記憶に及ぼす影響について、研究 2 と同様の手法を用いて日本人参加者を対象に検討することであった。

仮説としては、Robinson & Demaree (2007) と同様の結果が得られると予想した。ネガティブな情動喚起映像を視聴中に不一致表出を行うことにより、情動経験に変化はみられないが、記憶成績は低下するだろう。

3-3-2. 方法

実験参加者 大学生・大学院生 32 名が実験に参加し、うち女性 18 名、男性 14 名であった（平均 21.0 歳、 $SD = 2.3$ 歳）。不一致表出条件と情動調整を行わない統制条件それぞれに、16 名ずつランダムに割り振られた。

材料 1. 情動喚起映像：研究 2 で用いた 2 本のネガティブ情動喚起映像を使用した。同様に、1 本はいずれの調整方略条件でも情動調整を行わないベース映像（主に悲しみを喚起する映像）、もう 1 本は不一致表出条件で情動調整をするターゲット映像（怒りをはじめとし、嫌悪、悲しみなどを喚起する映像）とした。

2. 質問紙：研究 2 と同様、表情表出、情動経験についての自己報告と、ターゲット映像の内容に関する記憶テストを質問紙によって実施した。

装置 研究 2 と同様、映像視聴中の表出行動をプロンプタを用いて撮影した。

手続き 実験の流れや教示は、研究 2 とほぼ同様であった。

実験は個別に行われ、参加者はプロンプタの前に座り、映像を視聴した。視聴中の表出行動がプロンプタの背後のカメラによって撮影された。

1 本目はベース映像を呈示し、映像終了直後、情動経験と表情表出を自己報告によって評価した。

2 本目はターゲット映像を呈示した。不一致表出条件では、映像を見ている間に何らかの感情を抱いた場合できるだけ逆の反応や表情を表出すること、他の人が見たときに自分がどんな感情を抱いているか分からないように、逆の感情を感じていると思わせるように顔の筋肉を大きく動かして表現するよう努力すること、と教示した。映像終了後に、情動経験と表情表出を自己報告によって評価した。

5 分間の単純な計算問題による妨害課題の後、偶発課題としてターゲット映像の内容に関する記憶テストを行った。

最後に、実験の目的を説明するとともに、表出行動の撮影について言及し、表出行動映像の使用に関する同意書にサインをしてもらい、実験は全て終了した。実験全体の所要時間は約 40 分だった。

3-3-3. 結果

不一致表出条件と統制条件でターゲット映像視聴時の主観的情動経験および経験時の記憶成績に差がないか検討した。なお、多重比較に関しては、特に記述があるもの以外は全てテューキー法で行った。

操作チェック

ターゲット映像における結果の検討を可能にするため、各映像刺激による情動喚起の効果、調整方略条件間の実験参加者の同質性を確認した。さらに、表情表出（自己評価・コーダー評価）から情動調整教示の効果を確認した。

表出行動映像のコーディング方法は、研究 2 と同様であった。実験意図を知らない 2 名のコーダー（男女各 1 名）が、Gross & Levenson (1993) を参考に、14 項目（7 情動語および口の動き、顔の動き、全体的な身体の動き、顔に触る程度、覚醒、快、不快）について評定した。各参加者の各表出行動映像を通常で最後まで見た直後に、各項目について、どの程度表情や行動に表れているかを 5 段階で評価した。項目ごとに、ピアソンの相関分析を行い、2 名の評定値の相関が低い 5 項目（怒り、驚き、恐怖、嫌悪、覚醒）を除外したところ、9 項目（悲しみ、楽しさ、満足、口の動き、顔の動き、全体的な身体の動き、顔に触る、快、不快）で高い相関が得られた（平均相関係数： $r = .77$ 、最

も低い相関は不快： $r = .64$ ，最も高い相関は顔に触る： $r = .87$ ）。9項目それぞれについて，ベース映像あるいはターゲット映像時の評価から白紙映像時の評価を引き算した数値の2名の平均値を，各映像視聴時の客観的な表出行動指標とした。

1. 映像刺激による情動喚起の効果 研究2と同様，各映像刺激が適切に情動喚起できたかどうか，統制条件の結果から検討した。7情動語による情動経験評定に関して，ベース映像では悲しみ評定が，ターゲット映像では怒り評定が他の情動語よりも高く評定されているか確認するため，7情動語の多重比較を行った（ダネット法；片側検定）。ベース映像では，悲しみ評定が驚きを除く他のいずれの情動よりも有意に高く，ターゲット映像では，怒り評定が楽しさ，満足よりも有意に高かった¹⁰。以上の結果より，ベース映像，ターゲット映像ともに，ネガティブ情動を適切に喚起したことが示された。

2. 実験参加者の同質性 研究2と同様，両条件の参加者間で，情動調整を行わなかった場合の表情表出と情動経験の程度が同質であるかを確認するため，ベース映像における結果を検討した。表情表出（自己評価・コーダー評価）に関しては，各項目ごとに調整方略条件間で t 検定を行った。情動経験では，2（調整方略条件） \times 7（情動語）の2要因分散分析を行った。(a) 表情表出：自己評価，コーダー評価どちらにおいても調整方略条件間で有意な差はみられなかった。(b) 情動経験：主効果，交互作用ともに有意差はみられず，調整方略条件間での違いはみられなかった。以上の結果より，各調整方略条件の参加者の表情表出と情動経験の程度は同質であり，ターゲット映像での比較が可能となった。

3. 表情表出 情動調整が適切に行われたか確認するため，ターゲット映像における表情表出に関して，各項目ごとに調整方略条件間で t 検定を行った。それぞれの平均評定値および検定結果を，Table 3-2 に示す。

¹⁰ ベース映像における t 値は，怒り， $t(6) = -5.41$ ；驚き， $t(6) = -0.54$ ；恐怖， $t(6) = -2.98$ ；嫌悪， $t(6) = -4.20$ ；楽しさ， $t(6) = -6.36$ ；満足， $t(6) = -5.28$ であった。ターゲット映像における t 値は，驚き， $t(6) = 0.75$ ；悲しみ， $t(6) = 0.12$ ；恐怖， $t(6) = -1.24$ ；嫌悪， $t(6) = 2.11$ ；楽しさ， $t(6) = -5.35$ ；満足， $t(6) = -5.97$ であった。有意水準はいずれも5%であった。

Table3-2. ターゲット映像視聴時の表出行動

表出行動指標	不一致表出		統制		T値
自己評価	3.19	(1.38)	2.94	(1.12)	0.56
コーダー評価					
悲しみ	0.79	(0.96)	0.73	(1.07)	0.14
楽しさ	1.36	(1.22)	-0.30	(1.07)	3.91 **
満足	0.79	(1.01)	-0.60	(0.71)	4.28 **
口の動き	1.18	(0.93)	-0.17	(0.94)	3.87 **
顔の動き	1.00	(0.98)	0.47	(0.79)	1.62
身体の動き	0.36	(0.72)	-0.23	(0.46)	2.66 *
顔に触る	0.32	(1.07)	-0.70	(1.03)	2.62 *
快	1.00	(0.76)	-0.23	(0.88)	4.02 **
不快	0.71	(1.03)	0.90	(0.69)	-0.57

注 1. カッコ内は標準偏差を示す。

注 2. ターゲット映像時の評価から白紙映像時の評価を引いた数値の平均値である。

注 3. 上付きのアルファベットの異なるところに有意差がみられた(** $p < .01$, * $p < .05$)。

(a) 自己評価：調整方略条件間で有意な差がみられなかった。(b) コーダーによる評価： t 検定の結果、楽しさ、満足、口の動き、身体の動き、顔に触る、快の6項目で、不一致表出条件の方が統制条件より有意に高かった。以上の結果より、不一致表出において主にポジティブな表情表出が増加することが示され、教示に従って適切に情動調整が行われたことが確認された。

情動経験

自己評定した情動経験の調整方略条件別の平均評定値およびSDをFigure 3-3に示す。

2(調整方略条件)×7(情動語)の2要因分散分析を行ったところ、調整方略条件の主効果が有意で($F(1, 30) = 4.46, p < .05$)、統制条件よりも不一致表出条件で情動経験が有意に高かった。不一致表出をすることにより全体的な情動経験が統制条件よりも増大することが示された。

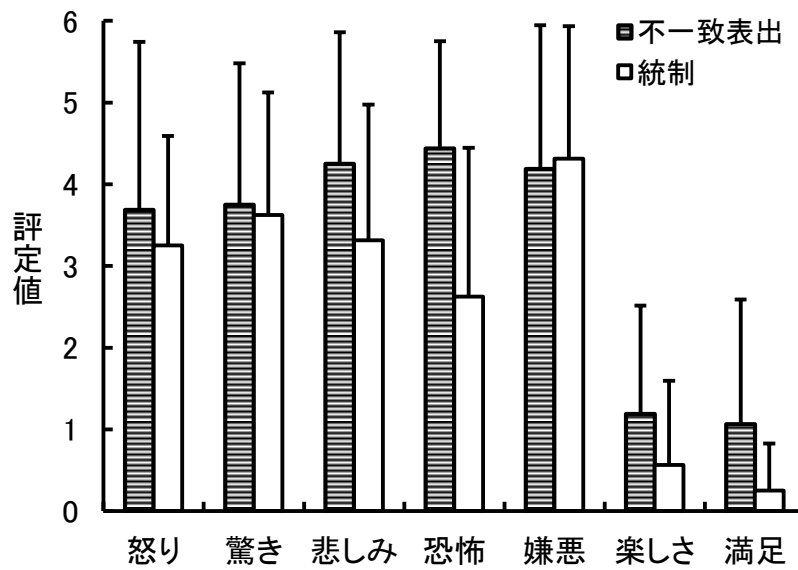


Figure 3-3. ターゲット映像視聴中の主観的情動経験の平均評定値およびSD

記憶

調整方略条件別の記憶テストの正答率および確信度評定の平均値とSDをFigure 3-4に示す。

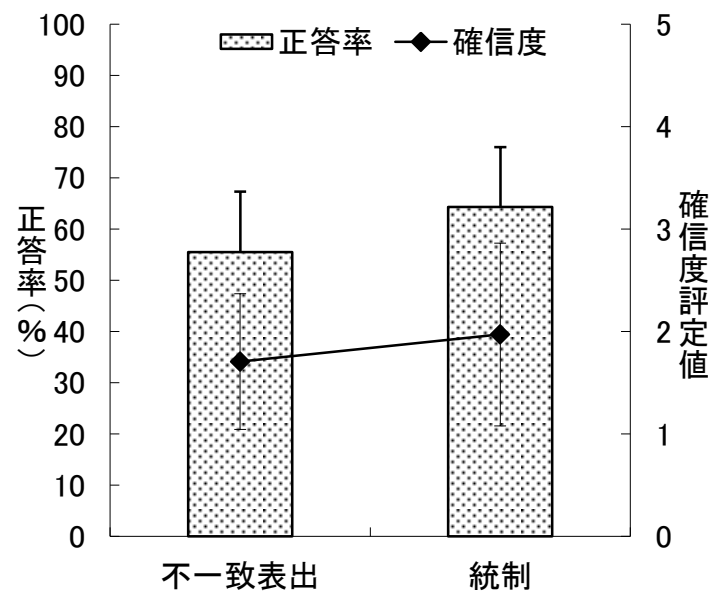


Figure 3-4. 記憶テストの正答率および確信度評定の平均値とSD

正答率，確信度それぞれについて，調整方略条件を要因とした 1 要因分散分析を行ったところ，正答率において有意差がみられ，不一致表出条件は統制条件よりも正答率が低かった ($F(1, 30) = 4.53, p < .05$)。確信度では有意な差はみられなかった。以上の結果より，不一致表出を行うことにより統制条件よりも記憶成績が低下することが示された。

3-3-4. 考察

本研究では，ネガティブ情動の不一致表出に関して，調整者自身の主観的情動経験および記憶に及ぼす影響について日本人参加者を対象に検討した。

情動経験

ネガティブ情動経験時にポジティブな表情を意図的に表出した場合，自然にネガティブな表情表出をしたときよりも情動経験が増大することが示された。ネガティブ情動の不一致表出は，ネガティブな表情表出を抑制し，かつポジティブな表情を表出するという，ネガティブ情動の表出抑制とポジティブ情動の表出誇張の両方のプロセスが求められる。そのため，調整者にとっての負担が大きく，自然に表情表出するよりも心理的負担が増大したと考えられる。しかし，Robinson & Demaree (2007) では，悲しみ経験時に笑顔を表出しても情動経験は変化しないという結果となっており，本研究とは一致しない。この矛盾に関して，本研究では，Robinson & Demaree (2007) における悲しみの不一致表出とは異なり，悲しみの他に怒りや嫌悪といった多様なネガティブ情動を喚起する状況であったことが一因だった可能性が考えられる。悲しみとは異なり，怒りのような他者に向けられる攻撃的情動を抑制し笑顔を見せることはより大きな負担となるのかもしれない。今後は，情動の違いにも焦点を当て，検討していく必要があると考えられる。

記憶

ネガティブ情動経験時にポジティブな表情を意図的に表出した場合，自然にネガティブな表出したときよりも記憶成績が低下することが示された。これは，Robinson & Demaree (2007) の結果と一致する。ネガティブ情動の不一致表出

は、ネガティブ情動の表出を抑制し、ポジティブ情動の表出を行うという 2 段階のプロセスが求められるため、調整者にとって認知的負荷が大きく、情動喚起刺激に対して配分される注意資源が減少することで記憶成績が低下することが改めて示された。

3-3-5. [研究 3]のまとめ

本研究では、ネガティブ情動の不一致表出が調整者自身の主観的情動経験および記憶に及ぼす影響について検討した。その結果、ネガティブな情動経験時に笑顔を見せることは、主観的な情動経験を増大させ経験時の記憶を低下させることが示された。情動経験に関しては先行研究との違いもみられ、詳細な情動に分けて比較する、あるいは文化差について調べるなど、より詳細な検討が必要であると考えられる。また、研究 2 における表出抑制と表出誇張の結果とも異なっており、不一致表出がこれらの方略とは異なったプロセスで行われている可能性が示唆された。

3-4. [研究 2]と[研究 3]のまとめ

研究 2 と研究 3 より，表情表出による情動調整が調整者の情動経験と記憶に及ぼす影響について，複数の方略から検討し，その違いを示すことができた。先行研究からの知見（cf. Table1-3）に，研究 2 と研究 3 の結果を加えたものを Table3-3 に示す。

Table 3-3. 先行研究および研究 2，研究 3 から得られた知見

	再評価		表出抑制		表出誇張		不一致表出	
	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ
情動的影響								
主観的 情動経験		+	-	0	0	0		0
研究2, 3			-	0	0	-		-
生理的反応		0	-	-	-	-		-
認知的影響								
		0		-		-		-
研究2, 3			-	0	0	-		-
社会的影響								
		0		-				

注 1. “ポジ”はポジティブ情動，“ネガ”はネガティブ情動を示す。

注 2. “+”はポジティブな影響，“-”はネガティブな影響，“0”は影響なしを意味する空白箇所は未検討。

これらの研究には課題も残されている。本章における 2 つの研究では，怒りや悲しみといった特定の情動ではなく，ポジティブ情動・ネガティブ情動という大きな分類で実施された。そのため，研究 2 と 3 の結果は，ある特定の情動にのみ特有の現象であった可能性も考えられる。先行研究との違いについても，情動喚起刺激が異なるため，喚起される情動が厳密には異なることが影響した可能性を否定できない。今後は，特定の情動に対する調整の影響についても検討していく必要がある。

研究 2 と 3 では，調整者自身の精神的健康に及ぼす影響に焦点を当てるため，

個人状況を設定した手法を用いており、対人的影響に関して全く扱われていない。表情表出による情動調整は社会的相互作用に影響を与えられていると言われており (Lopes et al., 2005)、個人内で行われる情動調整が他者に影響を及ぼすかどうかを明らかにすることも非常に意義があると考えられる。ただし、研究 2 と 3 で個人状況において検討したことにより、情動調整が調整者の情動経験と記憶において重要な機能を有することを示したことは大きな成果である。続く研究 4 および研究 5 において、対人的影響について検討した結果について述べる。

第 4 章 擬似的対人場面において表情表出による情動調整が受け手に及ぼす影響

4-1. [研究 4] 不一致表出が受け手の情動と対人印象判断に及ぼす影響

4-1-1. 問題と目的

研究 4 では、表情表出による情動調整の 1 つである不一致表出に着目した。これまでの先行研究では、不一致表出が調整者自身に及ぼす影響について検討されてきた。その結果、ネガティブ情動経験中にポジティブ情動表出をすることは、調整者の交感神経活動の増幅 (Robinson & Demaree, 2007) や、主観的情動経験の増大、情動経験時の記憶低下 (研究 3) を招くことが示された。ネガティブ情動の不一致表出は、認知的負荷が大きく調整者自身の精神的健康にネガティブな影響をもたらすと考えられる。

表情表出による情動調整が受け手に及ぼす影響に関しては、主に表出抑制について検討されており、調整者がネガティブ情動の表出抑制を行うことにより、受け手のストレス反応が増大し、調整者に対する親密感が低下することが示されている (Butler et al., 2003)。

一方、不一致表出が受け手に及ぼす影響に関してはこれまで検討されていない。調整者に及ぼす影響に関しては表出抑制と不一致表出では異なる傾向が示されており (第 3 章)、受け手の情動や対人印象判断に及ぼす影響についても表出抑制と不一致表出では異なる可能性が考えられる。表出抑制は、表情表出が少なくなるため、表情から調整者の気持ちや意図を推測することが難しく、受け手にストレスをもたらしやすいとされている (Butler et al., 2003)。一方、不一致表出は、情動価は異なるものの外見上の表情表出は低減しない。適切な情動表出がポジティブな結果をもたらすことは、先行研究からも明らかである。ポジティブ情動の表出は親和の形成と関連があり、対人印象がよくなることが示されている (Harker & Keltner, 2001)。また、社会的相互作用における情動の自己開示や相手の反応は、親密さの形成にとって重要であると言われている (Laurenceau, Barrett, & Pietromonaco, 1998)。したがって、不一致表出に関しては、ネガティブ情動を感じていても笑顔を見せることで受け手にポジティブ

ブな気持ちをもたらしたり、ポジティブ情動を感じていてもネガティブな表情表出をすることで受け手と共感できたりと、表情表出が低減する表出抑制とは異なり、必ずしも対人的にネガティブな影響をもたらすとは限らないと考えられる。また、痛み表出の研究では、表情表出は表出者の情動状態を推測する際に重要な判断材料となり、表情表出の受け手は、偽りの表情でもその表情表出の強さに応じた情動を推測することが示されている(Poole & Craig, 1992)。内的な情動状態とは不一致の表情表出であっても、受け手は、表出された情動を推測したり感じたりするかもしれない。一方、同じく痛み表出の研究において、真の表情表出と偽りの表情表出の区別は難しいものの、偽りの痛みの表情表出は、真の表情表出よりも多くの部位の表情筋が動き、表情の強度や持続時間も異なることが示されている(Hill & Craig, 2002; Prkachin, 2005)。不一致表出は、真の表情表出を抑制し異なる情動価の表情を表出するため、表出誇張あるいは何も感じていないのに何らかの表情を示すより難しい表出であると言える。したがって、受け手に対して実際にどんな情動を経験したか推測できないよう適切に不一致表出が行われたかどうかによって、受け手に及ぼす影響は異なると考えられる。

本研究では、不一致表出をすることが受け手の情動状態や調整者に対する対人印象判断認知に及ぼす影響について調べた。仮説としては、受け手の情動状態や印象判断に及ぼす影響は、表出者の表情表出に対する真偽の推測と関連すると考えられる。すなわち、表出者による不一致表出に対して、実際に経験した情動を表出していると判断された場合は、自然な表情表出と同様の影響を及ぼす一方、実際に経験した情動を表出していないと判断された場合は、自然な表情表出とは異なる影響を及ぼすことが予想される。実験参加者を受け手とし、不一致表出と情動調整を行わない自然表出の表情映像を見せて判断を求めるという方法で、表出者の影響を統制した実験を行った。表出者の表情表出に対する真偽判断をしてもらい、その評定と各従属変数との相関関係についても調べた。

4-1-2. 方法

実験参加者 大学生・大学院生 20名、うち女性 12名、男性 8名であった(平

均 20.7 歳， $SD = 1.3$ 歳)。

デザイン 2(表出者の表情表出：ポジティブ情動表出，ネガティブ情動表出) × 2(情動調整：不一致表出，自然表出)の 2 要因計画であった。表情表出の種類は参加者間要因，情動調整の種類は参加者内要因であった。

材料 1. 実験装置：映像刺激を呈示するために，24 インチのデスクトップパソコン 1 台を使用した。

2. 表出者映像：男女 2 名ずつ，計 4 名の人物動画を用意した(平均 21.3 歳， $SD = 1.0$ 歳)。各人物につき，ポジティブ情動の不一致表出と自然表出，ネガティブ情動の不一致表出と自然表出の計 4 種類の映像があった。いずれも時間は約 1 分で，音声はなかった。

これらの表出者映像は，ポジティブあるいはネガティブな情動喚起映像を個人状況で視聴中の表情表出を撮影したものであった。使用された情動喚起映像は，Sato et al. (2007) より選出されたもので，ポジティブ情動喚起映像は主に楽しさ，ネガティブ情動喚起映像は主に怒りや嫌悪を喚起するものであった¹¹。不一致表出に関しては，情動喚起映像を視聴する際に，感じた感情とは逆の情動価の表情表出をするよう教示をし，意図的に表情表出を操作したものであった。プロンプタを用いて，映像視聴中の表出行動が正面からビデオカメラで撮影された。予備調査により，男女 4 名ずつ計 8 名から 4 名(男女各 2 名)を選出した¹²。各条件の表情表出の強度や好ましき・魅力度ができるだけ同程度になるよう配慮したが，ネガティブ情動の不一致表出に対する表情表出の強度評定において男性表出者と女性表出者で有意差がみられたため¹³，結果の分析につ

¹¹ いずれの映像も映画から抜粋されたものであり，ポジティブ情動喚起映像は「恋人たちの予感」，ネガティブ情動喚起映像は「遠い夜明け」からの抜粋であった。

¹² 予備調査は 7 名が参加した。1 度ずつ呈示された各表出者の映像に対して，7 情動語（怒り，驚き，悲しみ，恐怖，嫌悪，楽しさ，満足）による情動表出の強度（7 段階評定）と好ましきと魅力度（7 段階 SD 法）の評定を行った。

¹³ 女性表出者の方が，男性表出者よりも，よりネガティブ情動が強く，ポジティブ情動が弱く表出されていると評定された（悲しみ，恐怖，嫌悪，楽しさ，満足それぞれ順に， $F(1, 91) = 42.15, 28.38, 6.24, 8.01, 5.43$ ，いずれも $p < .05$)。男性はネガティブ情動を表出するものではないという表示規則が働いた可能性

いて男性表出者と女性表出者に分けて行った。

従属変数 表出者の映像視聴中の受け手の情動経験，表出者に対する情動推測および対人印象判断，表情の真偽判断についての評定であった。(a)受け手の情動経験：6 情動語(怒り，驚き，悲しみ，恐怖，嫌悪，幸福)について，表出者の映像を見た際に参加者自身がどの程度感じたか評価した。いずれも 7 段階で評価した(0: 全く感じていない～6: 非常に強く感じている)。(b)表出者の情動推測：同じく 6 情動語について，表出者である映像人物がどの程度感じていたと思うか評価した。いずれも 7 段階で評価した(0: 全く感じていない～6: 非常に強く感じている)。(c)表出者に対する印象：大橋・三輪・平林・長戸(1974)を参考に，対人関係の構築に関わると考えられる 6 項目(好ましさ，魅力度，利他性，信じやすさ，社交性，活動性)について，表出者である映像人物に対してどのような印象を持ったのかを評価した(1～7 の 7 段階，SD 法)。(d)表出者の表情の真偽判断：表出者である映像人物の表情がどれくらい本当の感情を表していると思うか，7 段階で評価した(1: 非常に表れていない～7: 非常に表れている)。この評定を表情の真偽判断の指標とした。

手続き 実験は個別に行われた。参加者はパソコン画面の前に座り，実験者は，実験の課題を指示するとき以外は参加者から姿が見えないよう参加者の横にあるついたての裏に座った。

最初に，今回の実験ではある 4 名の人物映像が呈示され，各映像視聴中の参加者自身の感情経験，映像人物の感情および印象について評価してもらうことを告げた。そして，音声はないこと，1 人の映像時間は約 1 分であり映像全体から評価すること，映像は 1 度しか見られないこと，映像人物があなたと対面しておりその表情はあなた自身に向けられているとできるだけ考えること，と教示した。実験内容を理解してもらった後，練習課題を行った。練習課題では，約 30 秒の女性のポジティブな表情表出映像が呈示された。

練習課題の後，男女 2 名ずつ計 4 名の人物映像を順に呈示した。参加者の半数にはポジティブ情動表出映像(ポジティブ情動の自然表出およびネガティブ

が考えられる。

情動の不一致表出), もう半数にはネガティブ情動表出映像(ネガティブ情動の自然表出およびポジティブ情動の不一致表出)がそれぞれ男女 1 名ずつ呈示された。4 名とも異なる人物であり, 男女それぞれ 2 名の人物のどの映像を使用するかはカウンターバランスをとった。1 名の人物映像を見終わるごとに受け手である参加者自身の情動経験, 表出者の情動推測および印象について質問紙による評定を行った。人物映像の呈示順序, 質問紙の順序は, いずれも参加者間でカウンターバランスをとった。

4 名全ての評価が終了した後, 同じ映像が再度呈示され, 映像人物の表情がどれくらい本当の感情を表していると思うかについて評価してもらうことを告げた。先ほどと同じ 4 名の映像を順に呈示し, 1 名見終わるごとに表情の真偽判断について質問紙による評定を行った。2 回目の呈示順序も, 参加者間でカウンターバランスをとった。

最後に実験の目的について説明し, 実験は全て終了した。所要時間は約 30 分だった。

4-1-3. 結果

受け手自身の情動経験, 表出者に対する情動推測, 印象, および表情の真偽判断の各評定に関して, 自然表出と不一致表出で違いがないか検討した。なお, 予備調査において表出者の性別によって表情表出の強度に違いがあったため, 表出者の性別も要因に加えた。各従属変数に対し, ポジティブ情動表出, ネガティブ情動表出それぞれについて, 各下位項目ごとに 2(表出者の性別: 男性, 女性) × 2(情動調整: 不一致表出, 自然表出)の 2 要因分散分析を行った。多重比較は全てライアン法で行った。

受け手の情動経験

平均評定値および *SD* を, ポジティブ情動表出, ネガティブ情動表出それぞれ有意差がみられた下位項目に限り, 表出者の男女別に Table 4-1 に示す。

分散分析の結果, ポジティブ情動表出に関しては, 表出者の性別と情動調整の交互作用が, 怒り・嫌悪経験において有意 ($F(1, 18) = 5.41, 5.76$, ともに $p < .05$), 幸福経験において有意傾向であった ($F(1, 18) = 3.97, p = .06$)。下位

Table4-1. 受け手の情動経験の平均評定値および SD

情動	男性表出者				女性表出者				
	自然表出		不一致表出		自然表出		不一致表出		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
ポジティブ情動表出									
怒り	0.30	0.48	1.30	1.57 +	1.10	1.79	0.40	1.26	
嫌悪	0.80	1.14	2.00	1.33 *	1.50	1.90	1.10	1.66	
幸福	2.10	2.13	1.10	1.20 +	1.20	1.48	1.60	2.01	
ネガティブ情動表出									
怒り	1.40	1.58	1.10	1.60	0.80	1.03	2.60	1.90	**
嫌悪	2.40	1.51	1.70	1.95	2.50	1.43	3.80	1.81	*
幸福	0.60	0.97	2.10	1.91 *	0.30	0.67	0.10	0.32	

注. + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$: 下位検定の結果, 各有意水準で自然表出と不一致表出に差があることを示す。

検定を行ったところ, 男性表出者に対してのみ, 怒り経験は有意傾向で, 嫌悪経験は有意に自然表出よりも不一致表出の方が高く ($F(1, 18) = 3.74, p = .07$, $F(1, 18) = 6.48, p < .05$), 幸福経験は自然表出の方が不一致表出よりも高い有意傾向がみられた ($F(1, 18) = 4.05, p = .06$)。つまり, ネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出した男性に対したとき, より怒りや嫌悪を感じ, 幸福経験が低下する傾向がみられた。

一方, ネガティブ情動表出に関しては, 表出者の性別と情動調整の交互作用が, 怒り・嫌悪経験において有意 ($F(1, 18) = 7.99, 5.79$, ともに $p < .05$), 幸福経験において有意傾向であった ($F(1, 18) = 4.06, p = .06$)。下位検定を行ったところ, 怒り・嫌悪経験は, 女性表出者に対してのみ, 自然表出よりも不一致表出の方が有意に高く ($F(1, 18) = 11.73, 4.89$, ともに $p < .05$), 男性の不一致表出よりも女性の不一致表出に対して有意に高かった ($F(1, 36) = 4.64, 7.74$, ともに $p < .05$)。また, 幸福経験において, 男性表出者に対してのみ自然表出よりも不一致表出の方が有意に高く ($F(1, 18) = 6.32, p < .05$), 男性の不一致表出の方が女性の不一致表出に対してよりも有意に高かった ($F(1, 36) = 15.55, p < .01$)。つまり, ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した人物と対した場合, 男性に対したときは幸福経験が高く, 女性に対したときは

怒りや嫌悪経験が高くなった。

表出者の情動推測

平均評定値および *SD* を、ポジティブ情動表出、ネガティブ情動表出それぞれ有意差がみられた下位項目に限り、表出者の男女別に Table 4-2 に示す。

分散分析の結果、ポジティブ情動表出に関しては、表出者の性別と情動調整の交互作用が、悲しみにおいて有意 ($F(1, 18) = 4.48, p < .05$)、嫌悪において有意傾向であった ($F(1, 18) = 4.01, p = .06$)。下位検定を行ったところ、悲しみは、女性表出者に対してのみ自然表出よりも不一致表出の方が有意に高く ($F(1, 18) = 10.28, p < .01$)、男性の不一致表出よりも女性の不一致表出に対して有意に高く推測された ($F(1, 36) = 8.58, p < .01$)。嫌悪は、男性表出者に対してのみ自然表出よりも不一致表出の方が有意に高く推測された ($F(1, 18) = 4.85, p < .05$)。つまり、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出した場合、男性では嫌悪情動がより強く推測され、女性では悲しみ情動がより強く推測された。

一方、ネガティブ情動表出に関しては、表出者の性別と情動調整の交互作用が、驚き・悲しみ・嫌悪において有意であった ($F(1, 18) = 4.54, 6.56, 5.54$ 、い

Table 4-2. 表出者の情動推測の平均評定値および *SD*

情動	男性表出者				女性表出者					
	自然表出		不一致表出		自然表出		不一致表出			
	平均値	<i>SD</i>	平均値	<i>SD</i>	平均値	<i>SD</i>	平均値	<i>SD</i>		
ポジティブ情動表出										
悲しみ	0.40	0.70	0.50	0.53	0.70	1.06	2.20	2.20	**	
嫌悪	0.70	1.25	2.10	1.91	*	1.70	1.42	1.30	1.95	
ネガティブ情動表出										
驚き	0.70	1.34	1.80	1.40	+	2.70	1.89	2.10	1.66	
悲しみ	1.20	1.48	1.50	1.78		5.10	0.99	2.90	1.60	**
嫌悪	2.60	1.71	2.10	2.38		3.50	0.97	5.20	1.03	*

注. + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$: 下位検定の結果、各有意水準で自然表出と不一致表出に差があることを示す。

ずれも $p < .05$)。下位検定を行ったところ、驚きは、男性表出者に対してのみ自然表出よりも不一致表出の方が高く推測される有意傾向がみられ ($F(1, 18) = 3.80, p = .07$)、男性の自然表出よりも女性の自然表出に対して有意に高く推測された ($F(1, 36) = 7.94, p < .01$)。悲しみは、女性表出者に対してのみ自然表出の方が不一致表出よりも有意に高く ($F(1, 18) = 10.17, p < .01$)、また、自然表出、不一致表出どちらにおいても、男性表出者よりも女性表出者に対して有意に高く推測された ($F(1, 36) = 34.27, 4.42$, ともに $p < .05$)。嫌悪は、女性表出者に対してのみ自然表出よりも不一致表出の方が有意に高く ($F(1, 18) = 6.62, p < .05$)、男性の不一致表出よりも女性の不一致表出に対して有意に高く推測された ($F(1, 36) = 18.13, p < .01$)。つまり、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した場合、男性では驚き情動がより強く推測される傾向がみられた一方で、女性では悲しみ情動はより弱く、嫌悪情動がより強く推測された。

表出者に対する印象

平均評定値および SD を、ポジティブ情動表出、ネガティブ情動表出それぞれ有意差がみられた下位項目に限り、表出者の男女別に Table 4-3 に示す。

分散分析の結果、ポジティブ情動表出に関しては、好ましさにおいて、表出

Table 4-3. 表出者に対する印象判断の平均評定値および SD

項目	男性表出者				女性表出者					
	自然表出		不一致表出		自然表出		不一致表出			
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
ポジティブ情動表出										
好ましさ	4.90	1.52	3.20	1.32	**	3.90	1.60	3.90	1.20	
ネガティブ情動表出										
好ましさ	3.20	1.14	4.40	1.90	*	3.00	0.94	2.50	0.53	
魅力度	3.50	1.08	4.30	1.70		4.20	0.92	3.20	1.40	+
信じやすさ	3.00	1.56	4.50	2.12	+	2.80	1.48	2.10	0.74	

注. + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$: 下位検定の結果、各有意水準で自然表出と不一致表出に差があることを示す。

者の性別と情動調整の交互作用が有意傾向であった($F(1, 18) = 4.19, p = .06$)。下位検定を行ったところ、男性表出者に対してのみ自然表出の方が不一致表出よりも有意に高かった($F(1, 18) = 8.38, p < .01$)。つまり、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出した男性は、好ましさが低下する傾向があることが示された。

一方、ネガティブ情動表出に関しては、表出者の性別と情動調整の交互作用が、好ましさ・魅力度において有意($F(1, 18) = 5.19, 6.40$, ともに $p < .05$)、信じやすさにおいて有意傾向であった($F(1, 18) = 4.33, p = .05$)。下位検定を行ったところ、好ましさは有意に、信じやすさは有意傾向で、男性表出者に対してのみ自然表出より不一致表出の方が高かった($F(1, 18) = 5.17, p < .05$; $F(1, 18) = 4.03, p = .06$)。好ましさにおいては、男性の不一致表出の方が女性の不一致表出に対してよりも有意に高かった($F(1, 36) = 11.92, p < .01$)。また、魅力度において、女性表出者に対してのみ自然表出の方が不一致表出よりも高い有意傾向にあった($F(1, 18) = 3.95, p = .06$)。つまり、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した場合、男性では好ましく信じやすいと判断され、女性では魅力が低下する傾向がみられた。

表出者の表情の真偽判断および他の評定項目との相関関係

平均評定値および SD を、ポジティブ情動表出、ネガティブ情動表出別に Figure 4-1 に示す。

ポジティブ情動表出に関しては、交互作用が有意で($F(1, 18) = 7.83, p < .05$)、下位検定を行ったところ、男性表出者に対してのみ、自然表出の方が不一致表出よりも有意に高く本当の感情を表出していると評価されることが示された($F(1, 18) = 15.65, p < .01$)。つまり、男性は、ネガティブ情動経験中にポジティブ情動を表出した場合、本当の表情表出ではないと判断されやすかった。一方、ネガティブ情動表出に関しては、男性、女性どちらにおいても、自然表出と不一致表出の間で有意な差はみられなかった。

表情の真偽判断が他の評定項目と関連があるか検討するため、表情の真偽判断の評定値と、受け手の情動経験・表出者の情動推測・印象の各項目の評定値との相関分析を、情動表出の種類別(ポジティブ情動表出、ネガティブ情動表

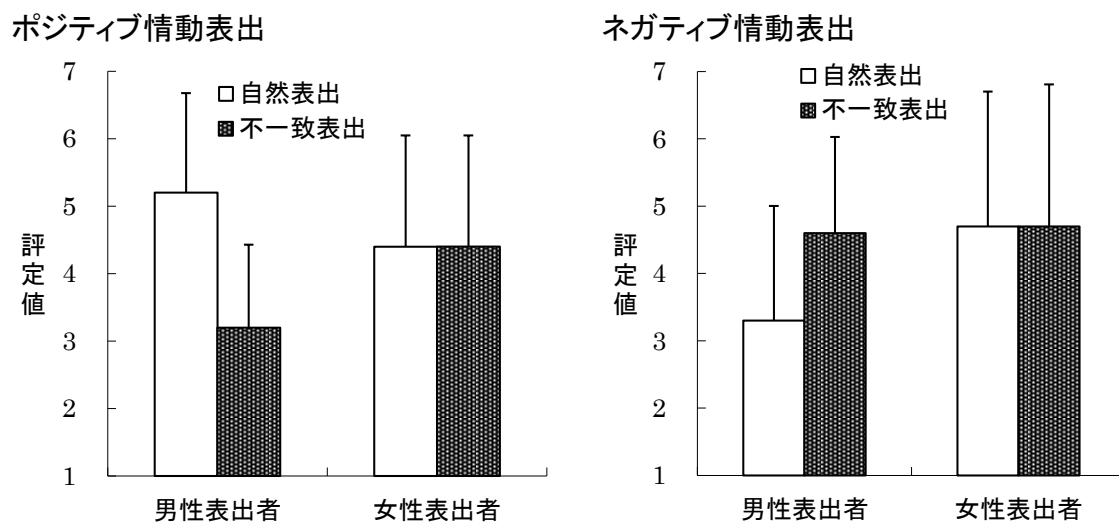


Figure 4-1. 表出者の表情の真偽判断の平均評定値および SD

Table 4-4. 表出者の表情の真偽判断評定値との相関係数

項目	ポジティブ情動表出		ネガティブ情動表出	
	男性表出者	女性表出者	男性表出者	女性表出者
<i>受け手の情動経験</i>				
悲しみ	.32	.17	-.24	.47 *
幸福	.53 *	-.44	.54 *	.01
<i>表出者の情動推測</i>				
驚き	.46 *	.03	.07	.10
幸福	.47 *	-.31	.60 *	.27
<i>表出者に対する印象</i>				
好ましさ	.67 *	-.17	.57 *	.02
魅力度	.55 *	-.06	.37	.03
信じやすさ	.30	.06	.64 *	.44
社交性	.31	-.15	.69 *	.60 *
活動性	.16	-.07	.59 *	.01

注. * $p < .05$

出)かつ表出者の男女別に行った。各評定項目との相関係数を、有意差がみられた項目に限り Table 4-4 に示す。

男性のポジティブ情動表出に関しては、受け手自身の幸福、表出者の驚き推

測および幸福推測，好ましさ，魅力度において正の相関関係が有意であった($r = .53, .46, .47, .67, .55$ ，いずれも $p < .05$)。男性のネガティブ情動表出に関しては，受け手自身の幸福，表出者の幸福推測，好ましさ，信じやすさ，社交性，活動性において正の相関関係が有意であった($r = .54, .60, .64, .69, .59$ ，いずれも $p < .05$)。女性のポジティブ情動表出に関しては，いずれの項目とも有意な相関関係がみられなかった。女性のネガティブ情動表出に関しては，受け手自身の悲しみ，社交性において正の相関関係が有意であった($r = .47, .60$ ，ともに $p < .05$)。

4-1-4. 考察

本研究では，ポジティブ情動およびネガティブ情動の不一致表出が，受け手の情動や表出者に対する対人印象判断において，自然表出とどのように異なるのか検討した。表出者の性別によって異なる結果が得られた。

受け手の情動経験

ポジティブ情動表出に関しては，男性表出者についてのみ違いがみられた。ネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出した男性に対したとき，自然なポジティブ情動表出をした男性に比べ，より怒りや嫌悪を感じ，幸福経験が低下する傾向がみられた。一方，ネガティブ情動表出に関しては，ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した人物と対した場合，男性に対したときは幸福経験が高く，女性に対したときは怒りや嫌悪経験が高くなった。

以上より，男性が不一致表出を行った場合は，実際に経験した情動が受け手の情動状態に影響を及ぼしたと考えられる。一方，女性が不一致表出を行った場合は，表出された情動が受け手の情動状態に影響を及ぼしたと考えられる。ネガティブな情動表出に関しては，予備調査にもあるように，男性と女性で表出される情動の強度に違いがみられたことが影響した可能性がある。実際に経験した情動とは不一致の表情表出であっても，受け手の情動状態に対して自然な表情表出と同様の影響を及ぼす場合もあることが示された。

表出者の情動推測

ポジティブ情動表出に関しては、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出した場合、自然なポジティブ情動表出に比べ、男性では嫌悪情動がより強く推測され、女性では悲しみ情動がより強く推測された。一方、ネガティブ情動表出に関しては、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した場合、男性では驚き情動がより強く推測される傾向がみられた一方で、女性では悲しみ情動はより弱く、嫌悪情動がより強く推測された。

以上より、ポジティブ情動表出に関しては、不一致表出において表出を抑制しきれなかったネガティブ情動が表情から推測された可能性が考えられる。ネガティブ情動表出に関しては、不一致表出において、同じネガティブ情動であっても、自然な表出とは異なる情動が表出されたと考えられる。不一致表出を行う際には、一致しない情動価の情動が複数ある場合、いずれの情動を表出するのが適応的かを状況に応じて判断する必要があるだろう。

表出者に対する印象

ポジティブ情動表出に関しては、男性において、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出した場合、自然なポジティブ情動表出に比べ、好ましさが低下する傾向が示された。一方、ネガティブ情動表出に関しては、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した場合、自然なネガティブ情動表出に比べ、男性では好ましく信じやすいと判断され、女性では魅力が低下する傾向がみられた。

以上より、偽りのポジティブ情動表出であっても、自然なポジティブ情動表出と同様の印象をもたらす場合もあることが分かった。一方で、男性表出者では自然な表情表出よりも印象が悪くなった。男性の不一致表出において、嫌悪の情動がより強く推測されていることから印象も悪くなった可能性が考えられる。また、偽ってネガティブな情動を表出した方が好印象をもたらす場合もあることが分かった。一方で、女性表出者では自然な表情表出よりも印象が悪くなった。不一致表出と自然表出において、ネガティブ情動という点では同じであってもそれぞれ異なる情動が推測されていることから、印象も異なると考えられる。

表出者の表情の真偽判断および他の評定項目との関連

ポジティブ情動表出に関しては、男性は、ネガティブ情動経験中にポジティブ情動を表出した場合、真の情動状態を表出した表情ではないと判断されやすかった。一方、ネガティブ情動表出に関しては、男性、女性どちらにおいても、自然表出と不一致表出で違いはみられなかった。つまり、男性に関しては、不一致表出によるポジティブ情動表出について自然な表情表出ではないと判断されやすかったが、女性の不一致表出に関しては、自然な表情表出と同程度の真偽性であると判断された。

他の評定項目との相関関係については、男性表出者において、ポジティブ情動、ネガティブ情動どちらにおいても、表情表出の真偽性と受け手の幸福経験や表出者の幸福推測、印象判断と正の相関がみられた。女性表出者においては、ネガティブ情動表出に関しては、受け手の悲しみ経験および社交性において正の相関がみられた。

以上より、各項目の結果には表情の真偽判断が関わっている可能性が考えられる。男性の不一致表出による笑顔は、自然な表情ではないと見抜かれやすいため、自然表出による笑顔に比べネガティブな情動経験や印象をもたらすなど、よりネガティブに機能したと考えられる。一方、女性の不一致表出による笑顔は、自然に表出された笑顔と区別されることなく同様にポジティブな機能を果たしたと言える。女性は男性よりもよく笑顔を表出する、また、そうすべきだという表示規則があると言われてしている(Ellis, 2006)。そのため、女性は男性に比べ、笑顔であることが自然であり、笑顔を作ることに長けていたと考えられる。男性の不一致表出によるネガティブ情動表出に関しては、自然なネガティブ情動表出よりもポジティブな情動や印象をもたらすことが示され、表情の真偽性も自然なネガティブ情動表出との違いはみられなかった。不一致表出において抑制しきれなかったポジティブ情動が、受け手に対してポジティブに機能したのかもしれない。男性はネガティブな情動を表出すべきではないという表示規則により、男性はネガティブ情動を自然に表出することに困難を感じやすいため、ポジティブ情動表出が抑制しきれない不一致表出に対して自然な表情表出としてポジティブな評価がなされた可能性が考えられる。有意ではないものの、男性では、自然なネガティブ情動表出が本当の表情であると判断さ

れにくいようであった。女性の不一致表出によるネガティブ情動表出については、予想に反して、表情の真偽性は自然なネガティブ情動表出と違いがみられなかったにも関わらず、よりネガティブな情動や印象がもたらされた。これは、不一致表出において表出された情動の種類が、自然表出とは異なったことが一因かもしれない。表出者の情動推測において、女性では、自然表出では悲しみをより感じ、不一致表出では嫌悪をより感じていると推測されることが示された。女性による不一致表出は嫌悪の情動がより強く表出されていたため、受け手に対しても、怒りや嫌悪を自然表出のときよりも強くもたらした可能性が考えられる。

4-2. [研究 4] のまとめ

本研究では、不一致表出をすることが受け手の情動状態や調整者に対する印象に及ぼす影響について、実験参加者を受け手とし、表情表出映像を用いて表出者の影響を統制した擬似的対人状況を設定して調べた。

その結果、ポジティブ情動表出に関しては、男性において、不一致表出によるポジティブ情動表出が自然なポジティブ情動表出よりも、受け手にネガティブな情動や印象をもたらすことが示された。一方、女性においては、不一致表出によるポジティブ情動表出が自然表出よりも悲しみ情動を強く感じていると推測されたが、受け手の情動経験や印象では自然表出との差はみられなかった。ネガティブ情動表出に関しては、男性において、不一致表出によるネガティブ情動表出が自然なネガティブ情動表出よりも、受け手にポジティブな情動や印象をもたらすことが示された。一方、女性においては、不一致表出が自然表出よりも受け手にネガティブな情動や印象をもたらすこと、自然表出とは異なり嫌悪情動を強く推測させることが示された。

以上の結果には、表情表出に対する真偽性が関係していると考えられ、男性の不一致表出によるポジティブ情動表出は自然な表情表出ではないと判断されやすく、受け手に対してよりネガティブな情動や印象をもたらした可能性が示唆された。また、女性の不一致表出によるポジティブ情動表出は、真偽性において自然なポジティブ情動表出と違いはなく、もたらされる情動や印象にも違いはみられなかった。不一致表出であっても偽りであると判断されなければ、自然なポジティブ情動表出と同様の機能を果たす可能性が考えられる。一方、女性の不一致表出によるネガティブ情動表出に関しては、表情表出に対する真偽性が自然なネガティブ情動表出と同程度であるにも関わらず、よりネガティブな情動や印象がもたらされており、不一致表出を行う際にどの情動を表出するかを適切に選択することも重要であると考えられる。

本研究より、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出することは、受け手にとっては必ずしも悪影響ではないことが明らかとなった。特に女性は、男性よりもポジティブ情動表出の調整に長けており、自然表出と変わらず、受け手にポジティブな影響をもたらすことが示された。ただし、本研究で表出者

として用いた映像人物は少数であり、この性差が本研究の表出者に限られた可能性も考えられる。今後は、より多数の表出者を用意した実験によって検討する必要がある。男性であっても表情表出の調整に長けていれば、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動表出をすることで、自然表出と変わらず、受け手に対してポジティブに機能することも考えられる。対人場面においてネガティブ情動経験時に巧みにポジティブ情動表出をすることは、より良好なコミュニケーションの実現にとって十分役立つと言えるだろう。

一方、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出することは、表出される情動の種類によって異なる影響を及ぼす可能性が示唆された。特に女性は、不一致表出をする際に、怒りや嫌悪といった受け手に脅威を与えるような表情表出をしていると考えられる。しかし、ポジティブ情動経験時にネガティブな情動表出をすることが求められる状況は限定的である。例えば、対面相手が自身のネガティブな情動経験について語る時、たとえ自分がポジティブな気持ちであっても相手への共感を示すために不一致表出をするというものである。そのような状況では、怒りや嫌悪ではなく、悲しみといった共感的な表情を表出することが求められる。ポジティブ情動経験時にネガティブな情動表出をすることが対人場面において有益に機能するには、各状況を考慮した上で、適切なネガティブ情動を表出することが重要であろう。

問題点として、本研究では、不一致表出の表情を撮影する際、表出者に対して、感じた感情と逆の情動価の表情を表出するように、と教示をした。ポジティブな情動表出は笑顔が表出されやすいが、ネガティブな情動を表出する場合は、怒り、悲しみなど、どの情動を表出するかによって、表出される表情の特徴が変化する可能性がある。ネガティブ情動表出において、女性表出者の自然表出と不一致表出でもたらされる情動に違いが出たことも、その教示の曖昧が一因であったかもしれない。今後は、表出する情動の種類を限定して実験を行う必要がある。また、本研究ではあくまで情動調整を行っている人物の映像を見ただけであって、実際の対面状況とは隔たりがある。今後は、実際に表出者と受け手の2人を設定した実験を行うことで、より現実場面に近い双方向の状況を再現する必要があると考えられる。

本研究では、ポジティブ情動およびネガティブ情動の不一致表出が、受け手

の情動や対人印象判断に及ぼす影響について検討した。その結果、男性は、ネガティブ情動経験時に笑顔を見せても、その表情表出が偽りの表情であると見抜かれやすく、受け手の情動経験や表出者に対する印象判断に悪影響を及ぼす一方で、女性では、表情表出の真偽が見抜かれにくく、自然表出と同様の機能をもたらすことが示された。表情表出による情動調整が、限定的ではあるが、対人的にポジティブに機能することが明らかとなり、良好なコミュニケーションに寄与する可能性が示唆されたことは、本研究の成果と考える。

第 5 章 2 者の会話における表情表出による情動調整

5-1. [研究 5] 2 者の会話における表情表出の抑制・誇張が受け手や会話に及ぼす影響

5-1-1. 問題と目的

研究 5 では、表情表出による情動調整の対人的影響について明らかにするため、表出抑制と表出誇張に着目し、会話場面における一方の話者の情動調整が受け手や会話に及ぼす影響を様々な指標を用いて比較検討した。

これまでの先行研究において、調整者によって意図的に行われる表出抑制や表出誇張が調整者自身に及ぼす情動的・認知的影響について実証的検討がなされてきた (e.g. Gross & Levenson, 1993; 研究 2)。研究 2 では、表出抑制と表出誇張の両方略に関してポジティブ情動、ネガティブ情動の両面から検討したところ、調整者の主観的情動経験と記憶成績において表出抑制と表出誇張で異なる影響がみられた。表出抑制に関しては、ポジティブ情動の表出抑制において主観的なポジティブ情動経験や記憶成績が低下した一方で、表出誇張では、ネガティブ情動の表出誇張においてネガティブ情動経験の増加や記憶成績の低下をもたらすことが示された。すなわち、表出抑制ではポジティブ情動においてのみ、表出誇張ではネガティブ情動においてのみ、情動経験の変化をもたらす認知的資源を費やすことが明らかとなった。

一方、表情表出による情動調整の対人的影響について検討された実証研究は少ない。しかし、第 1 章でも述べたように、表情表出による情動調整は日常よく使われる方略であり (Richards et al., 2003)、社会的相互作用に影響を与えられていると言われており (Lopes et al., 2005)、対人的影響について明らかにすることは良好な対人関係の構築に役立つと考えられる。Butler et al. (2003) は、2 者の会話におけるネガティブ情動の表出抑制が、受け手の精神的健康や 2 者関係に及ぼす影響について検討した。初対面の女性 2 人 1 組で実験が行われ、ネガティブ情動を喚起するドキュメント映像を共に視聴した後に、その内容について自由にディスカッションを行った。ディスカッションの際、2 つの条件が設定された。1 つは、参加者 2 人のうち 1 人が表出抑制を行い、もう 1 人が自然表出で会話する条件、もう 1 つは 2 人とも自然表出で会話する条件であった。2

つの条件を比較した結果、表出抑制が行われた条件において、表出抑制の受け手による会話に対する評価および調整者に対する親密感が低下することが示された。Butler et al. (2003) は、一方が表出抑制を行うことにより調整者の意図や気持ちがもう一方に伝わりにくくなることから、2者の会話における表出抑制は2者の関係の構築、維持・成長の妨げとなるとした。

それでは、表出抑制と表出誇張で比較した場合、対人的影響は方略によって異なるのだろうか。本研究では、情動調整の受け手や会話への影響に着目し、(a) 受け手の表情表出および調整者との表情同期、(b) 受け手の発話割合、(c) 受け手による会話および調整者に対する印象、(d) 第3者による会話に対する印象の4つの指標から表情表出の抑制と誇張の効果を比較検討した。

受け手の表情表出に関して、表出抑制と表出誇張で違いがあるのかについてはこれまで扱われていないが、表情模倣に関する先行研究から次のような予想を立てることができる。表情模倣に関する先行研究において、表情写真の観察者が写真の表情と同様の表情筋を活動させること (Dimberg, 1982) や、人は対面している他者の表情に無意識的に同調すること (市川・牧野, 2004) が示されている。したがって、対人場面において一方が何らかの表情を表出したとき、もう一方においても同様の表情表出が観察されると考えられる。以上より、調整者が表情表出を意図的に増大あるいは減少させた場合、受け手の表情表出においても調整者と同様の傾向がみられるだろう。また、調整者と受け手の表情の同期がみられるだろう。すなわち、調整者が表出誇張を行うことで、受け手も調整者と同じ情動価の表情を多く表出し表情の同期がみられるため、表出抑制よりも表出誇張における受け手の表情表出が多くなると予想される。

さらに、本研究では、受け手の表情表出について、自身が発話する発話時と相手の話を聞く聴取時に分けて検討した。発話と表情には密接な関係がある。例えば、聞き手の表情によって話しかけやすさ (吉川・中村, 1997) や言葉遣い (Beukeboom, 2009) が異なることが示されている。このように、聞き手の表情が発話者に与える印象や会話に影響を及ぼすことは先行研究からも示唆されている。また、相手の表情を模倣することは、インタラクションを円滑にしたり相手からの好意を増大させたりすることが示されている (Chartrand & Bargh, 1999)。さらに、人間の身体の動きやうなずきに対して同調するよう作

られた画面上の仮想人物に関して、発話者である対面する人間と同じ表情をフィードバックすることがラポールの形成にとって重要であることが示されている (Wang & Gratch, 2009)。以上のことから、表情表出による情動調整が受け手の表情表出に及ぼす影響についても、受け手自身が発話する発話時と調整者が発話する聴取時では異なる可能性が考えられる。

受け手の発話についても、表出抑制と表出誇張では違いがみられるのだろうか。対面対話では、言語情報だけでなく表情や身振りといった非言語情報も合わせて用いることで円滑なコミュニケーションを実現している (高木, 2006)。また、非言語情報は言語情報に影響を及ぼすことが分かっている。例えば、吉川・中村 (1997) では、聞き手の表情の種類によって、発話表現のていねいさや発話開始までの時間、発話の流ちょうさといった発話行動に違いがみられることが示された。怒り顔は、真顔や笑顔に比べ発話開始までの時間が長く、笑顔は、怒りや真顔に比べ発話が流ちょうであった。したがって、本研究においても、表情表出による情動調整が受け手の発話に違いをもたらすと考えた。表出誇張において、ポジティブ表情が多く誇張された場合は表出抑制が行われたときよりも受け手の発話が多くなり、ネガティブ表情が多く誇張された場合は表出抑制が行われた時よりも受け手の発話が少なくなると予想した。

表情表出による情動調整が受け手の印象に及ぼす影響については、Butler et al. (2003) によって、表出抑制が会話に対する評価や調整者に対する親密感を低下させることが示された。一方、表出誇張についてはこれまで検討されていない。社会的相互作用における情動の自己開示や相手の反応は、親密さの形成にとって重要であると言われている (Laurenceau et al., 1998)。このことから、表出誇張により調整者の表情表出を増大させることは、受け手に対して親密な印象を与えると考えられる。したがって、表出誇張の方が表出抑制よりも、受け手による会話に対する評価が良くなり、調整者に対する親密感が高くなると予想される。

2 者の会話がもたらす印象についても、表出抑制と表出誇張では違いがみられると考えられる。前述したように、聞き手の表情の種類によって発話行動に違いがみられることが示されていることから (吉川・中村, 1997)、一方が表情表出による情動調整が行うことにより 2 者の発話行動に変化がみられ、第 3

者による会話に対する印象においても違いが生じると予想した。一方が表出抑制を行った場合、互いの表情表出が少なくなるため、会話が感情的ではなくなる一方で、より客観的で理論的な印象をもたらすと考えられる。逆に、一方が表出誇張を行った場合、互いの表情表出が多くなるため、会話も親しみやすく感情豊かな印象になると考えられる。また、印象評定は、音声とテキストの両方について検討した。表情表出による情動調整が会話内容に影響するならば、音声とテキストいずれの印象においても抑制条件と誇張条件に差異がみられると考えた。情動調整が会話内容ではなく、発話音声の抑揚やトーンなどに影響するならば、音声情報に対する印象においてのみ両条件間に差異がみられると考えた。

本研究では、2者の会話における表情表出による情動調整が及ぼす対人的影響について、4つの指標を用いて測定した。それにより、コミュニケーション場面における情動やそれに伴う表情表出の役割について多角的に示すことができると考えた。Butler et al. (2003) と類似の手続きを用い、2者のうち一方が表情表出を抑制あるいは誇張させながら会話をした場合、(a) 受け手の表情表出および調整者との表情同期、(b) 受け手の発話割合、(c) 受け手による会話および調整者に対する印象、(d) 第3者による会話に対する印象が、各調整方略でどのように異なるのかを比較検討した。実際の会話中の2者それぞれの表出行動を撮影し、その映像データから表情表出を取り出して詳細に分析した。また、同じ映像データから発話箇所を抽出し発話割合を算出するとともに、会話の音声およびテキストを取り出し第3者による印象評定実験を行った。

次節において2者による会話実験の方法について述べた後、4つの指標について、受け手に及ぼす影響（受け手の表情表出および調整者との表情同期、発話割合、受け手による印象）と会話に及ぼす影響（第3者による会話に対する印象）の2つに分けてまとめた。

5-1-2. 方法

実験参加者 女子大学生 27名が実験に参加した(平均 20.8 歳, $SD = 1.5$ 歳)。参加者はいずれも、表情表出による情動調整を行う実験協力者（初対面の同一女性 1 名（23 歳）、以後調整者とする）と会話する受け手であった。

調整方略条件 表出抑制と表出誇張の2条件で、参加者間要因であった。表出抑制条件では、会話中に何らかの感情が生じてもできるだけ表情に出さないよう、表出誇張条件では、何らかの感情が生じたときはできるだけ表情に大きく出すよう、調整者は事前に教示された。

材料 1. ネガティブ情動喚起映像：表情が表出されやすい情動的な内容の会話になるよう、会話の前にネガティブな情動喚起映像を共に視聴した。ネガティブ情動を喚起する映像として、鳥インフルエンザに関するテレビ番組（NHK スペシャル『シリーズ最強ウイルス 調査報告 新型インフルエンザの恐怖』）から一部抜粋したものを使用した。時間は約13分であった。予備調査により、恐怖、悲しみ、嫌悪といったネガティブ情動を喚起する映像であることが事前に確認されていた¹⁴。

2. 質問紙：参加者自身の情動経験と表情表出、会話に対する評価、および調整者に対する親密感についての自己評定を質問紙によって実施した。(a) 参加者自身の情動経験と表情表出：6情動語（怒り、驚き、悲しみ、恐怖、嫌悪、幸福）について、どの程度感じたか、表情に表れていたと思うかを、いずれも7段階で評価した（0：全く感じなかった／表れていなかった～6：非常に強く感じた／表れていた）。(b) 会話に対する評価：会話に関する3項目（会話の温かさ、会話の滑らかさ、相手と意気投合したと感じた程度）について、どの程度感じたかを、いずれも7段階で評価した（0：全く感じなかった～6：非常に強く感じた）。(c) 調整者に対する親密感：調整者に対する親密感を測定する5

¹⁴ 予備調査は、8名の女子大学院生が参加した（平均26.4歳、 $SD = 1.8$ 歳）。
¹⁶ 情動語（安心、怒り、驚き、覚醒、悲しみ、恐怖、興味、緊張、苦しみ、軽蔑、嫌悪、幸福、混乱、困惑、楽しさ、満足）について、映像視聴の間にどの程度それぞれの情動を感じたかを7段階で評価した（0：全く感じなかった～6：非常に強く感じた）。各情動語の平均評定値は、安心、0.25 (0.46); 怒り、2.75 (1.39); 驚き、4.13 (0.35); 覚醒、4.00 (1.85); 悲しみ、4.00 (1.31); 恐怖、4.75 (0.71); 興味、4.63 (0.52); 緊張、4.38 (1.41); 苦しみ、3.63 (1.30); 軽蔑、2.13 (1.46); 嫌悪、3.38 (1.60); 幸福、0.63 (1.06); 混乱、3.63 (1.60); 困惑、4.00 (0.76); 楽しさ、0.63 (1.06); 満足、1.13 (1.36)であった（カッコ内は SD ）。一要因分散分析の結果、情動語の主効果が有意であった（ $F(15,105) = 15.46, p < .001$ ）。ライアン法による多重比較の結果、恐怖、興味、緊張、驚き、悲しみ、困惑、覚醒、混乱、苦しみ、嫌悪が他の情動語よりも有意に高く評定されたことが分かった。

項目（「相手のことを好ましく思いましたか?」、「相手と気が合うと感じましたか?」、「相手はあなたのことを好ましく思っている、と思いますか?」、「相手とまた話してみたいと思いますか?」、「相手と仲の良い友だちになれると思いますか?」）について、どの程度感じたかを、いずれも 7 段階で評価した（0：全く思わなかった～6：非常に強く思った）。

装置 1. ネガティブ情動映像を呈示するため、デスクトップパソコン 1 台を使用した。

2. 会話中の 2 者の表出行動を撮影するため、プロンプタおよびビデオカメラ、三脚をそれぞれ 2 台ずつ使用した（Figure 5-1）。各人の顔がプロンプタ後方のビデオカメラで撮影され、胸元から上が相手のプロンプタモニタに表示された。モニタの大きさは 24 インチで、モニタから各人までの視距離は約 1m であった。

手続き 実験は、実験参加者と調整者の 2 人 1 組で行われた。2 人は、1 台のパソコンモニタの前に、ついたてを挟んで並んで着席した。実験者から互いを紹介され挨拶する以外、言葉を交わすことはなかった。実験者から、今回の実験は会話のプロセスについて調べることが目的であること、気分が悪くなったり途中で気が変わったりした場合はいつでも実験をやめることができること

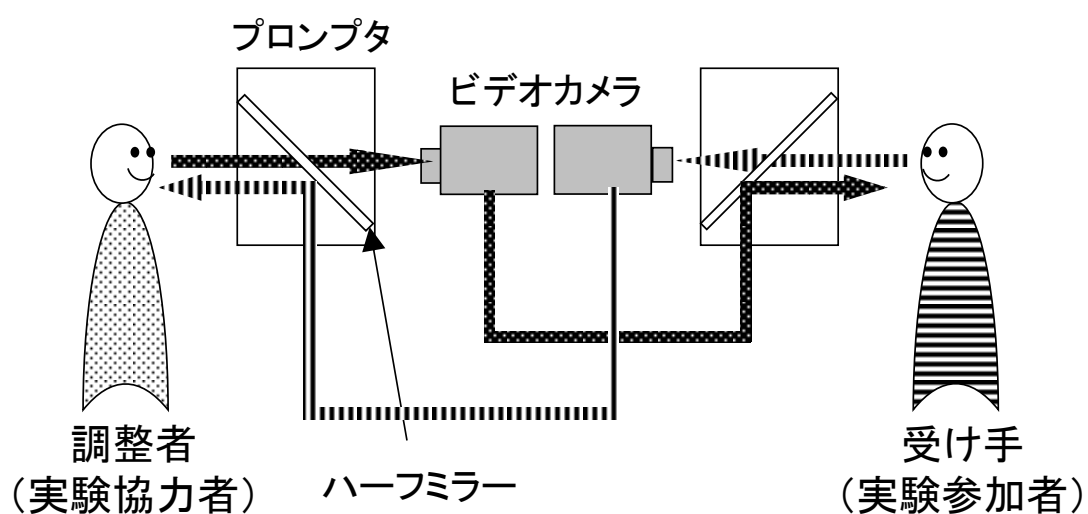


Figure 5-1. 会話中の実験状況

を告げられた上で、実験参加の同意書にサインした。

まず、モニタに呈示されたネガティブ情動喚起映像を共に視聴した。映像視聴後、会話の準備として、映像を見て感じたこと、新型インフルエンザの流行に対して自身に何ができると思うか、新型インフルエンザに対する世間の対応についてどう思うか、の3点について自由記述を求めた。

次に、2人はそれぞれのプロンプタの前に移動し、互いにプロンプタモニタに表示された相手の顔を見ながら、映像の内容について自由に会話を行った。プロンプタ後方のビデオカメラによって2人の表出行動が撮影された。撮影に関しては事前に了承を得た。会話中、調整者は表出抑制あるいは誇張を行った。どちらの方略を行うかは、実験者が実験前に指示した。会話の時間は最長10分と定めたが、時間内であれば2人で自由に決めて終わることができた。

会話終了後、参加者は、会話中の自身の情動経験と表情表出、会話に対する評価および調整者に対する親密感について、質問紙によって評価した。

最後に、実験の本当の目的を説明するとともに、調整者が実験協力者であることを明かし、表出行動映像の使用に関する同意書にサインをしてもらい、実験は全て終了した。調整者が実験協力者であることに実験中気付いたと申告した3名の参加者についてはデータから除外した。実験全体の所要時間は約60分であった。

5-2. 2者の会話における表情表出による情動調整が受け手に及ぼす影響

この節では、2者の会話場面における表情表出による情動調整が受け手に及ぼす影響について述べる。すなわち、2者のうち一方が表情表出を抑制あるいは誇張させながら会話をした場合、(a) 受け手の表情表出および調整者との表情同期、(b) 受け手の発話割合、(c) 受け手による会話および調整者に対する印象の3つの指標について各調整方略でどのように異なるのかを比較検討した結果についてまとめた。

5-2-1. ビデオ映像分析方法

結果の分析に必要な表情表出と発話割合のデータを、ビデオ映像より抽出した。

1. 表情表出：各人の映像における会話開始から最初の3分間（前3分）と会話終了前の最後の3分間（後3分）の分析を行った¹⁵。表情表出の取り出し、および分類方法は以下の通りである。

1フレーム（0.03秒）ずつ確認し、顔面に動きがみられた箇所について、各表出の発生から消失までの時間帯を特定した。各表出を、Facial Action Coding System (Ekman & Friesen, 1978) を参考に、ポジティブ情動が表出されたとする動き（頬が上がる、口角が上がる等）がみられたものをポジティブ表出、ネガティブ情動が表出されたとする動き（眉を下げる、唇を寄せる等）がみられたものをネガティブ表出、どちらの情動価も含まない動き（上瞼をあげる等）がみられたものをニュートラル表出に分類した。まず、第一著者が全ての人物の顔面表出の出現時間帯を特定し、その全てを分類した。次に、著者と仮説を共有しないもう1名（女性、21歳）が、特定された全表出の4分の1について分類した。2名の分類の一致率は、81%であった（調整者の表情表出については、ポジティブ表出78%、ネガティブ表出96%、ニュートラル表出100%、参加者の表情表出については、ポジティブ表出77%、ネガティブ表出80%、ニュ

¹⁵ 各組約10分間の会話における全ての表情表出を分析することは負担が大きいため、会話中の表情表出の変化を捉えることができるよう、会話の冒頭部と終了部の表情表出について分析を行った。

ートラル表出 100%)。第一著者による分類結果を表情表出の分析データとして採用した。

前 3 分、後 3 分それぞれについて、ポジティブ表出（調整者単独発話／参加者単独発話）、ネガティブ表出（調整者単独発話／参加者単独発話）、ニュートラル¹⁶（調整者単独発話／参加者単独発話）に分類し、各出現時間の合計を算出した¹⁷。また、2 者の表情同期について検討するために、調整者の表情表出分類別に、参加者の各表情分類の出現時間の割合を算出した。

2. 発話割合：綿貫・外川（1995）の発話分析を参考にした。24 組のビデオ映像から、調整者および参加者がそれぞれ発話した時間帯をすべて特定した。各組の全会話時間における 2 者それぞれの発話時間の割合を、会話時間を半分に区切って前半、後半に分けて算出した。

5-2-2. 結果

調整者の表情表出

調整者の表情表出について、情動調整が適切に行われていたか操作チェックを行った（Figure 5-2 の上部）。2（調整方略：表出抑制／表出誇張）×2（時間：前 3 分／後 3 分）×3（表情表出分類：ポジティブ表出／ネガティブ表出／ニュートラル）×2（発話：調整者単独／参加者単独）の 4 要因分散分析を行ったところ、調整方略×表情表出分類×発話の交互作用が有意であった（ $F(2, 44) = 51.46, p < .001$ ）。下位検定の結果、どちらが話者の場合でも調整方略と表情表出分類の単純交互作用が有意であった（調整者発話時、参加者発話時の順に、 $F(2, 88) = 271.01, 25.77$ 、ともに $p < .001$ ）。調整方略に関する単純・単純主効果の検定の結果、ポジティブ表出は、どちらが話者であっても、表出抑制条件よりも誇張条件において有意に多くみられた（調整者発話時、参加者発話時の順に、 $F(1, 132) = 291.18, 27.92$ 、ともに $p < .001$ ）。ニュートラルは、どちらが話者であっても、表出誇張条件よりも抑制条件において有意に多くみられた（調整者発話時、参加者発話時の順に、 $F(1, 132) = 236.13, 22.21$ 、ともに p

¹⁶ ニュートラル表出はほとんどみられなかったため、ニュートラル表出と顔面表出がみられなかった時間を合わせて、ニュートラルとした。

¹⁷ 調整者と参加者の両者の発話が重なる重複時間、および両者ともに発話しない沈黙時間は含まれていない。

< .001)。

また、表情表出分類に関する単純・単純主効果が調整方略と発話のいずれの水準においても有意であった（表出抑制条件における調整者発話時，参加者発話時の順に， $F(2, 88) = 177.31, 50.81$ ，ともに $p < .001$ ；表出誇張条件における調整者発話時，参加者発話時の順に， $F(2, 88) = 270.70, 5.53$ ，ともに $p < .01$ ）。ライアン法による多重比較の結果，表出抑制条件において，どちらが話者であっても，ニュートラルが，他の表情表出分類よりも有意に多くみられた。表出誇張条件において，調整者単独発話時のポジティブ表出が他の表情表出分類よりも有意に多くみられ，参加者単独発話時のポジティブ表出およびニュートラルがネガティブ表出よりも有意に多くみられた。

以上より，調整者は，表出抑制条件では表情表出が少なく，表出誇張条件ではポジティブ表出を多く表出していることが示された。

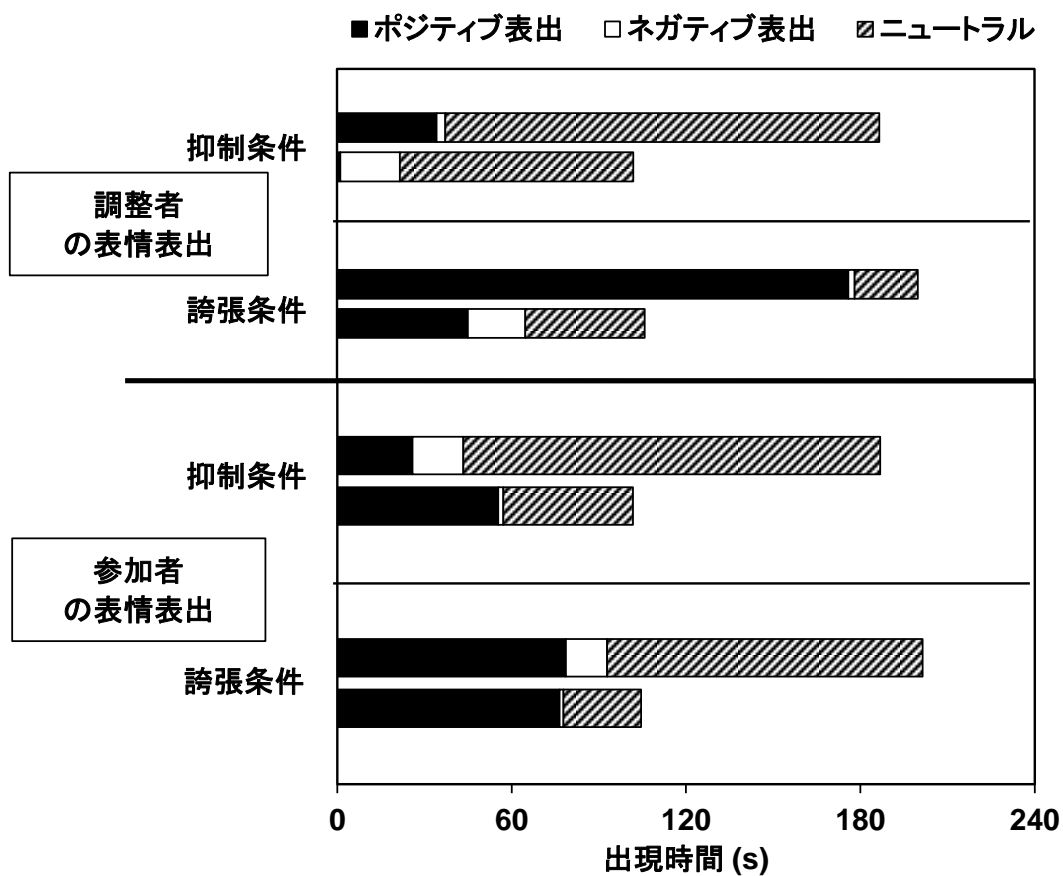


Figure 5-2. 各表情表出分類の平均出現時間

上段：調整者発話時，下段：参加者発話時

参加者の表情表出

実験参加者の各表情表出分類の平均出現時間を，調整者のものと併せて Figure 5-2 に示す。

2（調整方略：表出抑制／表出誇張）×2（時間：前3分／後3分）×3（表情表出分類：ポジティブ表出／ネガティブ表出／ニュートラル）×2（発話：調整者単独／参加者単独）の4要因分散分析を行ったところ，調整方略×表情表出分類×発話の交互作用が有意傾向であった（ $F(2, 44) = 2.81, p = .07$ ）。

下位検定の結果，調整者単独発話時における調整方略と表情表出分類の単純交互作用が有意であった（ $F(2, 88) = 8.13, p < .001$ ）。また，どちらの調整方略においても表情表出分類と発話の単純交互作用が有意であった（表出抑制，表出誇張の順に， $F(2, 44) = 38.44, 17.17$ ，ともに $p < .001$ ）。調整方略に関する単純・単純主効果の検定の結果，調整者単独発話時のポジティブ表出が，表出抑制条件よりも誇張条件において有意に多くみられた（ $F(1, 132) = 15.26, p < .001$ ）。調整者単独発話時のニュートラルが，表出誇張条件よりも抑制条件において有意に多くみられた（ $F(1, 132) = 6.54, p < .05$ ）。

また，表情表出分類に関する単純・単純主効果が調整方略と発話のいずれの水準においても有意であった（表出抑制条件における調整者発話時，参加者発話時の順に， $F(2, 88) = 40.91, 6.71$ ，ともに $p < .01$ ；表出誇張条件における調整者発話時，参加者発話時の順に， $F(2, 88) = 19.32, 12.14$ ，ともに $p < .01$ ）。ライアン法による多重比較の結果，表出抑制条件において，調整者単独発話時のニュートラルが他の表情表出分類よりも有意に多くみられ，参加者単独発話時のポジティブ表出およびニュートラルがネガティブ表出よりも有意に多くみられた。表出誇張条件において，どちらが話者であっても，ポジティブ表出が他の表情表出分類よりも有意に多くみられた。

以上の結果より，参加者は，特に調整者が発話しているときにおいて，表出抑制条件では表情表出が少なく，表出誇張条件ではポジティブ表出が多い傾向が示された。

調整者との表情同期

実験参加者の各表情分類の出現時間の平均割合を，調整者の表情がポジティ

ブ表出，ニュートラルそれぞれの場合別に Figure 5-3 に示す。

調整者の表情表出分類別に，2（調整方略：表出抑制／表出誇張）×3（表情表出分類：ポジティブ表出／ネガティブ表出／ニュートラル）×2（発話：調整者単独／参加者単独）の3要因分散分析を行ったところ，調整者がポジティブ

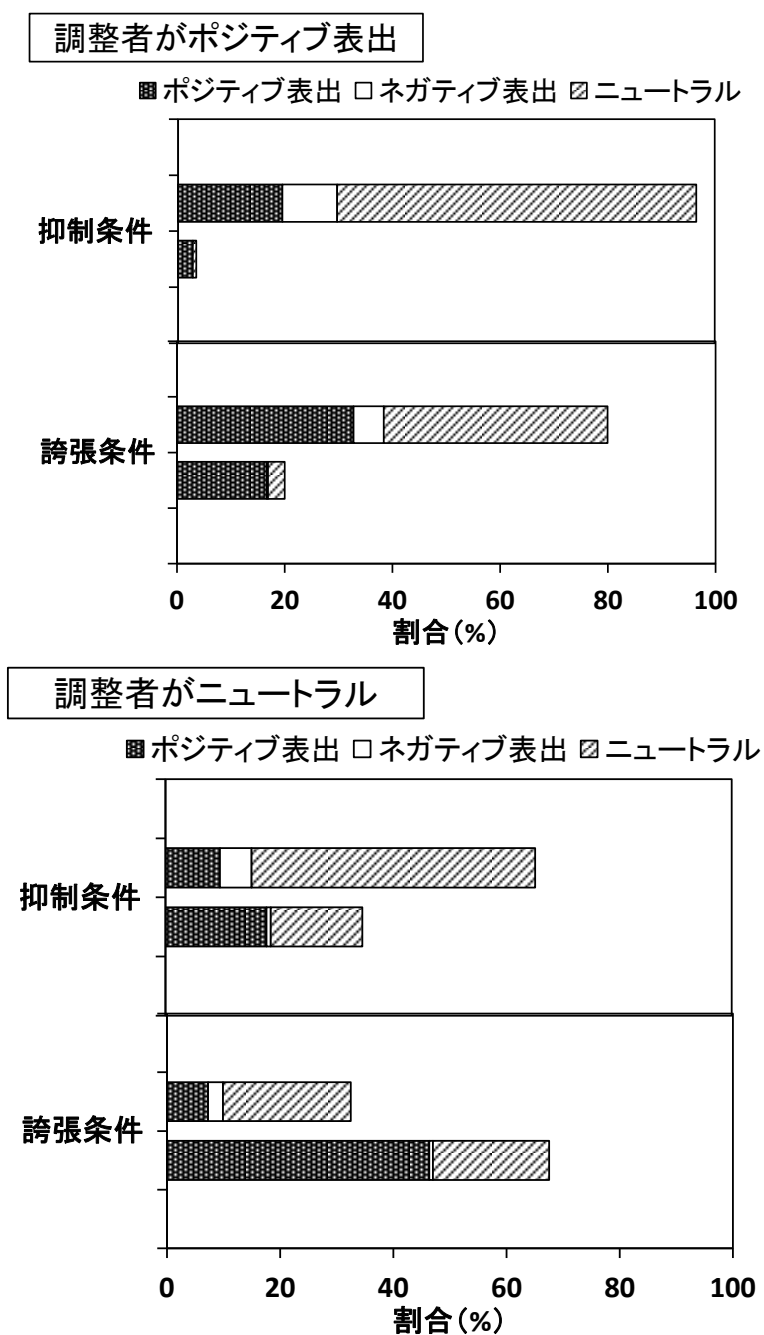


Figure 5-3. 参加者の各表情表出分類の平均出現割合

上段：調整者発話時，下段：参加者発話時

表出、ニュートラルどちらの場合も調整方略×表情表出分類×発話の交互作用が有意であった ($F(2, 44) = 4.42, 5.79$, ともに $p < .05$)。

下位検定の結果、調整者がポジティブ表出の場合、調整者単独発話時における調整方略と表情表出分類の単純交互作用が有意であった ($F(2, 88) = 11.40, p < .001$)。調整方略に関する単純・単純主効果の検定の結果、調整者単独発話時のポジティブ表出の割合が、表出抑制条件よりも誇張条件において有意に多かった ($F(1, 132) = 7.84, p < .01$)。調整者単独発話時のニュートラルの割合が、表出誇張条件よりも抑制条件において有意に多かった ($F(1, 132) = 28.30, p < .001$)。一方、調整者がニュートラルの場合、どちらが話者の場合でも調整方略と表情表出分類の単純交互作用が有意であった (調整者発話時、参加者発話時の順に、 $F(2, 88) = 5.90, 6.80$, ともに $p < .01$)。調整方略に関する単純・単純主効果の検定の結果、参加者単独発話時のポジティブ表出の割合が、表出抑制条件よりも誇張条件において有意に多かった ($F(1, 132) = 27.95, p < .001$)。調整者単独発話時のニュートラルの割合が、表出誇張条件よりも抑制条件において有意に多かった ($F(1, 132) = 25.96, p < .001$)。

つまり、ポジティブ表出の同期の割合については、調整者発話時において表出誇張条件の方が抑制条件よりも多く、ニュートラルの同期の割合については、調整者発話時において表出抑制条件の方が誇張条件よりも多いことが示された。さらに、調整者がポジティブ表出のときの参加者のニュートラルの割合が、調整者発話時において表出抑制条件の方が誇張条件よりも多かった。また、調整者がニュートラルのときの参加者のポジティブ表出の割合が、参加者発話時において表出抑制条件よりも誇張条件の方が多かった。

発話割合

全会話時間における実験参加者の発話時間の割合を、調整者のものと併せて Figure 5-4 に示す。

調整者の発話割合について、2 (調整方略：表出抑制／表出誇張) × 2 (時間：前半／後半) の分散分析を行ったところ、調整方略の主効果および交互作用に有意な差はみられなかった ($F(1, 22) = 0.63, 1.90$, ともに *n.s.*)。すなわち、表出抑制を行った調整者と表出誇張を行った調整者では、発話割合に有意な差

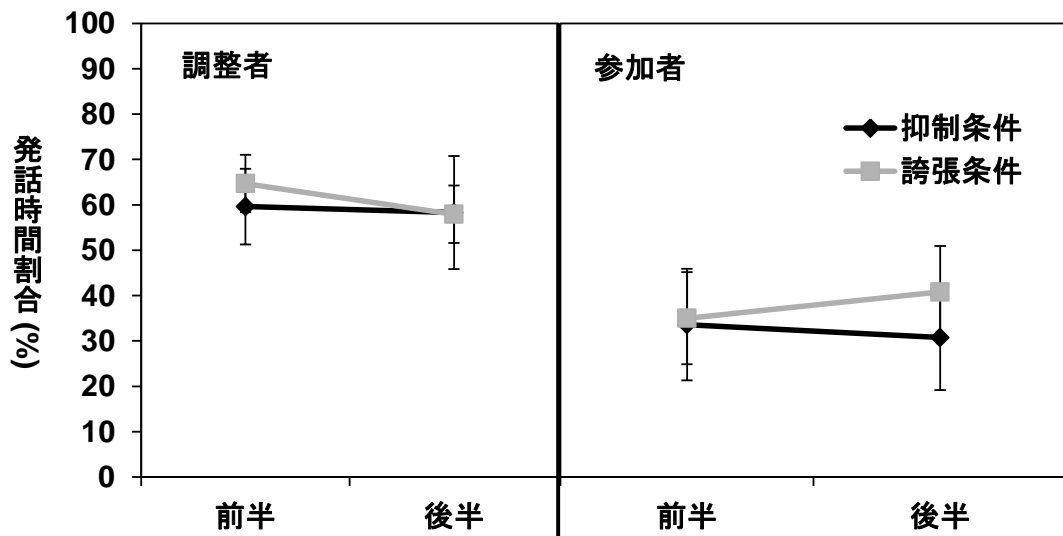


Figure 5-4. 会話における発話時間の平均割合および SD

はみられなかった。

実験参加者の発話割合について、2 (調整方略：表出抑制／表出誇張) × 2 (時間：前半／後半) の分散分析を行ったところ、交互作用が有意であった ($F(1, 22) = 4.90, p < .05$)。会話後半において、表出抑制条件よりも誇張条件の方が発話割合が有意に多かった ($F(1, 44) = 4.93, p < .05$)。表出誇張条件において、前半よりも後半の方が発話割合が有意に多かった ($F(1, 22) = 4.39, p < .05$)。すなわち、表出誇張の受け手となる参加者の発話割合が、会話の後半において有意に多くなった。

参加者自身の情動経験と表情表出の自己評定

実験参加者の情動経験、表情表出それぞれについて、2 (調整方略：表出抑制／表出誇張) × 6 (情動語) の 2 要因分散分析を行った。その結果、情動経験、表情表出ともに、調整方略条件による有意差はみられなかった ($F(1, 22) = 0.45, 0.37$, ともに *n.s.*)。つまり、参加者の主観的な情動経験および表情表出に関しては、表出抑制条件と誇張条件で違いはみられなかった。

印象評定

会話に対する評価および親密感に関して、それぞれ各項目の評定値を合計し

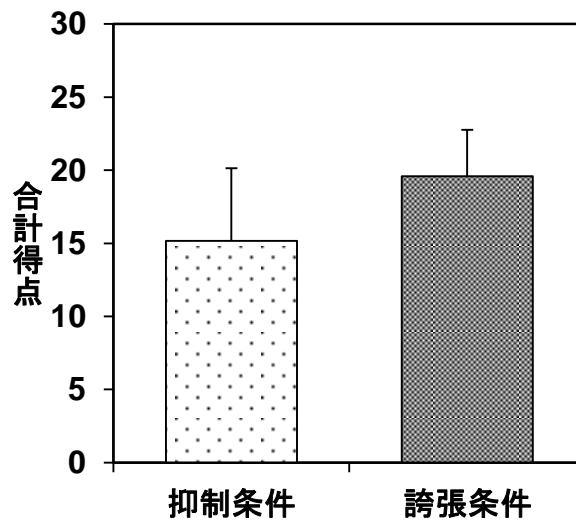


Figure 5-5. 親密感評定の平均合計得点および SD

た合計得点を算出した。それぞれの項目の α 係数は、会話に対する評価で .84, 親密感で .89 であった。各合計得点について、調整方略条件で違いがないか 1 要因分散分析を行った。その結果、会話に対する評価に関しては、方略条件間で有意な差はみられなかった ($F(1,22) = 2.17, n.s.$)。親密感に関しては、方略条件間で有意な差がみられ ($F(1,22) = 6.73, p < .05$)、表出誇張条件の方が抑制条件よりも有意に高かった。つまり、表出誇張条件の方が抑制条件よりも調整者に対する親密感が高いことが示された。親密感の平均合計得点を Figure 5-5 に示す。

5-2-3. 考察

2 者による会話において一方が表出抑制あるいは表出誇張を行った場合、受け手となる参加者の表情表出や表情同期、発話、印象が各調整方略でどのように異なるのかを比較検討した。

調整者の表情表出

調整者は、表出抑制条件では表情表出が少なく、誇張条件ではポジティブな表情表出が多くなることが示された。また、特に調整者自身が発話しているとき、その傾向が顕著であった。以上より、調整者は、調整方略条件に応じて意

図的に表情表出を操作していたと言える。特にポジティブな表情表出が誇張されたことについては2つの可能性が考えられる。1つは、会話中に喚起されたネガティブ情動の表出を抑制してポジティブな表情を表出したという可能性、もう1つは、ネガティブ情動を経験しなかったためにポジティブな表情表出がみられたという可能性である。表出誇張条件では、調整者は、ポジティブ情動、ネガティブ情動に関わりなく自身が感じた情動をそのまま誇張するように指示されていた。したがって、調整者の表情表出にポジティブな表情が多かったのは、ネガティブ情動の表出を抑制したのではなく、相手との会話により直接ネガティブ情動を経験することが少なかったためと考えられる。先行研究においても、自分が経験したネガティブな情動エピソードについて初対面の他者に話すとき、エピソードに一致するネガティブな表情表出はほとんどみられないことが示されている (Nomura & Yoshikawa, 2011)。

参加者の表情表出

実験参加者の表情表出に関しては、特に調整者が発話しているとき、表出抑制条件ではニュートラルが多く、誇張条件ではポジティブ表出が多くなる傾向が示された。つまり、参加者は、会話の聞き手であるときに調整者の調整方略に対応した表情表出を行っており、調整者の情動調整が受け手の表情表出にも影響を及ぼすことが示唆された。

表出誇張条件においてポジティブな表情表出にのみ違いがみられたことに関しては、前述したように、調整者が特にポジティブな表情表出を誇張したことによると考えられる。表出誇張条件において、調整者がポジティブな表情を表出したのに対して、参加者が無意識に同調的な表情表出を示したことにより、特にポジティブな表情表出が増大したと考えられる。

参加者の表情表出の違いは、相手の発話の聴取時においてのみみられた。この結果については、調整者が自身の発話時により明確な情動調整を行っていたことが関係していると考えられる。そのため、参加者が調整者の話を聞くときに、特に表情表出による情動調整の影響を受けたのだろう。コミュニケーション・スキルには、自分の考えを表出するスキル、相手の発言に反応するスキル、自己や他者との関係を管理するスキルの3つがあるとされている(藤本・大坊,

2007)。発話時は自分の考えを表出するスキルが求められるため能動的な表情表出になりやすく、聴取時は相手の発言に反応する受動的な表情表出になりやすいと考えられる。したがって、発話時においては調整者の表情表出による影響は受けにくい一方、聴取時においては調整者の表情表出に同調する表情表出がみられやすいと考えられる。

調整者との表情同期

表情同期については、調整者が発話したときに、表出誇張条件ではポジティブ表出の同期の割合が多く、表出抑制条件ではニュートラルの同期の割合が多いことが示された。つまり、調整者が自身の発話中に表情表出を抑制あるいは誇張させることにより、各方略に応じた2者の表情表出の同期が生じることが明らかとなった。この結果は、表情模倣に関する先行研究（市川・牧野，2004）とも矛盾しない。調整者が発話したときにのみ違いがみられたことについては、前述したように、特に相手の発話時に相手に応じた表情表出をするためだと考えられる。

また、表出抑制条件では、調整者が発話したときに調整者自身はポジティブ表出であっても参加者はニュートラルである割合が多く、表出誇張条件では、参加者が発話したときに調整者がニュートラルであっても参加者はポジティブ表出である割合が多いことが示された。つまり、調整者と受け手の表情は同期するだけでなく、受け手は調整者の表情に関わらず各方略に応じた表情を表出することが分かった。藤本・大坊（2006）は、藤本らによる小集団での会話コミュニケーションに関する一連の研究から、話者役割という概念を提唱している。その中で、話者は、会話の状況に応じて自発的に話者としての役割を取得し、それに応じた発話行動を行うとされている。本研究における会話についても2者による双方向的なやり取りであるため、参加者自身が調整者の表情表出から会話の状況を素早く把握し、状況に応じた表情表出を示すようになったと考えられる。2者の会話において一方が表情表出による情動調整を行うことは、一方的に受け手に影響を与え続けるのではなく会話の様相を規定するきっかけとして機能しており、互いの表情表出が影響を与えあうことで会話が構成されるのではないかと考えられる。以上のことを踏まえると、表情表出による情動

調整の心理的負担は会話が進むにつれ軽減することも考えられる。この点については、今後、会話中の 2 者の生理的反応の変化を測定するなどの検討を行うことで明らかにできるだろう。

発話割合

調整者の発話割合については、表出抑制を行った条件と表出誇張を行った条件で違いはみられなかった。調整者が表情表出を意図的に増減させても、調整者自身の発話量には影響しないことが示された。

実験参加者の発話割合については、会話の後半において表出抑制条件と誇張条件で異なり、調整者が表情表出を誇張させた場合、会話の後半で参加者の発話割合が増えることが示された。綿貫・外川（1995）によれば、2 者による会話が進むにつれ気分が高まり同期していくと、2 者の発話量が等しくなり発話の重複が多くなるという。すなわち、調整者が表出誇張によりポジティブな表情表出を増大させた結果、会話が次第に活発になり、後半での参加者の発話が増大したと考えられる。このことは、笑顔の相手に対して真顔よりも話しかけやすい（発話までの反応時間が短く、話しかけやすさの評価が高い）という吉川・中村（1997）の結果とも矛盾しない。

参加者自身の情動経験と表情表出の自己評定

実験参加者の情動経験および表情表出の自己評定については、いずれも表出抑制条件と誇張条件で違いはみられなかった。このことから、主観的情動経験や表情表出に対する主観的な印象は、調整者が表情表出の抑制あるいは誇張を行っても変わらないことが示された。前述したように、客観的指標として測定された表情表出については調整方略条件で異なっていることから、参加者は対面する調整者の情動調整に応じた表情を非意図的に表出していたと考えられる。

印象評定

調整者に対する親密感に関しては、表出誇張条件の方が抑制条件より親密感が強くなることが示された。Butler et al. (2003) においても、表出抑制は自然な表出のときと比べて受け手の印象を悪くすることが示されている。また、

Laurenceau et al. (1998) において、情動の自己開示や相手の反応が親密さの形成にとって重要であると言われている。表出誇張条件において調整者がポジティブな表情表出を増大させたことにより、参加者の調整者に対する印象が表出抑制を行った場合よりも良くなったと考えられる。会話に対する評価に関しては、表出抑制条件と誇張条件で有意な差はみられなかった。表情表出による情動調整を行うことによって、会話内容がより情動的になることも、より客観的になることもある。話者の表情表出やそれに対する情動調整が会話にどう影響し、それが会話に対する評価とどのように結びつくかは、本研究では詳細な分析を行わなかったが、今後の検討課題の1つである。

5-3. 2者の会話における表情表出による情動調整が会話の印象に及ぼす影響

この節では、2者の会話場面における表情表出による情動調整が会話に及ぼす影響について述べる。2者のうち一方が表情表出を抑制あるいは誇張させながら会話をした場合、第3者による会話に対する印象が各調整方略でどのように異なるのか比較検討した実験についてまとめた。

5-3-1. 問題と目的

本実験では、2者の会話における表情表出による情動調整が会話に及ぼす影響について客観的な指標から検討した。会話実験において撮影した表出映像に収録された会話の音声情報およびテキストに対して、第3者による印象評定実験を行った。2者のうち一方が表出抑制あるいは表出誇張を行ったとき、2者の会話に違いがみられるのか調べるために、会話の音声およびテキストに対する印象について比較検討した。

5-3-2. 方法

実験参加者 大学生・大学院生 24名（男女 12名ずつ、平均 21.7歳、SD = 2.8歳）が参加した。半数ずつ、音声刺激とテキスト刺激のどちらかに割り振られた。

会話刺激 会話実験における各組の会話から抜粋した音声およびテキスト刺激を用いた。表出抑制条件、表出誇張条件、各 12組の会話について、以下の要領で2つずつ抜粋し、計 48刺激を用意した。

各組約 10分の会話のうち、1分台前後（前半）と 8分台前後（後半）からそれぞれ1つずつ、ある程度まとまりのあるパラグラフになるよう抜粋した。音声刺激とテキスト刺激は、それぞれ全く同じ会話箇所から用意した。会話時間やテキストの文字数は、調整方略の条件間で差がないよう出来る範囲でそろえた¹⁸。

¹⁸ 会話時間およびテキストの文字数の平均は、表出抑制条件では平均 31.50秒、203.9文字、表出誇張条件では平均 29.25秒、204.5文字であった。分散分析

装置 会話刺激の呈示用に、デスクトップパソコン 1 台、スピーカー 1 台を使用した。

評定項目 福島・岩崎・渋谷（2008）を参考に選定した、8 項目の形容詞対を用いた（温かい-冷たい，親しみやすい-親しみにくい，感じの良い-感じの悪い，積極的な-消極的な，意欲的な-無気力な，わかりやすい-わかりにくい，主観的な-客観的な，感情的な-理性的な）。それぞれ 1～5 の 5 段階で評定を行った。

手続き 評定は個別実験により行った。参加者は，複数の会話について印象評定を行ってもらふこと，実験はいつでも途中でやめることができることを予め伝えられた上で，参加同意書にサインをした。

PC を使って 1 つずつ呈示された刺激に対して，紙面に印刷された形容詞対による印象評定を繰り返した。音声条件では，PC につないだスピーカーによって各刺激を呈示し，最後まで聞き終わった後に評定をした。テキスト条件では，PC の画面上に各刺激の全文を呈示し，最後まで読み終わった後に評定した。どちらの条件でも，各刺激に対する評定が終了すると，参加者自身が次の刺激に進むようボタンをクリックした。刺激の呈示順はカウンターバランスされた。

全ての刺激に対する評定を終え，実験の目的を説明し，実験は終了した。実験時間は，約 60 分であった。

分析方法 印象評定項目について因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った結果，3 因子が抽出された（説明率 62.59%）。第 1 因子を「親和性」（「親しみやすい」，「感じの良い」，「温かい」，「わかりやすい」），第 2 因子を「積極性」（「意欲的な」，「積極的な」），第 3 因子を「主観性」（「感情的な」，「主観的な」）とした。各因子の項目平均値を分析データとして使用した。

の結果，どちらも有意差はみられなかった。

5-3-3. 結果

因子分析により抽出された各因子の項目平均値を Table 5-1 に示す。

2 (刺激：音声／テキスト) × 2 (調整方略：表出抑制／表出誇張) × 2 (時間：前半／後半) の分散分析を行ったところ、「親和性」では、刺激と調整方略の交互作用が有意であった ($F(1, 286) = 16.06, p < .001$)。下位検定の結果、音声、テキスト両条件において、表出誇張条件の方が抑制条件よりも有意に高く評定された ($F(1, 286) = 77.04, 9.67$, ともに $p < .01$)。「積極性」では、刺激と調整方略と時間の交互作用が有意であった ($F(1, 286) = 4.44, p < .05$)。下位検定の結果、音声条件において前半、後半ともに、表出誇張条件の方が抑制条件よりも有意に高く評定された ($F(1, 572) = 17.67, 38.91$, ともに $p < .001$)。「主観性」では、刺激と調整方略の交互作用が有意であった ($F(1, 286) = 16.85, p < .001$)。下位検定の結果、音声条件において、表出誇張条件の方が抑制条件よりも有意に高く評定された ($F(1, 286) = 54.51, p < .001$)。

すなわち、「親和性」に関しては、音声、テキスト両刺激において、表出誇張条件の方が抑制条件よりも高かった。「積極性」および「主観性」に関しては、音声刺激においてのみ、表出誇張条件の方が抑制条件よりも高かった。

Table 5-1. 各因子の項目平均値および SD

因子	音声刺激		テキスト刺激	
	抑制条件	誇張条件	抑制条件	誇張条件
親和性	2.94 (0.80)	3.46 (0.79) *	3.06 (0.78)	3.17 (0.76) *
	2.96 (0.73)	3.66 (0.76)	3.14 (0.70)	3.47 (0.79)
積極性	2.96 (0.90)	3.40 (0.87) *	3.07 (1.04)	3.25 (0.82)
	2.94 (0.90)	3.59 (0.90) *	3.28 (0.87)	3.28 (0.89)
主観性	2.84 (0.95)	3.32 (0.97) *	3.25 (0.98)	3.30 (1.00)
	2.84 (0.96)	3.53 (0.98)	3.26 (1.00)	3.46 (0.96)

注 1. 上段は会話の前半、下段は後半の評定値を示す。

注 2. カッコ内は SD を示す。

注 3. *表出抑制条件と表出誇張条件における差異が有意であることを示す ($p < .05$)。前半・後半の区別ない箇所は、時間による効果がみられなかったことを示す。

5-3-4. 考察

本実験では、2者の会話における表情表出による情動調整が、会話の印象にどのような影響を与えるのかを検討した。2者のうち一方が表出抑制あるいは表出誇張を行いながら会話をした場合、第3者による会話の印象が各調整方略でどのように異なるのかを比較検討した。

調整者が表出抑制を行った条件と表出誇張を行った条件では、第3者による会話の印象が異なることが示された。表出誇張の方がより親しみやすく感情豊かな会話という印象を与える一方で、表出抑制の方はより客観的、理論的な会話という印象を与えることが分かった。本研究のように初対面の相手と話す状況では、表出抑制よりも表出誇張をした方が、相手と親しくなるという点において有益であると言える。しかしながら、表出抑制を行う方が適切となる状況も想定できるだろう。友人と話すなど相手に親しみを伝えたいときは表出誇張、仕事などにおいて情報を客観的に伝える必要があるときは表出抑制というように、会話の状況や動機に応じて表出抑制と表出誇張を使い分けることが有用であると考えられる。

また、表情表出による情動調整の影響は、親和性に関しては音声だけでなくテキストにも及び、積極性と主観性に関しては、音声にのみ違いがみられた。以上より、表情表出による情動調整の影響は会話内容にもみられたが、音声にはより多くの差異が含まれることが示された。音声には話し手の感情といった非言語情報が含まれる (Fujisaki, 2004)。表情表出による情動調整により、音声に含まれる話し手の非言語情報に変化が生じ、会話に対する印象評定にも違いがみられたと考えられる。親和性に関してのみテキストにも違いがみられたことに関しては、言葉遣いや語尾の違いがテキストに表れたからかもしれない。今後は、単語の出現頻度や音声の抑揚、トーンなど、各刺激のどのような側面に差異がみられるのかテキストおよび音声情報の詳細な分析を行うことが求められる。

5-4. [研究 5] のまとめ

本研究の結果、2者の会話において、一方が意図的に表情表出の抑制や誇張を行った場合、受け手の表情表出や表情同期、発話割合に違いがみられ、受け手の調整者に対する印象も変化することが分かった。また、第3者による会話の印象も調整方略によって異なることが示された。

研究5の結果より、2者の会話における表情表出による情動調整の機能について、Figure 5-8に図示した。

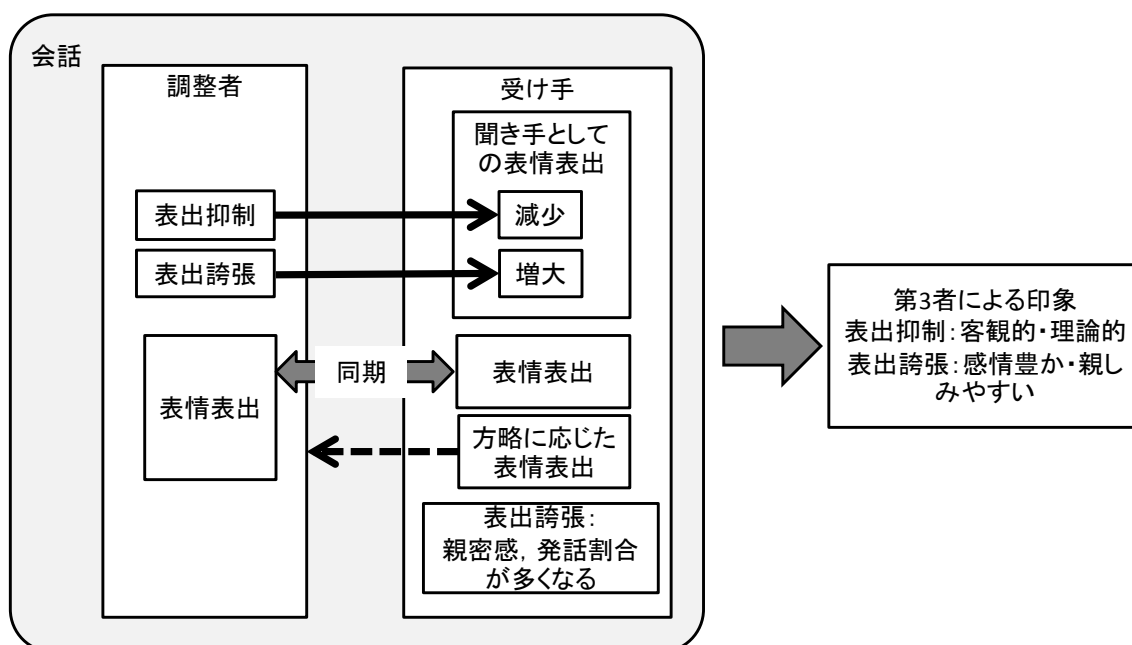


Figure 5-8. 2者の会話における表情表出による情動調整の機能

受け手の表情表出に関しては、特に会話の聞き手であるときに、調整者の調整方略に対応した表情表出をよく示した。また、各調整方略に応じた表情表出の同期が生じることが分かった。さらには、調整者の表情に関係なく、受け手が各調整方略に対応した表情表出を多く示すことも分かった。発話割合に関しては、調整者が表情表出を誇張させた場合、会話の後半で受け手である参加者の発話割合が増えることが示された。調整者に対する印象については、表出誇張をした場合に、表出抑制よりも親密感が強くなることが示された。第3者による会話の印象に関しては、表出誇張をした方が、表出抑制をしたときよりも、より親しみやすく感情豊かな会話になることが示された。一方、表出抑制をし

た方が、表出誇張をしたときよりも、より客観的で理論的な印象の会話となることが示された。Butler et al. (2003) において検討されなかった、受け手の表情表出や発話割合、会話に対する第3者の印象といった指標においても調整方略による違いがみられたこと、表出誇張による影響が具体的に示されたことは、本研究で得られた新たな知見である。このように、表出抑制と表出誇張は、どちらも表情表出による情動調整であるが異なる対人的機能を有すると言える。また、表情表出による情動調整は会話の様相を規定するきっかけとして機能しており、互いの表情表出が影響を与えあうことで会話が構成される可能性も示唆された。本研究より、コミュニケーション場面において、意図的な表情表出の増減が受け手の表情表出や発話、対人印象の形成に重要な役割を果たすことが確認された。

本研究では、調整者の表情表出の大半がポジティブな表情表出であり、ネガティブな表情表出はほとんど観察されなかった。表出誇張条件においてネガティブな表情表出の誇張が多く行われた場合、調整者に対する親密感や受け手の表情表出への影響が異なる可能性も考えられる。情動伝染の研究においても、情動の種類によって伝染の程度に違いがあることが示されている(田村・亀田, 2007)。今後はネガティブな表情表出の抑制や誇張についても検討を加え、ネガティブ情動の調整がコミュニケーションに及ぼす影響を明らかにする必要がある。

また、本研究では、表出抑制と表出誇張という2種の情動調整の比較検討を行ったが、調整を行わない自然表出との比較は行っていない。今後、自然表出条件も含めた3条件で比較することで、どの程度の強度や頻度の表情表出が円滑な会話にとって最も適しているのかを明らかにできると考えられる。

さらに、本研究において、受け手の表情表出、発話割合、調整者に対する印象、第3者による印象のそれぞれの指標の間にどのような関係があるのかについては検討していない。データ数を増やしてパス解析を行うなど、各指標の関係性について明らかにすることは今後の課題の1つである。

なお、本研究では、表出抑制、表出誇張の各条件12組ずつ、計24組の会話のデータが得られた。前述の各結果については統計的分析により各12組のデータをまとめたものである。しかしながら、参加者の表情表出の程度には個人

差もあり、会話の詳細な様子については一概に扱うことでかえって分かり難くなった面もある。一連の会話において、調整者および受け手がどのタイミングで表情表出を行っているのか各表情表出と発話の関係を捉えることも、表情表出による情動調整が会話においてどのように機能しているのかを明らかにするためには重要であると考えられる。まずは、各組の表情表出と会話の流れについて概観することにより各調整方略条件の会話の様子の傾向を捉えようと、各組の会話における表情表出と発話についてのタイムライン図を付録 9, 10 に示した。また、前 3 分、後 3 分それぞれにおける表情表出例の画像を、各条件 1 組ずつについて掲載した¹⁹。今後は、表情表出による情動調整を行うタイミングを操作した実験を行うことで、会話における効果的な表情表出についての示唆が得られると考えられる。

本研究は、2 者の会話における表出抑制と表出誇張に関して、受け手の表情表出、発話割合、調整者に対する印象、および第 3 者による会話の印象という 4 つの指標について比較し、それぞれの情動調整が受け手のコミュニケーション行動におよぼす影響を示した。今後さらに、2 者の会話について発話内容の分析や音声分析を行い、表情表出による情動調整が発話に及ぼす影響を詳細に検討することにより、表情表出による情動調整が円滑な会話の促進につながる仕組みを明らかにすることができるのではないかと考える。

¹⁹ 掲載した画像の調整者および参加者には掲載の同意を得ている。

第6章 総合考察

本章では、まず前章までの5つの研究をまとめた後、表情表出による情動調整の特性について本研究より得られた知見について述べ、表情表出による情動調整が行われるプロセスと役割について考察する。また、情動調整に関わる神経学的基盤について先行研究の知見により補足し、今後の課題および展望について述べる。

6-1. 研究成果のまとめ

研究1から5で得られた結果についてまとめた図を Figure 6-1 に方略別に示す。

研究1では、質問紙調査を行い、怒り、悲しみ、喜びの各情動の表情表出の抑制・誇張が実際の日常場面においてどのように行われているのか具体的な事例を抽出し、経験頻度や調整動機といった要因が各情動・方略別にどのように異なるのか、また、どのような経緯によって各情動調整が行われるのかを調査した。その結果、ポジティブ情動とネガティブ情動の違いを示すとともに、怒りと悲しみにおいても動機や情動生起原因などにおいて異なる特性を示すことができた。怒りの表出抑制と喜びの表出誇張について、向社会的動機から行われることが多く、経験頻度が高いことが示された。また、喜びの表出誇張は調整相手との関係を良好にすることが分かった。

研究2と3では、表情表出による情動調整が調整者自身の主観的情動経験および記憶に及ぼす影響について検討した。個別実験において、情動喚起映像を視聴中に情動調整を行うよう教示し、視聴後に視聴中の情動経験の自己評定と映像内容の記憶テストを実施した。研究2では、表出抑制と表出誇張について、ポジティブ、ネガティブ両情動から比較検討した。その結果、ポジティブ情動の表出抑制およびネガティブ情動の表出誇張において、情動経験が表情表出による影響を受け変化し、記憶成績が低下することが示された。表出抑制と表出誇張はいずれも表情表出による情動調整であるが、表情表出と情動経験の関係性および記憶への影響が異なることが明らかとなった。研究3では、ネガティブ情動の不一致表出について、日本人参加者を対象に検討した。

(a) 表出抑制

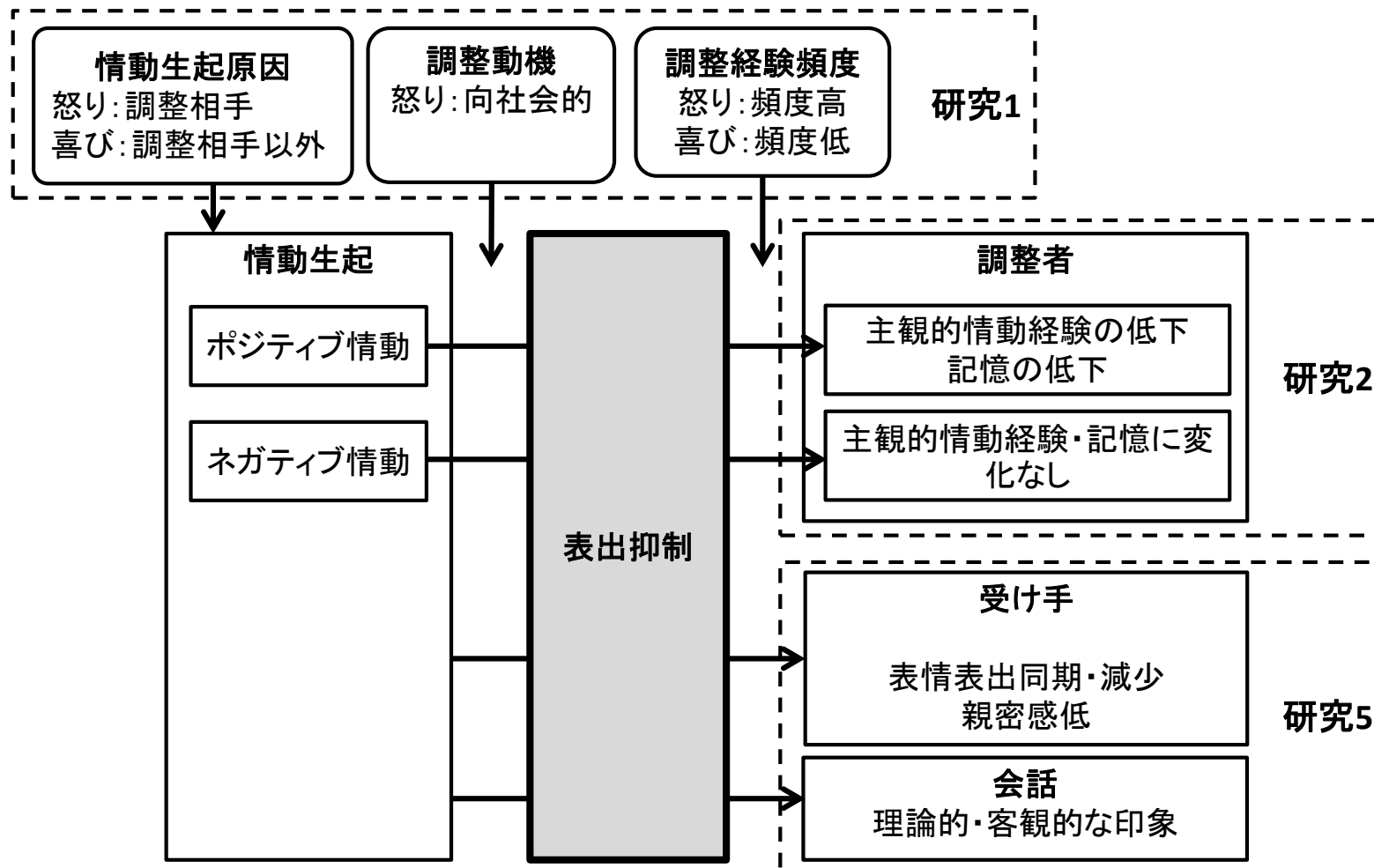


Figure 6-1. 研究 1 から 5 で得られた結果のまとめ (表出抑制)

(b) 表出誇張

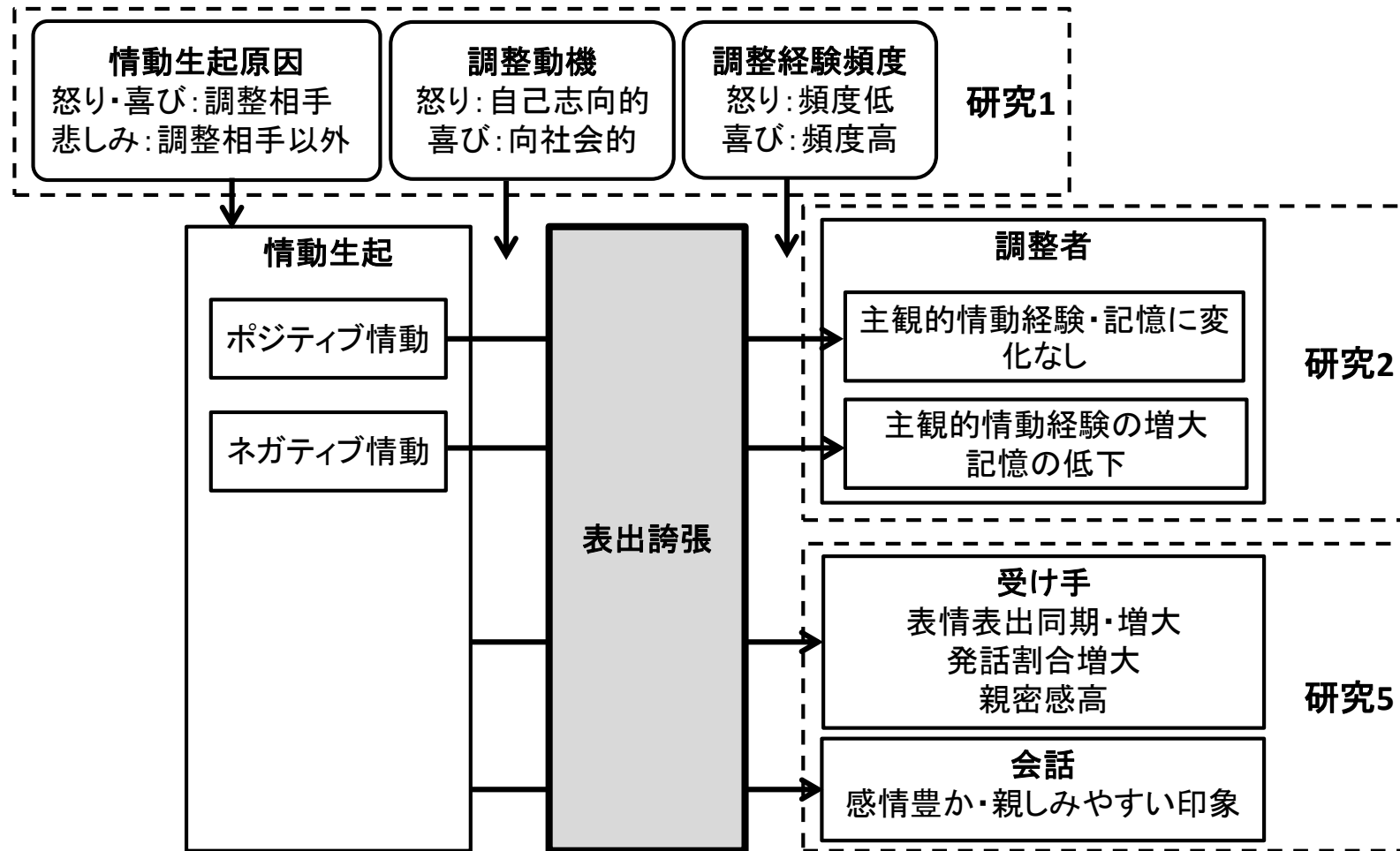


Figure 6-1. 研究 1 から 5 で得られた結果のまとめ (表出誇張)

(c) 不一致表出

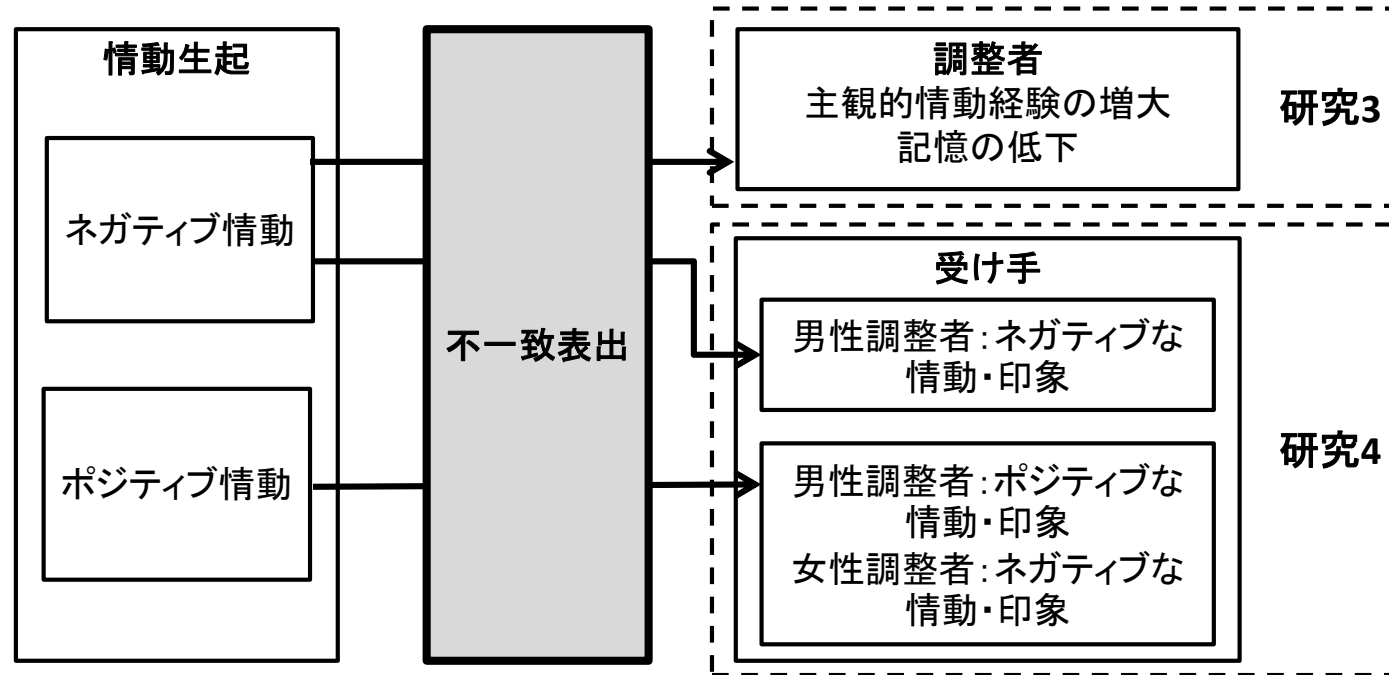


Figure 6-1. 研究 1 から 5 で得られた結果のまとめ (不一致表出)

その結果、ネガティブ情動経験時にポジティブ情動表出を行うことは情動経験の増大と記憶成績の低下をもたらすことが示された。不一致表出は、ネガティブな表情表出の抑制し、かつポジティブな表情を表出するという、表出抑制や表出誇張とは異なった2重のプロセスが求められるため、調整者の心理的負荷が増大したと考えられる。

研究4では、不一致表出が受け手の情動状態や調整者に対する対人印象判断認知に及ぼす影響について調べた。実験参加者を受け手とし、ポジティブ・ネガティブ両情動について不一致表出と情動調整を行わない自然表出の各表情映像を呈示し、情動経験や印象について評定してもらうという方法で、表出者の影響を統制した擬似的対人状況における実験を行った。その結果、男性は、ネガティブ情動経験時に笑顔を見せても、その表情表出が偽りの表情であると見抜かれやすく、受け手の情動経験や表出者に対する印象判断に悪影響を及ぼす一方で、女性では、表情表出の真偽が見抜かれにくく、自然表出と同様の機能をもたらすことが示された。また、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出する場合、表出されるネガティブ情動の種類によって与える影響が異なる可能性が示された。対人場面において巧みに不一致表出を行うことは、より良好なコミュニケーションの実現に寄与すると考えられる。

研究5では、2者の会話における表情表出の抑制・誇張が及ぼす対人的影響について調べた。Butler et al. (2003) と類似の手続きを用い、2者のうち一方が表情表出を抑制あるいは誇張させながら共有のネガティブ情動経験について会話をした場合、(a) 受け手の表情表出および調整者との表情同期、(b) 受け手の発話割合、(c) 受け手による印象評定、(d) 第3者による会話に対する印象が、各調整方略でどのように異なるのかを比較検討した。実際の会話中の2者それぞれの表出行動を撮影し、その映像から表情表出や発話データを抽出するとともに、会話の音声およびテキストに対して第3者による印象評定実験を行った。その結果、それぞれの条件に対応した表情同期がみられ、表出誇張条件では、抑制条件よりも、受け手のポジティブ情動表出が多く、会話の後半で受け手の発話割合が増え、調整者に対する親密感が強くなることが示された。第3者による会話の印象に関しては、表出誇張をした方が、表出抑制をしたときよりも、より親しみやすく感情豊かな会話になることが示された。一方、表

出抑制をした方が，表出誇張をしたときよりも，より客観的で理論的な印象の会話となることが示された。研究 5 より，表出抑制と表出誇張は同じ表情表出による情動調整であっても異なる社会的機能を有しており，コミュニケーション場面において，意図的な表情表出の増減が受け手の表情表出や発話，対人印象の形成に重要な役割を果たす可能性が示唆された。

6-2. 表情表出による情動調整の特性

本論文の目的は、5つの研究から、表情表出による情動調整の特性に関して主に次の3点について検討することであった。1点目は、表情表出による情動調整である表出抑制と表出誇張の2つの方略について、各方略が及ぼす情動的、認知的、対人的影響の比較、2点目は、ポジティブ情動とネガティブ情動の違いに関して、表出抑制、表出誇張の2つの方略についての検討、3点目は、表情表出による情動調整が対人場面において受け手や会話に及ぼす影響に関する検討である。以上3点について、次節より順にまとめた。

6-2-1. 表出抑制と表出誇張の比較

本論文では、研究1、2および5において表出抑制と表出誇張の比較を行ったが、いずれの研究においても2つの方略の違いが示された。表出抑制と表出誇張は、抑制と開示という異なる表情表出の動きをするため外面的な機能が異なると考えられる。

表出抑制は、内面的にはポジティブ情動経験が低減することもあり調整者の心身にとって負担となりうるが、外面的には表情表出が抑えられるため、対面する他者に対して客観的で理論的な印象を与えることができるだろう。表出誇張は、ネガティブ情動経験が増大することもあり調整者の心身にとっては表出抑制と同じく負担となりうるが、表情表出が豊かになるため、対面する他者に対して感情豊かで親しみやすい印象を与えることができるだろう。いずれの方略も、調整者の心身にとって負担となる一方で対人的印象を変化させることができる可能性があるという点では共通であるが、印象の変化の仕方が異なる。情動表出を抑制することは心身への負担が大きく否定的な見方があるが(John & Gross, 2004)、表出抑制を行うことで有益となる印象をもたらす可能性も考えられる。各方略がどのような状況で適切となるかは異なると考えられるため、状況に応じて使い分けることが求められるだろう。

6-2-2. ポジティブ情動とネガティブ情動の違い

本研究では、研究1において怒り・悲しみ・喜びの3情動、研究2および4においてポジティブとネガティブ両情動について検討したところ、ポジティブ

情動とネガティブ情動では異なる結果が得られた。

ポジティブ情動では表出誇張が、ネガティブ情動では表出抑制が、それぞれ頻度が高く、向社会的動機で行われることが多く、主観的情動経験や記憶への影響も少ないことが分かった。ポジティブ情動の表出誇張の有用性が確認できたことは、ポジティブ情動の機能に関する知見（e.g., Fredrickson, 2000）を補強するものであると言える。

一方、同じネガティブ情動でも怒りと悲しみでは調整動機や情動生起原因に関して異なる結果が得られていること、不一致表出によるネガティブ情動表出についてはいずれのネガティブ情動を表出するかによって受け手に異なる印象をもたらすことが示されている。例えば、怒りは表出抑制が求められることが多いが、悲しみは表出誇張することが望ましいというように、ネガティブ情動という点では同じであっても状況によって異なる働きをする場合もあるだろう。今後は、ポジティブ、ネガティブという大きな区別だけではなく、より詳細な情動別に検討することも必要であると考えられる。

6-2-3. 対人場面において表情表出による情動調整が及ぼす影響

対人場面における表情表出による情動調整の影響については、研究 4 および 5 で検討した。その結果、情動調整の受け手に対して、表出される表情によって異なる情動や印象をもたらしたり、調整方略に対応した表情表出をもたらしたりすることが示された。受け手の表情表出に影響するだけでなく、受け手の発話割合や第 3 者による会話の印象にも影響を及ぼすことが示されたことは新たな知見であると言える。表情表出がコミュニケーションにとって重要なツールであることを改めて示すものである。会話において表情表出を巧みに操作することによって、相手の発話量を調節したり印象を変えたりすることができる可能性が示唆された。

6-3. 表情表出による情動調整の生起プロセスと役割への示唆

本研究で得られた知見より想定される表情表出による情動調整の生起プロセスについて、Figure 6-2 に示す。

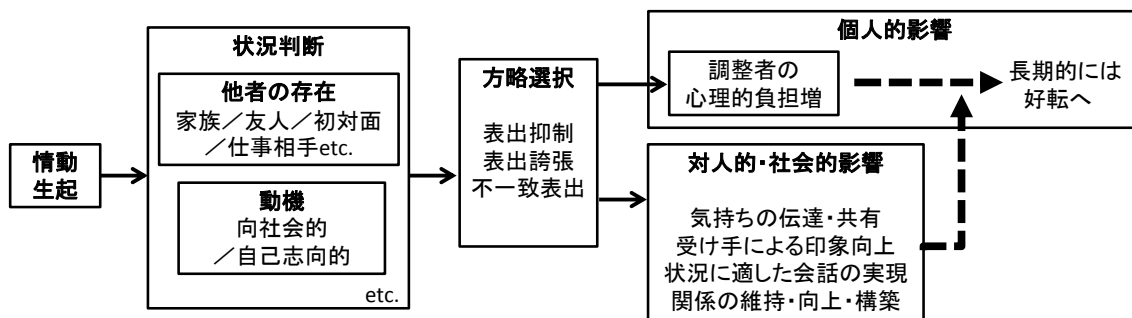


Figure 6-2. 想定される表情表出による情動調整の生起プロセス

各方略が調整者自身に及ぼす影響については、先行研究と異なるところがあるものの、ポジティブ情動の表出抑制やネガティブ情動の表出誇張および不一致表出において、調整者のネガティブな情動経験の増大や記憶成績の低下といったネガティブな影響をもたらすことが明らかとなった。ポジティブ情動の表出誇張やネガティブ情動の表出抑制についても、調整者の情動経験や記憶への影響はそれぞれ自然な表情表出をしたときと変わらず、ポジティブな情動経験を増大させたりネガティブな情動経験を減少させたりするといったポジティブな機能はみられなかった。以上のことから、表情表出による情動調整を行うことは、調整者自身の精神健康や認知にとっては負担が大きいと考えられる。

以上のように、表情表出による情動調整は個人にとって心理的負担が大きいにも関わらず、意図的な表情表出による情動調整が日常的に行われることは研究 1 においても示されている。これは、表情表出による情動調整が対人的・社会的に有益な点が多いことが一因と考えられる。本論文の各研究において、表情表出による情動調整が情動や方略によっては次のような 4 つの対人的利益をもたらすことが示唆された。(a) 自己の気持ちの伝達および受け手との気持ちの共有、(b) 受け手による印象の向上、(c) 状況に適した会話の実現、(d) 関係の維持・向上・構築である。(a) 自己の気持ちの伝達および受け手との気持ちの共有については、自己の気持ちを伝えるために怒りの表出を誇張したり、悲

しみを共有するために表出誇張したりすることが分かった（研究 1）。(b) 受け手による印象の向上については、不一致表出によるポジティブ情動表出が自然なポジティブ情動表出と同様の印象をもたらすことや（研究 4）、表出誇張の方が表出抑制よりも親密感が増すことが示された（研究 5）。(c) 状況に適した会話の実現については、客観的・理論的な印象の会話にしたい場合は表出を抑制し、親しみやすい印象の会話にしたい場合は表出を誇張した方が効果的であることが分かった（研究 5）。(d) 関係の維持・向上・構築については、喜びの表出誇張によって受け手との関係が良くなることが示されただけでなく（研究 1）、初対面の相手との会話における表出誇張が活発な会話や好印象をもたらすことが示されたことから（研究 5）、その後の関係構築にもつながることが期待できる。

表出誇張は、初対面の相手との会話において、会話の活発化や親密感の形成に寄与することが分かった。表出抑制は、ビジネスや教育指導などにおいて、客観的、理論的に話すことで情報を的確に伝えたい場面で役立つだろう。また、不一致表出をすることで、自己の情動状態に関わらず、受け手に対して共感や理解を示したりネガティブな印象を与えないようにしたりできると考えられる。このように、表情表出を適切に調整することができれば、自己の情動状態をコントロールしたり、他者に好印象を与えたり、会話を主導的に方向づけたりすることが可能となるだろう。

このように、人は、生起した情動に対して、受け手となる他者の存在など周囲の状況からどのような表情表出が適切であるかを判断し、いずれかの方略を選択すると考えられる。そして、各状況に応じて情動調整を行うことで、個人的影響としてはネガティブな情動経験の増大や記憶の低下といった心理的負担が大きい一方、受け手や会話などにもたらされる対人的・社会的利益が、長期的な意味で調整者自身の精神健康の向上につながるのではないだろうか。今後、各方略が前述したような状況で適切に機能するか実証する必要がある。

6-4. 展望

本節では、今後検討すべき3つの課題について述べる。以下の課題について検討することで、日常場面において表情表出による情動調整を効果的に使用するために必要な知見を得ることができると考えられる。

6-4-1. 情動調整の様々な方略について

本論文では、表情表出による情動調整の特性を明らかにすることに焦点を当て、表出抑制、表出誇張、不一致表出という表情表出による情動調整の3つの方略について検討した。一方で、表情表出による情動調整とは異なる調整方略について比較検討することも情動調整の意義を考える上では重要である。再評価や気晴らしなど異なる調整方略が調整者に及ぼす影響はそれぞれ異なることが分かっており、表出抑制に比べて調整者にとって有益に働くとされている (John & Gross, 2004; Richards & Gross, 2006)。しかしながら、先行研究はネガティブ情動についての検討であり、例えばポジティブ情動の表出誇張と再評価で比較した場合は異なる結果となるかもしれない。また、先行研究はあくまで個人状況における検討であり、対人的状況では異なる結果になる可能性も考えられる。対人的状況では、他者との双方向の会話において情動調整が行われると想定され、状況の異なる側面に注意を向けたり (気晴らし)、状況の意味を変えたり (再評価) といった方略を調整者が一方的に行うことは困難な場合もあるだろう。多様な状況においてそれぞれ適切な情動調整とは何かを考えるためにも、今後様々な方略について幅広く検討する必要がある。

6-4-2. 調整者の個人特性

本論文では、研究4において調整者の性別を考慮した分析を行ったが、調整者の個人差についてはほとんど扱わなかった。一方、研究5で行った実験の会話セッションにおいて、会話への積極性や表情表出の程度が参加者によって異なる印象を受けた。第1章でも述べたように、情動調整と個人特性に関連があることは Gross & John (2003) によって示されている。また、情動調整の困難性を測定する尺度 (Difficulties in Emotion Regulation Scale: DERS, Grantz & Roemer, 2004) と不安障害との関連などについても指摘されている

(山田・杉江, 2012)。情動調整が及ぼす影響についても, 社会不安特性の高低によって異なる可能性も考えられる。今後は, 個人特性の違いで分けて検討することで, 各個人特性にとって適切な情動調整について考察する必要がある。

6-4-3. 方略や情動, 動機の種類別による詳細な検討

本研究により, 表情表出による情動調整の3つの方略が行われるプロセスは多様であり, もたらされる影響は方略や情動の種類によって異なることが示された。今後は, 情動調整が行われる状況を詳細に設定した上での比較検討が求められるだろう。

今後検討すべき方略の1つとして, ネガティブ情動の表出誇張が挙げられる。ネガティブ情動は, 先行研究においても, 表出抑制されることが適切であり頻度も高いと考えられているが (Gross et al., 2006; 研究1), 表出が必要となる場面も少なからずある。例えば, 乳幼児は養育者からの援助を求めて偽りの悲しみを表出することがあるという (溝川, 2011)。一方, 大人に関して, 研究1で得られた記述において, 家族や恋人に自分の悲しみや怒りを理解してほしい, 伝えたいという自己志向的動機が働いたときに表出誇張が行われることが分かった。幼児でも大人でも, 自己の気持ちの伝達という動機が働く場合はネガティブ情動であっても表出されると考えられる。

手話を行う際の表情表出も, ネガティブ情動の表出が誇張される顕著な例である。テレビの手話ニュースではネガティブな内容のニュースを伝えることが多く, その際に手話通訳者がネガティブな表情を大げさに表出する様子を目にすることができる。手話を必要とする聴覚障害者にとって, 音声情報による情動伝達は困難であるため, 非言語情報による情動伝達が重要であると考えられる。河野・渋谷・黒川 (2000) の研究においても, 手話通訳者の表情は自然な手話表現にとって欠かすことができない要素であることが示されている。以上のことから, 手話によってネガティブな内容を他者に伝達する際, 内容に応じたネガティブな表情表出を誇張することによって, 情報内容の理解が促進されることが期待できる。手話通訳者が表情表出を抑制した場合と誇張した場合で, 受け手の理解がどう変わるかを検討することによって, ネガティブ情動の表情表出の抑制と誇張の違いやネガティブ情動の表出誇張の意義について示唆を得

ることができるだろう。

また、研究1の結果より表情表出による情動調整において情動生起原因や調整動機などが情動や方略によって異なることが示されたことから、次のような実証的研究を行うことも意義があるだろう。情動調整を行ってもらう際の教示において、向社会的動機もしくは自己志向的動機から情動調整するよう条件分けをした場合、それぞれの動機で表情表出や情動経験、認知において異なる影響がみられるかもしれない。Tamir (2009) によれば、これまでの実証的研究においても状況や動機によっては不快な情動であっても有益となることが示されており、情動調整の動機が異なればそれによって得られる結果も異なることを示唆している。自己志向的動機についても快樂的動機と道具的動機の2つに分けることができ、これらの違いを検討することも意義がある。これまでの情動調整に関する実証的研究では、情動や方略による情動経験や認知の違いが検討されてきたが、調整動機や情動生起原因などの要因を予め設定することで、情動や方略の違いだけでは取り出せなかった新たな結果、特性を得られることが期待できる。

6-5. 情動調整に関わる神経学的基盤

本研究では、表情表出による情動調整の特性について認知的、行動的指標を用いて検討した。近年、神経学的アプローチによって、表情表出による情動調整に関する脳機能についての検討も行われている。本節では、補足として、情動調整に関わる神経基盤についての先行研究の知見をまとめた。

情動調整に関わる神経基盤については、神経心理学や神経イメージング研究において様々な先行研究がある (Beer & Lombardo, 2007; Davidson, Fox, & Kalin, 2007; Ochsner & Gross, 2007)。

情動反応や情動調整といった情動に関連するプロセスに関する神経基盤の研究において、情動調整にとって前頭前野 (prefrontal cortex; PFC) と扁桃体 (amygdala) の活動が重要であることが報告されている (Davidson et al. 2007; Ochsner & Gross, 2005; Urry, van Reekum, Johnstone, Kalin, Thurow, Schaefer, Jackson, Frye, Greischar, Alexander, & Davidson, 2006)。

脳損傷患者に関する研究においても、情動調整に関連する脳部位が示唆されている (Beer & Lombardo, 2007)。1 つに、前頭葉の損傷は、情動反応強度のコントロールの低減と関連すると考えられる (e.g., MacMillan, 1986)。例えば、鉄の棒が頭に刺さり前頭葉を損傷したフィネアス・ゲージ (Phineas Gage) の症例に関して、怒りっぽく不遜になったとして人格の変化が指摘されてきたが、情動調整能力の欠損という捉え方もできる。また、前頭葉の損傷は、情動鈍麻とも関連していると言われている (e.g., Paradiso, Chemerinski, Yazici, Tartaro, & Robinson, 1999)。Paradiso et al. (2009) では、側部前頭葉を損傷した患者は情動経験ややる気が低下することが示された。前頭葉は、注意の方向、ワーキングメモリにおける情報の維持、環境の変化に応じた情報の修正、必要のない情報の抑制といった、様々な実行機能や制御プロセスに関わるフィルタリング機能の役割を果たす領域であるとされてきた (dynamic filtering theory; Shimamura, 2000)。この考えに基づくと、情動情報に対しても前頭葉が同様の働きをすると考えられる。前頭葉において、もたらされる情動情報が、(a) 注意の対象となるか、(b) 短期記憶に維持されるか、(c) 文脈の変化に応じて更新されるか、(d) 抑制されるかによって、情動反応の強度が制御されるのである (Beer & Lombardo, 2007)。

また、顔面筋の動きを制御する運動系の回路の損傷に関する研究から、表情表出に関連する脳部位が示されている (Beer & Lombardo, 2007)。Beer & Lombardo (2007) によれば、皮質延髄における損傷患者は、ポジティブ刺激に対して自発的に笑うことはできるが、教示にしたがって笑顔を見せることができなくなる一方、錐体外路運動系における損傷患者は、教示にしたがって表情を作ることはできるが、自然に生じた情動経験を表出することができないことが分かった。また、左側部前頭葉の損傷によって、情動失禁や仮性球情動といった病的な泣き笑いの症状が引き起こされることが示されている。これらの症状は、正常な状態では情動反応が生じないような刺激に対して生じるものであり、内的な情動状態を反映していない。このように、運動系および前頭葉は反応調節段階における情動調整に関連しており、表情表出の調整と内的な情動経験の調整はそれぞれ異なる神経システムによることが示唆されている (Beer & Lombardo, 2007)。

以上の知見より、表情表出による情動調整においても、前頭葉および運動系が関連していると考えられる。例えば、本研究の研究 2 において、表出抑制と表出誇張が主観的情動経験に及ぼす影響に関して、表出抑制と表出誇張の違いやポジティブ情動とネガティブ情動の違いが示されたように、表情表出と情動経験の関係性が方略や情動の種類によって一様でないことはそれぞれの神経システムが異なることによる可能性も考えられる。今後は、各方略や情動によって各脳部位の活動の違いがみられないか検討するなど、認知的・行動的な研究と脳科学的研究が互いに補い合うことが求められる。

6-6. 終わりに

本研究では、表情表出による情動調整に関して、実際の調整経験事例についてまとめ、調整者や受け手、会話に及ぼす影響について方略や情動の違いによる比較検討を行うことによって、表情表出による情動調整の特性について示した。

研究1では、表情表出による情動調整が実際には非常に多様な状況で行われることが示され、人は自己の情動状態やそれが及ぼす影響について十分に意識を向けていることが分かった。また、研究2から5において、多数の表情表出を撮影、観察する中で、人が表情表出を巧みに操作できることが分かった。特に研究5においては、2者による表情表出のやり取りを概観する中で、その時々状況を瞬時に察知しどのように表情表出を行うべきか判断する様子がみられた。このように、人は、日々の生活の中で、表情表出による情動調整を自然かつ巧みに行っていると考えられる。一方で、本研究は、様々な理由から他者とのコミュニケーションに困難を感じる人々にとっても有用な示唆をもたらすと考えられる。例えば、他者との会話中に上手く話すことができない場合でも意識的に笑顔で応じることで、会話を盛り上げたり好印象をもたらしたりすることが可能となるだろう。表情表出による情動調整の特性をより深く理解することにより、個人の精神健康の安定と対人関係の構築につながることを期待される。

また、本研究では、多くの表情表出動画を分析し、表情表出による情動調整が及ぼす影響について受け手の表情表出や発話割合などの新たな指標を提案した。表情が表出される様子についての観察、分析は様々な分野に応用できると考えられる。例えば、工学的分野では、ロボットや擬人化エージェントの表情表出の研究が盛んに行われている。特徴的な部位だけを変化させたデフォルメされた表情だけでなく、人間の顔面筋の動きを基にした自然な表情表出を実現したアンドロイドロボットの開発が進められている（橋本，平松，辻，小林，2009）。このような分野の研究では、人間との自然なコミュニケーションの実現を目指しており、本研究において示された表情表出による情動調整の特性を応用することで、より人間に近いリアルな表情や様々な状況に応じた適切な表情を開発することが可能となると考えられる。また、臨床場面に応用すること

もできるだろう。長岡・小森（2009）の研究によれば、カウンセリング場面での対話において、身体動作の同調性といった非言語行動がカウンセリングの質の高さと関係することが示されている。表情表出もまた、カウンセラーにとって重要な非言語行動であると考えられる。表情表出による情動調整の研究を通してカウンセラーにとって適した表情表出を明らかにすることができれば、カウンセラーのスキルの向上にもつながるだろう。

このように、表情表出による情動調整の特性について更なる知見を積み重ね、各状況において適した表情表出を明らかにすることにより、日常生活において自己の精神健康や他者とのコミュニケーションをより豊かなものにすることができると考える。

引用文献

- Beer, J. S., & Lombardo, M. V. (2007). Insights into emotion regulation from neuropsychology. In J. J. Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation*. New York: Guilford Press, pp.69-86.
- Beukeboom, C. J. (2009). When words feel right: How affective expressions of listeners change a speaker's language use. *European Journal of Social Psychology*, **39**, 747-756.
- Bonanno, G. A., Papa, A., Lalande, K., Westphal, M., & Coifman, K. (2004). The importance of being flexible: The ability to both enhance and suppress emotional expression predicts long-term adjustment. *Psychological Science*, **15**, 482-487.
- Bowlby, j. (1969). *Attachment and loss: Attachment*. New York: Basic Books.
- Butler, E. A., Egloff, B., Wilhelm, F. H., Smith, N. C., Erickson, E. A., & Gross, J. J. (2003). The social consequences of expressive suppression. *Emotion*, **3**, 48-67.
- Butler, E. A., Lee, T. L., & Gross, J. J. (2007). Emotion regulation and culture: Are the social consequences of emotion suppression culture-specific? *Emotion*, **7**, 30-48.
- Campos, J. J., Campos, R. G., & Barrett, K. G. (1989). Emergent themes in the study of emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology*, **25**, 394-402.
- Chartrand, T. L. & Bargh, J. A. (1999). The chameleon effect: The perception - behavior link and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 893-910.
- Cole, P. M. (1986). Children's Spontaneous control of Facial expression. *Child Development*, **57**, 1309-1321.
- Darwin, C. R. (1872). *The expression of the emotions in man and animals*. London: John Murray.
- Davidson, R. J., Fox, A., & Kalin, N. H. (2007). Neural bases of emotion

- regulation in nonhuman primates and humans. In J. J. Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation*. New York: Guilford Press, pp. 47-68.
- Demaree, H. A., Robinson, J. L., Pu, J., & Allen, J. J. B. (2006). Strategies actually employed during response-focused emotion regulation research: Affective and physiological consequences. *Cognition and Emotion*, **20**, 1248-1260.
- Demaree, H. A., Schmeichel, B. J., Robinson, J. L., & Everhart, D. E. (2004). Behavioural, affective, and physiological effects of negative and positive emotional exaggeration. *Cognition and Emotion*, **18**, 1079-1097.
- Dimberg, U. (1982). Facial reactions to facial expressions. *Psychophysiology*, **19**, 643-647.
- Dimberg, U., & Thunberg, M. (1998). Rapid facial reactions to different emotionally relevant stimuli. *Scandinavian Journal of Psychology*, **39**, 39-45.
- Ellis, L. (2006). Gender differences in smiling: An evolutionary neuroandrogenic theory. *Physiology & Behavior*, **88**, 303-308.
- Ekman, P. (2003). *Emotions revealed: recognizing faces and feelings to improve communication and emotional life*. New York: Henry Holt.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1978). *The facial action coding system: A technique for the measurement of facial movement*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Ekman, P., Friesen, W. V., O'Sullivan, M., Chan, A., Diacoyanni-Tarlatzis, I., Heider, K., Krause, R., LeCompte, W.A., Pitcairn, T., Ricci-Bitti, P. E., Scherer, K.R., Tomita, M., & Tzavaras, A. (1987). Universals and cultural differences in the judgment of facial expressions of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 712-717.
- Folkman, S., & Lazarus, R. S. (1980). An analysis of coping in a middle aged

- community sample. *Journal of Health and Social Behavior*, **21**, 219-239.
- Fredrickson, B. L. (2001). The role of positive emotions in positive psychology: The broaden-and-build theory of positive emotions. *American Psychologist*, **56**, 218-226.
- Freud, A. (1936). *The ego and the mechanism of defense*. London: Karnac Books.
- (フロイト, A. 外林大作 (訳) (1985). 自我と防衛 誠信書房)
- Fridlund, A. J. (1994). *Human facial expression: A evolutionary view*. San Diego, CA: Academic Press.
- Frijda, N. H. (1986). *The emotions*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2006). 小集団会話における話者の発言傾向を規定する 3 要素 社会言語科学, **9**, 48-58.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007). 小集団による会話の展開に及ぼす会話者の発話行動傾向の影響 実験社会心理学研究, **47**, 51-60.
- Fujisaki, H. (2004). Prosody, information, and modeling — with emphasis on tonal features of speech —. *Proceedings of Speech Prosody*, Nara, 1-10.
- 福島和郎・岩崎康男・渋谷昌三 (2008). 終助詞 “よ” と “ね” の発話が発話者の印象に及ぼす効果 目白大学心理学研究, **4**, 75-84.
- Gratz, K. L. & Roemer, L. (2004). Multidimensional assessment of emotion regulation and dysregulation: Development, factor structure, and initial validation of the Difficulties in Emotion Regulation Scale. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, **26**, 41-54.
- Gross, J. J. (1998a). Antecedent- and response-focused emotion regulation: Divergent Consequences for experience, expression, and physiology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 224-237.
- Gross, J. J. (1998b). The emerging field of emotion regulation: An integrative review. *Review of General Psychology*, **2**, 271-299.
- Gross, J. J. (2001). Emotion regulation in adulthood: Timing is everything.

- Current Directions in Psychological Science*, **10**, 214-219.
- Gross, J. J. (2002). Emotion regulation: Affective, cognitive, and social consequences. *Psychophysiology*, **39**, 281-292.
- Gross, J.J., & John, O.P. (2003). Individual differences in two emotion regulation processes: Implications for affect, relationships, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 348-362.
- Gross, J. J. & Levenson, R. W. (1993). Emotional suppression: Physiology, self-report, and expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 970-986.
- Gross, J. J. & Levenson, R. W. (1997). Hiding feelings: The acute effects of inhibiting negative and positive emotion. *Journal of Abnormal Psychology*, **106**, 95-103.
- Gross, J.J., Richards, J. M., & John, O.P. (2006). Emotion regulation in everyday life. In D. K. Snyder, J. A. Simpson, J. N. Hughes (Eds.), *Emotion regulation in families: Pathways to dysfunction and health*. Washington DC: American Psychological Association, pp. 13-35.
- Gross, J.J., & Thompson, R.A. (2007). Emotion regulation: Conceptual foundations. In J.J. Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation*. New York: Guilford Press, pp. 3-24.
- Harker, L., & Keltner, D. (2001). Expressions of positive emotion in women's college yearbook pictures and their relationship to personality and life outcomes across adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 112-124.
- Hatfield, E., Cacioppo, J., & Rapson, R. (1994). *Emotional Contagion*. New York: Cambridge University Press.
- 橋本卓弥・平松幸雄・辻 俊明・小林 宏 (2009). ライフマスクを用いた顔ロボットによる動的表情表出 日本機械学会論文集 (C 編), **75**, 113-121.
- Hess, U. & Blairy, S. (2001). Facial mimicry and emotional contagion to dynamic emotional facial expressions and their influence on decoding accuracy. *International Journal of Psychophysiology*, **40**, 129-141.

- Hill, M. L. & Craig, K. D. (2002). Detecting deception in pain expressions: The structure of genuine and deceptive facial displays. *Pain*, **98**, 135-144.
- 市川寛子・牧野順四郎 (2004). 刺激表情に対する観察者の同調的表情 心理学研究, **75**, 142-147.
- Izard, C. E. (1990). Facial expressions and the regulation of emotions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 487-498.
- John, O. P. & Gross, J. J. (2004). Healthy and unhealthy emotion regulation: Personality processes, individual differences, and life span development. *Journal of Personality*, **72**, 1301-1333.
- 河野純大・渋谷佳久・黒川隆夫 (2000). 表情を含む手話画像の生成と手話理解への表情の効果 電子情報通信学会技術研究報告, **100**, 31-36.
- 木村昌紀・余語真夫・大坊郁夫 (2007). 日本語版情動伝染尺度 (the Emotional Contagion Scale) の作成 対人社会心理学研究, **7**, 31-39.
- 木野和代 (2001). 対人場面における怒りの表出および表出抑制に関わる経験の予備的分析 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **48**, 277-281.
- Kraut, R. E. (1982). Social presence, facial feedback, and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 853-863.
- Kunzmann, U., Kupperbusch, C. S., & Levenson, R. W. (2005). Behavioral inhibition and amplification during emotional arousal: A comparison of two age groups. *Psychology and Aging*, **20**, 144-158.
- Laird, J. D. (1974). Self-attribution of emotion: The effects of expressive behavior on the quality of emotional experience. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 475-486.
- Laird, J. D., Alibozak, T., Davainis, D., Fontanella, K., Hong, J., Levy, B., & Pacheco, C. (1994). Individual differences in the effects of spontaneous mimicry on emotional contagion. *Motivation and Emotion*, **188**, 231-246.
- Laurenceau, J., Barrett, L. F., & Pietromonaco, P. R. (1998).

- Intimacy as an interpersonal process: The importance of self-disclosure and partner disclosure, and perceived partner responsiveness in interpersonal exchanges. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1238-1251.
- Lopes, P. N., Salovey, P., Côté, S., & Beers, M. (2005). Emotion regulation abilities and the quality of social interaction. *Emotion*, **5**, 113-118.
- Lundquist, L.O., & Dimberg, U. (1995). Facial expressions are contagious. *Journal of Psychophysiology*, **9**, 203-211.
- MacMillan, M. B. (1986). A wonderful journey through skull and brains: The travels of Mr. Gage's tamping iron. *Brain and Cognition*, **5**, 67-107.
- Malatesta, C. Z., & Wilson, A. (1988). Emotion cognition interaction in personality development: A discrete emotions, functionalist analysis. *British Journal of Social psychology*, **27**, 91-112.
- Matsumoto, D., Consolacion, T., Yamada, H., Suzuki, R., Franklin, B., Paul, S., Ray, R., & Uchida, H. (2002). American-Japanese cultural differences in judgements of emotional expressions of different intensities. *Cognition and Emotion*, **16**, 721-747.
- Mauss, I. B., Butler, E. A., Roberts, N. A., & Chu, A. (2010). Emotion control values and responding to an anger provocation in Asian-American and European-American individuals. *Cognition and Emotion*, **24**, 1026-1043.
- 溝川 藍 (2011). 幼児期における感情表出の調整に関する理解の発達 京都大学大学院教育学研究科紀要, **57**, 503-515.
- 長岡千賀・小森政嗣 (2009). 心理面接におけるカウンセラーの応答 : 話者交替時のカウンセラーの発話冒頭を指標とした事例研究 認知科学, **16**, 24-38.
- Nomura, M. & Yoshikawa, S. (2011). Gaze and facial expressions when talking about emotional episodes. *Psychologia*, **54**, 15-26.
- Ochsner, K. N. & Gross, J. J. (2007). The neural architecture of emotion regulation. In Gross, J. J. (Ed.), *The Handbook of Emotion Regulation*.

- New York: Guilford Press, pp. 87-109.
- Ochsner, K. N. & Gross, J. J. (2005). The cognitive control of emotion. *Trends in Cognitive Sciences*, **9**, 242-249.
- 大橋正夫・三輪弘道・平林 進・長戸啓子 (1974). 写真による印象形成の研究 (2)—印象評定のための尺度項目の選定— 名古屋大學教育學部紀要(教育心理学科), **20**, 93-102.
- Paradiso, S., Chemerinski, E., Yazici, K. M., Tartaro, A., & Robinson, R. G. (1999). Frontal lobe syndrome reassessed: Comparison of patients with lateral and medial frontal brain damage. *Journal of Neurology, Neurosurgery, Neuroimage*, **23**, 483-499.
- Poole, G. D., & Craig, K. D. (1992). Judgments of genuine, suppressed, and faked facial expressions of pain. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 797-805.
- Prkachin, K. M. (2005). Effects of deliberate control on verbal and facial expressions of pain. *Pain*, **114**, 328-338.
- Richards, J. M. (2004). The cognitive consequences of concealing feelings. *Current Directions in Psychological Science*, **13**, 131-134.
- Richards, J. M., Butler, E. A., & Gross, J. J. (2003). Emotion regulation in romantic relationships: The cognitive consequences of concealing feelings. *Journal of Social and Personal Relationships*, **20**, 599-620.
- Richards, J. M. & Gross, J. J. (1999). Composure at any cost? The cognitive consequences of emotion suppression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 1033-1044.
- Richards, J. M. & Gross, J. J. (2000). Emotion regulation and memory: The cognitive costs of keeping one's cool. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 410-424.
- Richards, J. M. & Gross, J. J. (2006). Personality and emotional memory: How regulation emotion impairs memory for emotional events. *Journal of Research in Personality*, **40**, 631-651.
- Robinson, J. L., & Demaree, H. A. (2007). Physiological and cognitive effects

- of expressive dissonance. *Brain and Cognition*, **63**, 70-78.
- Robinson, J. L., & Demaree, H. A. (2009). Experiencing and regulating sadness: Physiological and cognitive effects. *Brain and Cognition*, **70**, 13-20.
- Russell, J. A. (1994). Is there universal recognition of emotion from facial expression? *Psychological Bulletin*, **115**, 102-141.
- Saarni, C. (1984). An observational study of children's attempts to monitor their expressive behavior. *Child Development*, **55**, 1504-1513.
- 崔 京姫・新井邦二郎 (1998). ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係 教育心理学研究, **46**, 432-441.
- Sato, W., Noguchi, M., & Yoshikawa, S. (2007). Emotion elicitation effect of films in a Japanese sample. *Social Behavior and Personality*, **35**, 863-874.
- Scherer, K. R., Wallbott, H. G., Matsumoto, D., & Kudoh, D. (1988). Emotional experience in cultural context: A comparison between Europe, Japan, and the United States. In Scherer, K. R. (Ed). *Facets of emotion: Recent research*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. pp.5-30.
- Shimamura, A. P. (2000). The role of the prefrontal cortex in dynamic filtering. *Psychobiology*, **28**, 207-218.
- Srivastava, S., Tamir, M., McGonigal, K.M., John, O. P., & Gross, J. J. (2009). Social costs of emotional suppression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 883-897.
- Strack, F., Martin, L. L., & Stepper, S. (1988). Inhibiting and facilitating conditions of the human smile: A nonobtrusive test of the facial feedback hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 768-777.
- 高木幸子 (2006). コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割 早稲田大学大学院文学研究科紀要, **51**, 25-36.
- Tamir, M. (2009). What do people want to feel and why? Pleasure and utility in emotion regulation. *Current Directions in Psychological Science*, **18**,

101-105.

- 田村 亮・亀田達也 (2006). 表情は模倣されるのかー日本人参加者を用いた検討ー 心理学研究, **77**, 377-382.
- 田村 亮・亀田達也 (2007). 恐怖感情は伝染するか? : 選択的注意配分行動による検討 感情心理学研究, **14**, 64-70.
- Thompson, R. A. (1991). Emotional regulation and emotional development. *Educational Psychology Review*, **3**, 269-307.
- Tomkins, S. S. (1962). *Affect, imagery, consciousness: Vol. 1. The positive affects*. New York: Springer.
- Urry, H. L., van Reekum, C. M., Johnstone, T., Kalin, N. H., Thurow, M. E., Schaefer, H. S., Jackson, C. A., Frye, C. J., Greischar, L. L., Alexander, A. L., & Davidson, R. J. (2006). Amygdala and ventromedial prefrontal cortex are inversely coupled during regulation of negative affect and predict the diurnal pattern of cortisol secretion among older adults. *Journal of Neuroscience*, **26**, 4415-4425.
- Wang, N. & Gratch, J. (2009). Rapport and facial expression. *3rd International Conference on Affective Computing and Intelligent Interaction*, 1-6.
- 綿貫啓子・外川文雄 (1995). 対話における感情の変化の解析 情報処理学会研究報告, **95**, 79-84.
- 山田圭介・杉江 征 (2012). 感情制御能力に関する研究の動向とスピーチ場面への応用可能性 筑波大学心理学研究, **44**, 123-130.
- 吉川左紀子・中村 真 (1997). 顔・表情の違いによる発話行動の調整 電子情報通信学会論文誌, **J80-A**, 1324-1331.
- 吉津 潤・関口理久子・雨宮俊彦 (2013). 感情調節尺度 (Emotion Regulation Questionnaire) 日本語版の作成 感情心理学研究, **20**, 56-62.
- 結城裕也 (2006). 感情の表出性とフィードバックの方向性が対人関係に及ぼす効果ー親密な対人関係を中心にしてー 日本社会心理学会第 47 回大会発表論文集, 356-357.
- 結城裕也 (2007). 感情価の違いによる感情表出の制御の予備的検討 日本社

会心理学会第48回大会発表論文集, 624-625.

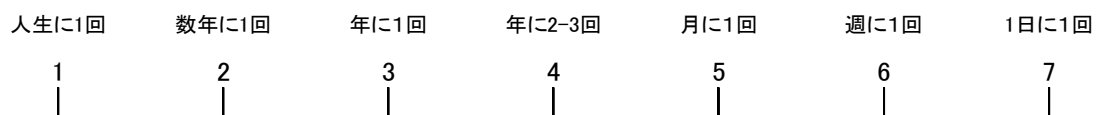
Zajonc, R. B., Murphy, S. T., & Inglehart, M. (1989). Feeling and facial expression: Implications of the vascular theory of emotion. *Psychological Review*, **96**, 395-416.

Zeman, J. & Shipman, K. (1997). Social-contextual influences on expectancies for managing anger and sadness: The transition from middle childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, **33**, 917-924.

前ページで書いた経験についてお答えください。

(複数書いた場合は、最初に書いた経験についてお答えください。)

- あなたは、どのくらいの頻度で怒りを表情にあらわさない経験をしますか？最も適切な個所を1つ選んで○をしてください。



- あなたは、怒りの感情をどの程度強く感じていましたか？最も適切な個所を1つ選んで○をしてください。



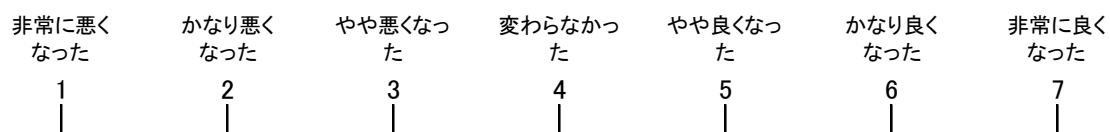
- 表情にあらわさなかった相手とは、どの程度親密な関係ですか？最も適切な個所を1つ選んで○をしてください。



- 表情にあらわさなかった相手は、あなたが本当の感情を隠していることに気付いたと思いますか？最も適切な個所を1つ選んで○をしてください。



- 表情にあらわさなかったことで、相手との関係はどのように変化しましたか？最も適切な個所を1つ選んで○をしてください。



付録 2：研究 2, 3 で用いた質問項目（情動経験および表情表出）

先ほどの映像視聴中のあなたの感情状態についてお答えください。

各項目に関してあなたがどの程度感じているか、映像視聴中の感情状態として最も適切な数値を1つ選んで、○で囲んでください。

	全 く 感 じ な い	非 常 に 強 く 感 じ る		全 く 感 じ な い	非 常 に 強 く 感 じ る
怒り	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6		嫌悪	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	
驚き	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6		楽しさ	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	
悲しみ	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6		満足	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	
恐怖	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6				

上記のような感情状態に関して、あなたは映像視聴中、どの程度表情や行動に表しましたか？
最も適切な数値を1つ選んで、○で囲んでください。

全 く 表 さ な か っ た	非 常 に 大 き く 表 し た
0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	

付録3：研究2, 3 で用いた質問項目（ネガティブ映像に関する記憶テスト）

先ほどの映像の内容についての質問にお答えください。

各質問に関して、映像の内容として最も適切と思われる答えを1つ選択し、そのアルファベットを○で囲んでください。

さらに、その答えにどの程度確信があるか、最も適切な数値を1つ選んで、○で囲んでください。

	全 く 確 信 が 無 い	非 常 に 確 信 が あ る
1 群集は何方向から集まってきたか？ a. 1 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	
2 最初に後姿をアップにされた警官の数は？ a. 6 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	
3 警官の第一声は？ a. そこまでだ、止まれ b. 静かにしろ c. 何をしている d. やめろ、命令だ e. 警察だ	0—1—2—3—4—5	
4 警官の次の言葉は？ a. あきらめろ b. これは不法集会だ c. 何をしている d. いい加減にしろ e. もう終わりだ	0—1—2—3—4—5	
5 何分以内に解散するように命令したか？ a. 1 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	
6 威嚇射撃をした警官は何人？ a. 1 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	
7 警官の最後の言葉は？ a. 仕方ない b. 撃て c. 帰れ d. 時間だ e. 黙れ	0—1—2—3—4—5	
8 最初に銃を連射し始めた警官は何人？ a. 1 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	
9 最初に銃で倒れた子どもの服の色は？ a. 黒 b. 白 c. グレー d. 茶色 e. 赤	0—1—2—3—4—5	
10 その子どもはどこを撃たれた？ a. 足 b. 腕 c. 肩 d. 背中 e. 頭	0—1—2—3—4—5	
11 個々に逃げ始めたシーンの最初は何人で逃げていた？ a. 1 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	
12 次に、車のそばで撃たれて倒れた男のシャツの色は？ a. 黒 b. 白 c. グレー d. 黄色 e. 赤	0—1—2—3—4—5	

	全 く 確 信 が 無 い	非 常 に 確 信 が あ る
13 その男はどこを撃たれた？ a. 足 b. 腕 c. 肩 d. 胸 e. 頭	0—1—2—3—4—5	
14 次に倒れて運ばれていたのは何人？ a. 1 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	
15 水場にいた人は何をしていた？ a. 手当てをしていた b. 水を飲んでいて c. 陰に隠れていた d. 水汲みをしていた e. 体に水をかけていた	0—1—2—3—4—5	
16 フェンスに向かって逃げていた男のシャツの色は？ a. 黒 b. 白 c. グレー d. 黄色 e. 青	0—1—2—3—4—5	
17 その男は何箇所撃たれていたか？ a. 1 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	
18 その撃たれた男はどうなったか？ a. まだ逃げようとした b. 他の人に助けられた c. フェンスから引きずり落とされた d. フェンスから落ちた e. フェンスの上で息絶えた	0—1—2—3—4—5	
19 次に倒れて運ばれた2人のうち、左の男を運んでいたのは何人？ a. 1 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	
20 その運ばれていた男は、どこに血がついていたか？ a. 足 b. 腕 c. 肩 d. 背中 e. 頭	0—1—2—3—4—5	
21 一人の少年を追いかけた車の色は？ a. 黒 b. 白 c. グレー d. 黄色 e. 赤	0—1—2—3—4—5	
22 少年のシャツの色は？ a. 黒 b. 白 c. グレー d. 黄色 e. 青	0—1—2—3—4—5	
23 少年は何度振り返ったか？ a. 1 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	
24 少年は何発撃たれたか？ a. 6 b. 5 c. 4 d. 2 e. 3	0—1—2—3—4—5	

付録 4：研究 4 で用いた質問項目（受け手の情動経験および表出者の情動推測）

映像人物と対峙中のあなたの感情状態について、お答えください。
以下の項目に関して、その映像人物と対峙中にあなた自身がどの程度感じていたか、最も適切な数値を 1 つ選んで、○で囲んでください。

	全く感じていない	非常に強く感じている		全く感じていない	非常に強く感じている
悲しみ	0—1—2—3—4—5—6		怒り	0—1—2—3—4—5—6	
嫌悪	0—1—2—3—4—5—6		恐怖	0—1—2—3—4—5—6	
幸福	0—1—2—3—4—5—6		驚き	0—1—2—3—4—5—6	

映像人物の感情状態について、お答えください。
以下の項目に関して、その映像人物がどの程度感じていたと思うか、最も適切な数値を 1 つ選んで、○で囲んでください。

	全く感じていない	非常に強く感じている		全く感じていない	非常に強く感じている
悲しみ	0—1—2—3—4—5—6		怒り	0—1—2—3—4—5—6	
嫌悪	0—1—2—3—4—5—6		恐怖	0—1—2—3—4—5—6	
幸福	0—1—2—3—4—5—6		驚き	0—1—2—3—4—5—6	

付録 5：研究 4 で用いた質問項目（表出者に対する印象および表出者の表情の真偽判断）

映像人物の印象について、お答えください。

以下の項目に関して、その映像人物に対してあなた自身がどのような印象を持ったか、最も適切な数値を 1 つ選んで、○で囲んでください。

利己的な 1—2—3—4—5—6—7 利他的な

非活動的な 1—2—3—4—5—6—7 活動的な

疑い深い 1—2—3—4—5—6—7 信じやすい

魅力のない 1—2—3—4—5—6—7 魅力のある

非社交的な 1—2—3—4—5—6—7 社交的な

好ましくない 1—2—3—4—5—6—7 好ましい

映像人物の表情について、お答えください。

映像人物の表情がどれくらい本当の感情を表していたと思うか、最も適切な数値を 1 つ選んで、○で囲んでください。

非常に 1—2—3—4—5—6—7 非常に
表れていない 表れている

付録 6：研究 5 で用いた質問項目（参加者自身の情動経験と表情表出）

- 会話中，以下の各項目について，あなたはどの程度感じましたか？

それぞれ，最も適切なものを 0(全く感じていなかった)～6(非常に強く感じていた)の中から 1つ選択して，その数字に○をして下さい。

	全く感じて いなかった	非常に 強く感じ ていた		全く感じ ていな かった	非常に 強く感じ ていた
怒り	0—1—2—3—4—5—6		恐怖	0—1—2—3—4—5—6	
驚き	0—1—2—3—4—5—6		嫌悪	0—1—2—3—4—5—6	
悲しみ	0—1—2—3—4—5—6		幸福	0—1—2—3—4—5—6	

- 会話中，以下の項目について，あなたの表情にどの程度表れていたと思いますか？

それぞれ，最も適切なものを 0(全く表れていなかった)～6(非常に強く表れていた)の中から 1つ選択して，その数字に○をして下さい。

	全く表れ ていな かった	非常に 強く表れ ていた		全く表れ ていな かった	非常に 強く表れ ていた
怒り	0—1—2—3—4—5—6		恐怖	0—1—2—3—4—5—6	
驚き	0—1—2—3—4—5—6		嫌悪	0—1—2—3—4—5—6	
悲しみ	0—1—2—3—4—5—6		幸福	0—1—2—3—4—5—6	

付録 7：研究 5 で用いた質問項目（会話に対する評価および調整者に対する親密感）

- 会話中，以下の項目について，あなたはどの程度感じましたか？

それぞれ，最も適切なものを 0(全く感じなかった)～6(非常に強く感じた)の中から 1 つ選択して，その数字に○をして下さい。

	全く感じ なかった	非常に 強く感じ た
会話の温かさ	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	
会話の滑らかさ	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	
相手と意気投合した と感じた程度	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	

- 相手の印象についてお答えください。以下の各質問について，あなたはどの程度感じましたか？

それぞれ，最も適切なものを 0(全く思わなかった)～6(非常に強く思った)の中から 1 つ選択して，その数字に○をして下さい。

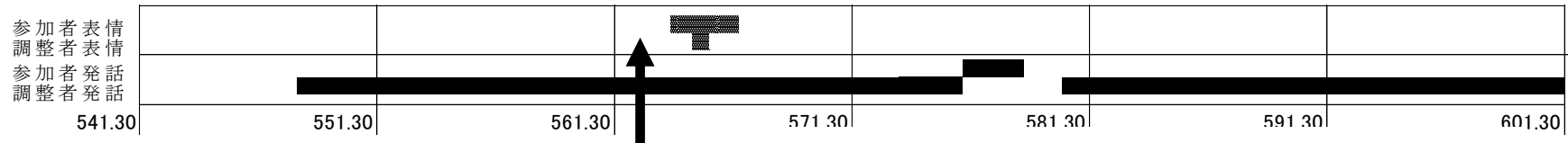
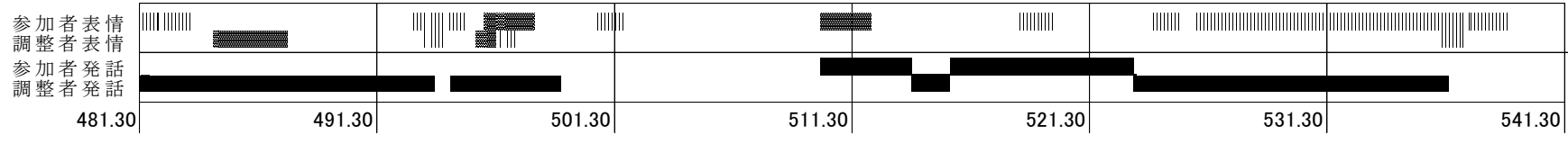
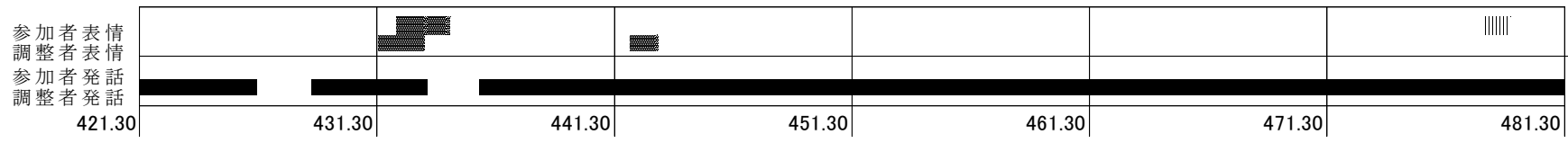
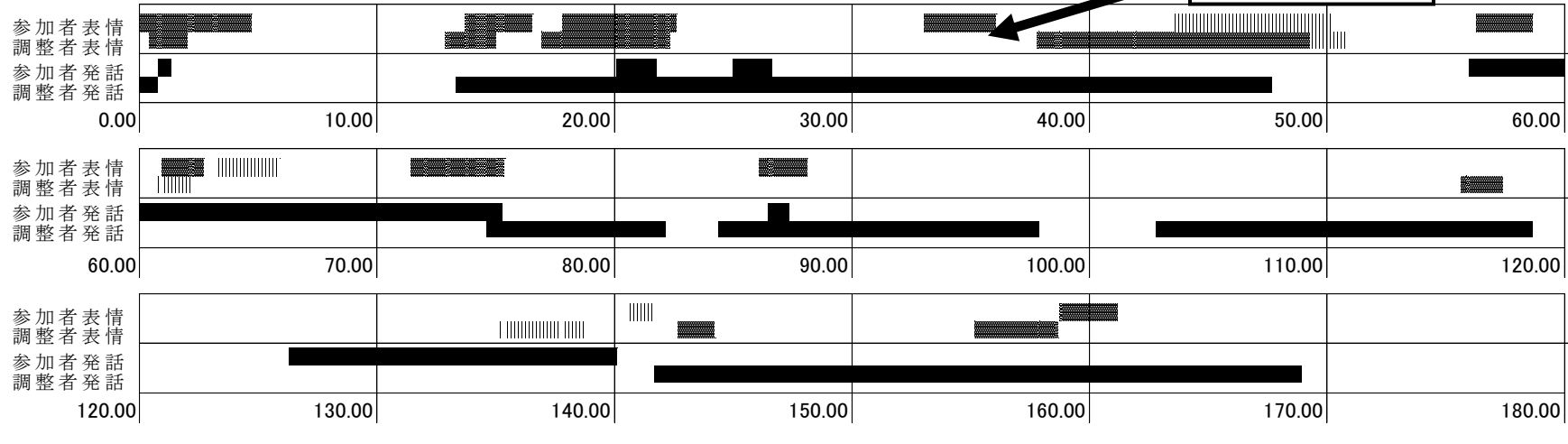
	全く思わ なかった	非常に 強く思っ た
相手のことを好ましく思いましたか？	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	
相手と気が合うと感じましたか？	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	
相手はあなたのことを好ましく思っている，と思いますか？	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	
相手とまた話してみたいと思いますか？	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	
相手と仲の良い友だちになれると思いますか？	0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6	

付録 8: 研究 5 で用いた質問項目 (第 3 者による会話に対する印象評定)

	非常に	やや	どちらとも いえない	やや	非常に	
温かい	1	2	3	4	5	冷たい
意欲的な	1	2	3	4	5	無気力な
感じの良い	1	2	3	4	5	感じの悪い
感情的な	1	2	3	4	5	理性的な
親しみやすい	1	2	3	4	5	親しみにくい
主観的な	1	2	3	4	5	客観的な
積極的な	1	2	3	4	5	消極的な
わかりやすい	1	2	3	4	5	わかりにくい

付録 9 : 研究 5 における各組の会話のタイムライン図 (表出抑制条件 12 組)

表情表出例時点



表情表出例時点

横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ;

■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出

◆前ページの組の表情表出例

前 3 分（会話開始から約 36 秒後時点）



調整者



参加者

後 3 分（会話開始から約 562 秒後時点）



調整者



参加者



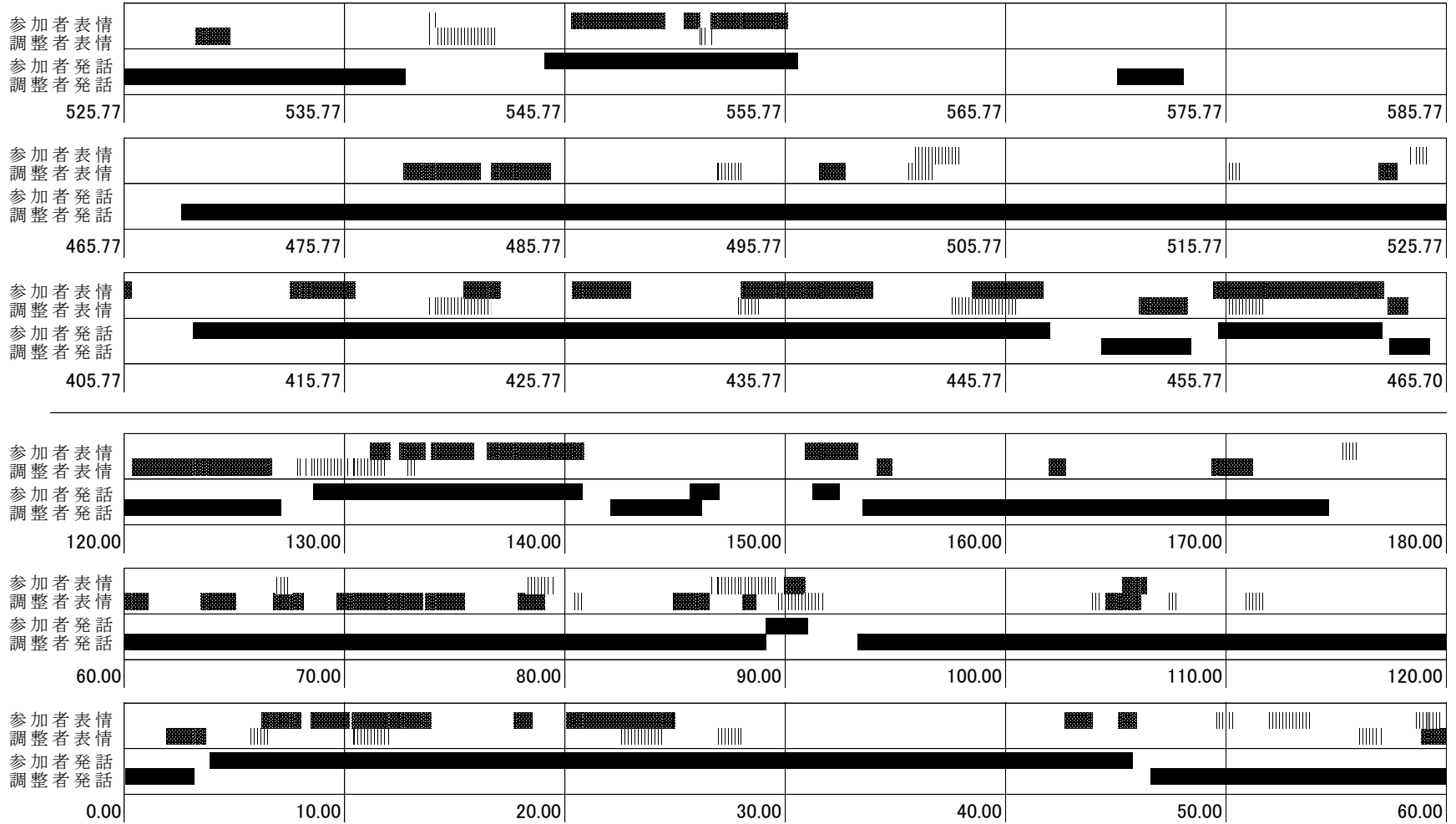
横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■■■■ がポジティブ表出, |||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出



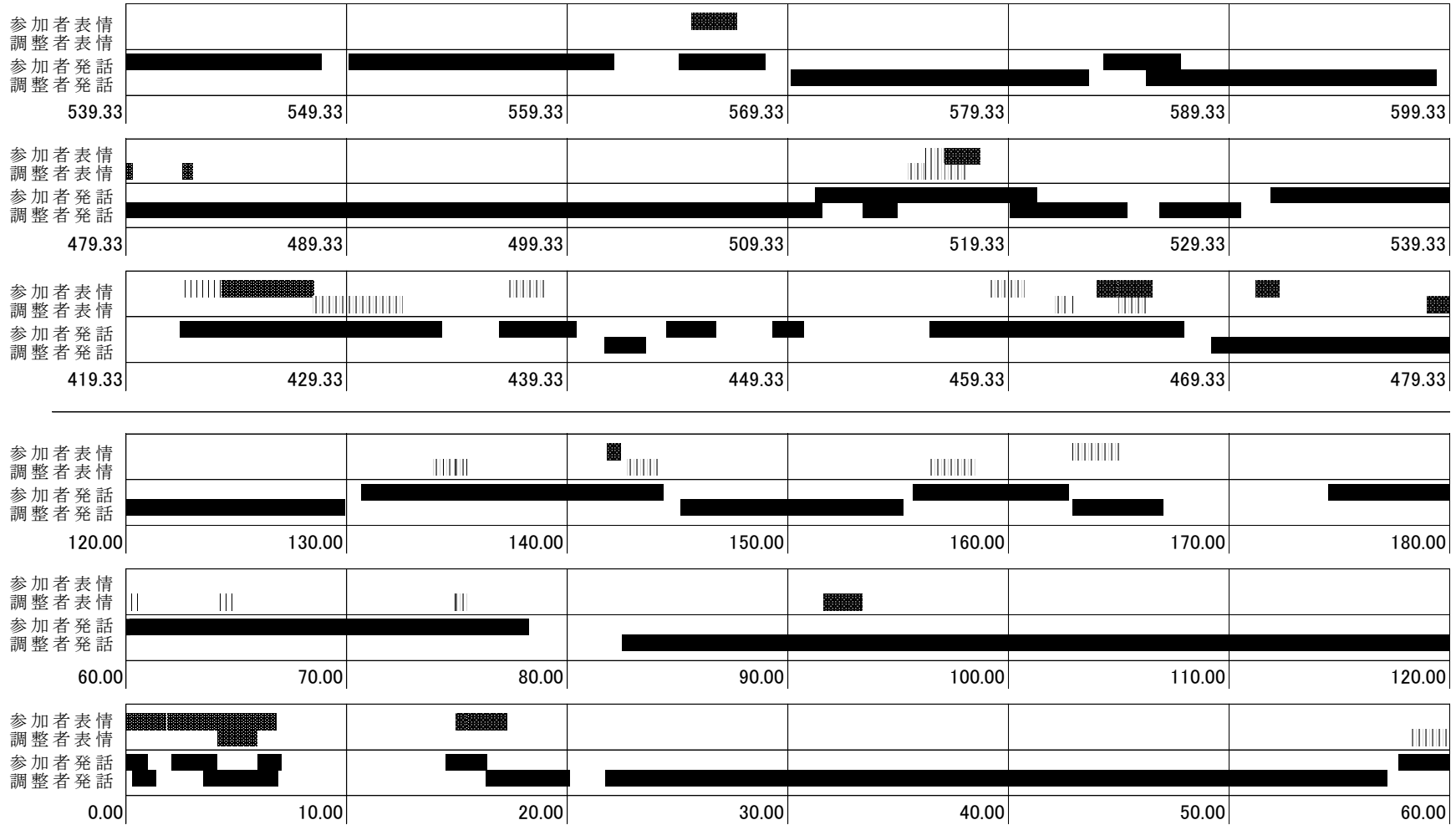
横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出

付録 10：研究 5 における各組の会話のタイムライン図（表出誇張条件 12 組）

表情表出例時点



表情表出例時点

横軸：経過時間 (s)；上 3 段が前 3 分，下 3 段が後 3 分；

■ がポジティブ表出，|| がネガティブ表出

◆前ページの組の表情表出例

前 3 分（会話開始から約 38 秒後時点）



調整者



参加者

後 3 分（会話開始から約 562 秒後時点）



調整者



参加者



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出



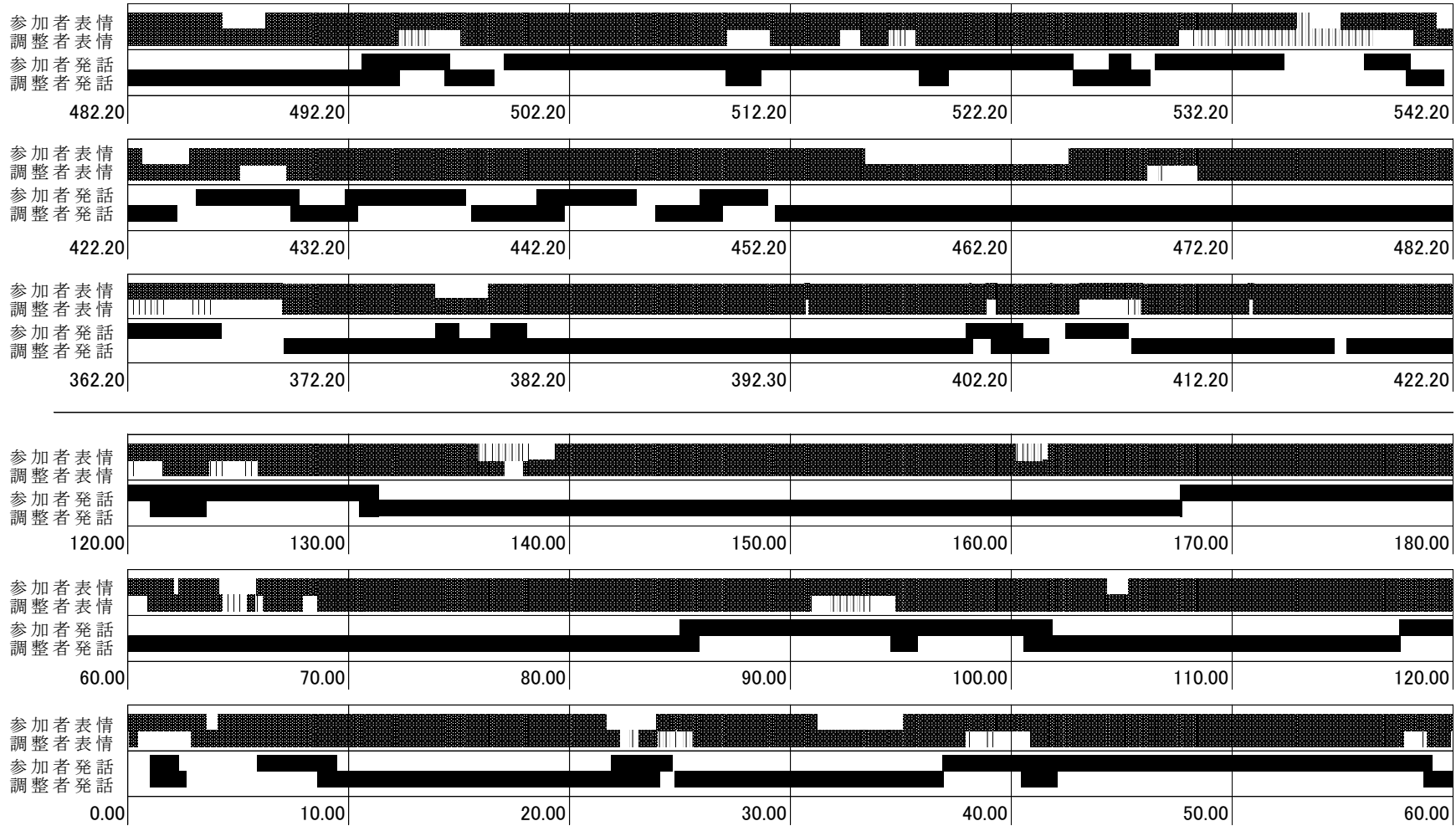
横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, ||| がネガティブ表出



横軸：経過時間 (s) ; 上 3 段が前 3 分, 下 3 段が後 3 分 ; ■ がポジティブ表出, || がネガティブ表出

初出一覧

第 1 章 情動調整に関する研究動向

未発表

第 2 章 表情表出による情動調整が行われるプロセス

研究 1：野口素子（2012）．表情表出による情動調整の日常経験に関する調査 京都大学大学院教育学研究科紀要，58，439-451.

第 3 章 表情表出による情動調整が調整者自身に及ぼす影響

研究 2：野口素子・吉川左紀子（2009）．表情表出の抑制・誇張が主観的情動経験に及ぼす影響 感情心理学研究，17，12-18.

研究 3：野口素子・吉川左紀子（2007）．ネガティブな表情表出のマスクングによる情動調整の特性 日本心理学会第 71 回大会発表論文集，969.

第 4 章 擬似的対人場面において表情表出による情動調整が受け手に及ぼす影響

研究 4：野口素子・吉川左紀子（2010）．表情表出による情動調整が受け手の情動と対人印象判断に及ぼす影響—不一致表出に着目して— 対人社会心理学研究，10，147-154.

第 5 章 2 者の会話における表情表出による情動調整について

研究 5：野口素子・吉川左紀子（印刷中）．2 者の会話における表情表出の抑制・誇張が受け手の表情表出及び発話に及ぼす影響 感情心理学研究，21，1-9.

第 6 章 総合考察

未発表

注．公刊されたものは，いずれについても加筆・修正を行っている。

謝辞

本論文は、筆者が京都大学大学院教育学研究科在学中（2004年度～2013年度，うち2度にわたる休学期間2年間を含む）に実施した研究をまとめたものです。

指導教官である吉川左紀子先生には、学部3年次から12年の長きにわたり、研究計画および実験・調査の実施，学会発表，論文執筆において，多大なご支援とご指導をいただきました。筆者自身が研究に打ち込める環境をなかなか作ることができずご迷惑をおかけしたにも関わらず，いつも変わらず親身に相談に乗ってくださり，多くのご助言をくださいました。先生とのミーティングにおいて，研究の内容だけでなく世の中の情報や子育てについてなど多岐にわたり話すことで，自身の研究のあり方について深く考えることができました。先生には心より感謝申し上げます。

本論文の副査である子安増生先生，楠見孝先生からも多くのご指導とご助言をいただきました。子安先生は，発表の仕方，研究の位置づけなど研究の基本を常に意識させてくださいました。楠見先生は，分析方法や今後の展望についてご助言くださり，研究の成果が意義あるものになるようご配慮くださいました。また，教育認知心理学講座の斎藤智先生，野村理朗先生にもコロキアムを通じて貴重なご助言，激励をいただき，本論文を執筆する励みとなりました。心より御礼申し上げます。

吉川研究室の先輩である長岡千賀先生（追手門学院大学大学院経営学研究科准教授），野村光江氏（関西看護医療大学看護学部 特任助教）には，公私にわたりお世話になり，研究を進める中であらゆることに親身に相談に乗っていただき，多大なご助言をいただきました。お二方がいなければ，ここまで研究を続けることはできませんでした。心よりお礼申し上げます。

教育認知心理学講座の院生の方々にも，授業だけでなく研究会や院生室でのディスカッションを通じて，多くのご助言をいただきました。溝川藍氏（現 明治学院大学心理学部 助教）には，研究について多くのご助言と励ましをいただきました。栗田季佳氏（現 名古屋大学大学院環境学研究科），本間涼子氏には，実験者および実験協力者としてご協力いただきました。おかげで，貴重な

実験データを収集することができました。大学に行く機会が少なかった筆者をいつも温かく迎えてくれた皆様に心より感謝申し上げます。

また、本研究で行われた実験の多くは表情を撮影させていただく必要があったため、参加者の方々のご負担も少なくなかったことと思います。快く実験・調査にご参加くださった皆様、データ分析にご協力くださった方々にも深く感謝申し上げます。

最後に、筆者の研究生活を支えてくれた家族、両親に感謝の気持ちを送りたいと思います。筆者は、博士課程在籍中に結婚し、2人の子どもを出産する際に2度の休学をしました。家事や育児を後回しにして研究を続けることに理解を示してくれた夫、時には離れて寂しい思いをさせた息子と娘に心より感謝します。また、陰ながらずっと応援してくれた両親、特に、博論の完成を心待ちにしながら先日他界した父に感謝の気持ちと本論文を送りたいと思います。